



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2020 年度公開講座講演・対談録：観光現場の挑戦（CATS叢書；第14号）全1冊
Author(s)	岡田，真弓；山村，高淑；木村，宏 他
Citation	CATS 叢書，14
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81467
Type	journal
File Information	CATS14.pdf



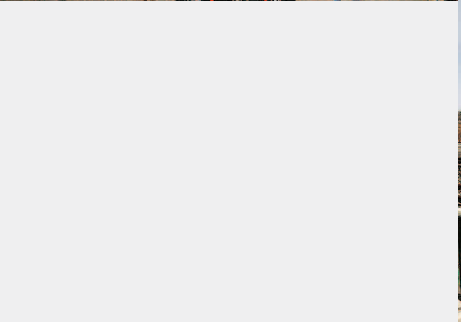
Proceedings for 2020 CATS
Extension Course
**Challenges Confronting
the Field of Tourism**

Edited by
Mayumi Okada
Takayoshi Yamamura
Hiroshi Kimura
Chiaki Shimoyasuba
Yusuke Ishiguro

Center for Advanced Tourism Studies
Hokkaido University

二〇二〇年度公開講座講演・対談録
観光現場の挑戦

CATS 叢書



cats Library Vol.14

14

cats 叢書 第14号

2020年度公開講座講演・対談録
観光現場の挑戦

岡田真弓・山村高淑・木村宏・下休場千秋・石黒侑介 編

北海道大学観光学高等研究センター

岡田真弓・山村高淑・木村宏・下休場千秋・石黒侑介 編
北海道大学観光学高等研究センター



Center for Advanced Tourism Studies
HOKKAIDO UNIVERSITY

北海道大学 観光学高等研究センター
〒060-0817 北海道札幌市北区北17条西8丁目
TEL 011-706-5382 FAX 011-706-5362

www.cats.hokudai.ac.jp



C A T S 叢書

第 14 号

2020 年度公開講座講演・対談録

観光現場の挑戦

岡田真弓・山村高淑・木村宏・下休場千秋・石黒侑介 編

北海道大学観光学高等研究センター

2021 年

〈現場の声〉から学ぶ観光の本質

——巻頭言に代えて

山村 高淑

北海道大学観光学高等研究センター センター長／教授

本書は、北海道大学観光学高等研究センターが2020年12月から2021年1月にかけてオンラインで開催した、全5回の公開講座『観光現場の挑戦』の講義録です。まずご登壇頂きましたゲスト講師の皆様、主催者を代表いたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、2019年に始まる新型コロナウイルス感染症の世界的流行（パンデミック）は、世界中の観光現場に未曾有の打撃を与えました。それまでの、入込客数を増やすことで地域に落ちる経済的利益を最大化していこうという観光開発戦略が、大きな見直しを迫られることになったのです。経済的利益を達成するために敢えて見て見ぬふりをしてきた、いわゆるオーバーツーリズム（地域の環境的・社会的許容度を越えた観光活動）による弊害が、新型コロナウイルスの流行によって、命にかかわる問題として目の前に突き付けられたと言っても過言ではありません。さらに言えば、観光分野にとどまらず、人の移動や人口密度など、日々の生活のあり方そのものの再考も迫られています。観光を含めた〈持続可能な人間生活のあり方〉が根本的に問われているわけです。

誤解を恐れずに言えば、こうした状況の中、私たちが考えなければならない本質的論点は、おそらく、〈有限な地球環境の中で人類が安全且つ持続的に暮らしていくための適正規模〉とはどのあたりにあるのだろうか、という命題に集約されます。言い方を変えれば、居住・労働・移動等といった生活様式の適正規模はどのあたりにあり、産業の適正規模はどのあたりにあるのか？そして、どのようにそうした適正規模へ向けた変革を実行し、持続可能な人類の暮らしを担保できるのか？……こうした命題です。そしてこうした命題に取り組むうえでは、私たちは、私たちが今生きている、〈暮らしの場〉としての〈地域〉を核として捉え直したうえで、〈生活者〉としての私たち自身の手で、持続可能なシステムを構築していくことが必須となります。

これを観光現場に当てはめて具体的に考えれば、それは、例えば次のような課題として挙げられるでしょう。すなわち、観光スポットやアトラクションの多様化・分散化、環境や社会へのインパクトの少ない小規模・高収益で且つ持続可能な産業構造への転換、特定の国や地域といったマーケットへの過剰な依存からリスクの分散へ、最重要市場としての地元・近隣地域の再評価、単なる商取引としての観光交流から信頼構築の仕組みとしての観光交流

へのシフト、等といった課題です。

2006年の設立以来、私ども北海道大学観光学高等研究センターは、コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する研究と実践を、地域の観光現場の皆様との共同研究の形で継続して参りました。具体的には、北海道を中心に日本各地の観光現場の最前線で先駆的取組みをなさっている実務家の皆様と一緒に、21世紀の地域社会が抱える様々な課題の解決に、観光という仕組みがどのように貢献できるのか、理論的・実践的な研究・教育に取り組んで参りました。こうした実務家の皆様は、私どもセンターのスタッフにとって、実践的研究のパートナーであると同時に、様々な現場の知識をご教授下さる先生でもあります。

今回の公開講座は、上述したような命題・課題が社会的にも大きく注目されるコロナ禍の今だからこそ、こうした観光現場の第一人者である皆様がゲスト講師としてお招きし、あらためて現場でのご経験、ご苦悩、未来への思いに真摯に耳を傾け、〈現場の声〉を通して観光の本質・課題・可能性についてじっくりと考えてみたい、という趣旨で企画されたものです。

本書は、そうした〈現場の声〉を講義録として残し、広く一般に公開することで、読者諸賢が今後の観光のあり方を考えるうえでの一助となれば、という思いで編集を行いました。お手に取って、あるいはオンラインにて、ご高覧賜りましたら幸いです。

なお、今回の公開講座はオンライン（ウェビナー）形式で開催致しました。弊センターと致しましては、これが初の、オンラインでの公開講座開催の試みでありました。様々な試行錯誤がございましたが、日本全国のみならず海外からもご聴講頂くことができたのは、スタッフにとって大きな喜びでありました。ご聴講を頂いた皆様、本当に有難うございました。

オンライン開催は、弊センターのように規模の小さな組織でもできることがあること、地域の皆さんと大学との協働のあり方の幅を広げることができること、を私たちに教えてくれたように思います。今後もこうした取り組みを継続して参りたいと思います。引き続きのご支援を何卒宜しくお願い申し上げます。

2021年3月1日

目 次

序文	山村 高淑	i
第1回 環境と観光——市民活動としての環境保全とフットパス	小川 巖、下休場 千秋	1
第2回 町をつなぎ人をつなぐ、1,025km のみちづくりへの挑戦	桜庭 佑輔、相澤 久美、木村 宏	51
第3回 観光を通してアイヌ文化の継承を目指す——阿寒湖アイヌコタンの挑戦	廣野 洋、岡田 真弓	107
第4回 ツーリズムを通じた心の復興に向けて——埼玉県と大槌町の挑戦から	島田 邦弘、安藤 彰紀、山村 高淑	141
第5回 ボールパークで実現する新たなコミュニティの創造——ファイターズの挑戦	佐藤 拓、石黒 侑介	173
資料		
登壇者一覧		191
2020 年度公開講座リーフレット		195

第 1 回 環境と観光

——市民活動としての環境保全とフットパス

小川 巖

エコ・ネットワーク 代表

下休場 千秋

北海道大学観光学高等研究センター 特任教授

1. はじめに

（下休場千秋） 皆様、観光現場の挑戦をテーマとする 2020 年度の公開講座にご参加いただきありがとうございます。これから第 1 回公開講座を開始いたします。本日のゲスト講師の小川巖様をご紹介したいと思います。

小川様は札幌を拠点に 30 年近く活動されてきたエコ・ネットワークという市民環境団体の代表をされています。これから約 1 時間、「環境と観光、市民活動としての環境保全とフットパス」というテーマでお話をしていただき、後半約 20 分対談形式でさらに深く掘り下げたお話をお伺いいたします。

遅れましたが、私は本日の担当教員、観光学高等研究センターの下休場と申します。よろしく願いいたします。それでは、小川様、よろしくお願いいたします。

2. 環境と観光——市民活動としての環境保全とフットパス

2-1. エコ・ネットワークの活動紹介

（小川巖） ただ今ご紹介いただきましたエコ・ネットワーク、小川巖です。今回、「環境と観光」という非常に大きなテーマをいただいて、ちょっと戸惑ったんですけど、主催者である北海道大学観光学高等研究センターの下休場先生から、エコ・ネットワーク設立の経緯とか、活動内容、そういったことについてもぜひ話してほしいということでしたので、私らがこれまでやってきたことを振り返るいい機会になると考え、その内容を今日は整理してお話したいと思います。

前半は、文字がずらずら出てきますけど、後半で関係する映像はたくさん出てきます。本題に入る前に、私自身とエコ・ネットワークの簡単な履歴についてお話をします。

私は 1945 年、北海道松前町で生まれています。ここに書いた通りで、正真正銘の道産子

なんですよ。育ったのが神奈川県横須賀市ですから、気持ちとしては何かまだ北海道人になり切っていないような、そういうところもありますけど、すでに札幌に来てから 50 年たちました。今年の 8 月、いよいよ後期高齢者にめでたく入ることができました（図 1）。

これからまた、あと何年やれるか分かりませんが、この活動を続けていくつもりです。これをぞっと見ていただくとお分かりの通り、西暦の 2000 年を越すあたりからフットパスという言葉が目立つようになってきますね。取りあえず 10 年ごとに区切って、その間に我々がどういう活動をしたのかということをかいつまんでお話ししたいと思います。

2-2. エコ・ネットワークの立ち上げ（図 2）

1992 年にエコ・ネットワークを立ち上げました。実はその前に、1984 年に設立した野生生物情報センターを 8 年やりまして、そこを 1992 年に解散して、私はエコ・ネットワークを設立しました。

エコ・ネットワークを立ち上げた当初、そんなことで飯を食っていけるのかとか、いろいろ心配する向きがありまして、友達の何人かは、さて何カ月持つかという賭けをしたそうです。その賭けは当たらず今日まで 30 年近くやってこられた。それは、私たちにそういう何か力量があったというよりは、ここに大きく書いている通り、ちょうどそのころがバブル景気の前後だったんですね。

景気もずっと上向いていまして、そういう中で、例えば資金的な面でも助かったのは確かです。それと野生生物とか自然への関心が高まってきた、そういう時期だったと思います。

それともう 1 つ忘れられないのが、アウトドアブームですね。そういう動きがこのあたりから始まったんじゃないかと。こういった要因に助けられて私たちは何とか今日までやってこられたというふうに、今にして思えば感じているわけです。

それで、一番下書いてある通り、大きな流れとしては、野生生物情報センターはその名前の通り野生生物、それと自然、そういったものをテーマにしていました。それがエコ・ネットワークを立ち上げた時点で、環境分野にも足を踏み入れて、そちらにも活動の幅を広げたいという気持ちがあったわけですね。

そして、2000 年を越して何年かたったあたりから、フットパスというものが私らの活動の主要テーマとして浮上してきたというか、そんな感じがいたします。ではこの後は 10 年刻みで我々がやってきた主な活動を見ていきたいと思います。

2-3. 1980 年代：野生生物情報センターの時代（図 3）

ここにありますが 1980 年代、これは野生生物情報センターの時代です。それで、私らは自分たちの組織をつくった際に、一種の中間組織のような形態を取ってまして、ここに「受託組織」と書いてある通り、日本野鳥の会の札幌支部、さつぼろ野の花の会、それから野生動物写真研究会とかね、こういった会を引き受けてその運営のお手伝いをするのも業務

でした。

そして、テーマで見ていただければお分かりの通り、やはり野生生物とか植物とかそういったものが活動の主体であり、かつ主なテーマということが言えるんじゃないかと思います。一番最後にその活動を要約すると、野生生物の観察や調査とか、自然に関連したさまざまな行事。例えば、写真展とか映画会とか、そういったものを手掛けたり、いろいろなところに行って講師を務めた。そして実際に野外活動を行ってきた等、これがだいたい1980年代の我々の活動ということが言えるかと思います。

2-4. 1990年代：エコ・ネットワークの立ち上げ（図4）

次が、エコ・ネットワークが立ち上がった1990年代ということになります。受託組織としては、ヒグマの会、これも今も続いて、確か去年設立40年を迎えました。それから野生動物救護研究会、こういう組織の事務局を私らがお手伝いしておりました。

テーマを見ていただくと、野生生物情報センター自体のテーマをいくつか引き継いだ形のものも当然あります。それと、少し状況が変わってきたのは、赤で示した、例えば「ワンデイウォーク」、それから「ナショナルトラスト&ピーターラビットツアー」という、これはイギリスの湖水地方へ行くツアーなんですね。

このときに、向こうのフットパスに出合ったというかな。実際にそこを歩いて、ああ、これはやはり北海道でもやれないもんだろうかというようなことを考えた、そういうきっかけになったわけですね。

それから、「かんじきウォーク」というのは、これからの時期雪が降りますと、外を歩くというのはちょっと難しくなるので、それだったらかんじきを履いて歩く活動。黒松内に住んでおられた渋谷吉尾さんという名物おじさんがかんじきを何千足も作った方です。その方から少しずつかんじきを分けていただいて、冬を楽しむということをやった。これは今も人気の行事として定着しております。

それから「エコ・ウォーキング」というのは、北海道新聞の子会社である道新文化センターが歩く野外講座をやりたいという話を持ってこられた時に、じゃあ、エコ・ウォーキングという名前でやりましょうということで。春と秋にやるわけですが、各5回です。春なら春で5回。火曜日なら火曜日に5回やりました。

それからその次にだんだん参加者が増えてきましたので、では週に2回、火曜日と金曜日にもやろうと。それから今度は、土曜日もやろうということで、週3回、5回ずつ。ですから春と秋に各15回、多いときには1回50人ぐらい来ましたから、相当な数になるわけですね。

これは現在も続いております。人気講座として定着しております、これが後になってフットパスと呼ぶようになったんですが、そういう行事をやる際の人的資源になったんじゃないかなというふうに思っています。

このあたり、新しい組織をつくったわけですから、自然体験から少し幅を広げて環境体

験という方向にいくようになりました。それと今度は、自然とか環境系の団体と連携して行うということですね。つまり、自分たちだけで完結するんじゃなくて、その周辺にいる人たちが団体と手を組んでやると、そういう方向にかじを切っていったわけです。

2-5. 2000年代：フットパス・ウォーキングの時代（図5）

そしてさまざまなプログラムをこちらで考えて、それを実践するというようなことをやってきたわけです。今度は2000年代です。この辺になると本当にフットパス系の行事が軒並み出てきます。札幌市内でフットパスウォーク、これはもうおそらく何十回、1年間にやっていたと思います。それ以外にも国内で3日ないし4日のツアーとして10回や15回ぐらいやっているんじゃないですか。そんな感じです。

それとは別に今度は海外にもということで、特にイギリスはフットパスの本場、発祥地ですから、そこを中心にフランスとかスペインとか、そういうところにも足を伸ばしております。それと同時に今度はフォーラムを仕掛けるようになりました。

そして今度は、フットパスをやっている各団体に呼び掛けて、全道フットパス・ネットワーク準備会を立ち上げました。最初から正式な組織がなかなかできないだろうということで、取りあえず準備会として発足しました。合わせて、持ち回りで道内各地、全道フットパスの集いというのを行ってきまして、もう30回近くになっているんじゃないですか。年2回のペースでやっております。

それとまた、「エコ・ウォーキング」ですね。先ほどもお話ししました、それは現在も、この2000年代になっても続けております。そして、テーマを要約してみますと、海外に行く、これはフットパスだけでなく、環境研修というような形で、デンマーク、イギリス、そのあたりに足を伸ばしたんですね。5〜6回は行っているはずです。

2-6. 2010年代：フットパス・ツアーの海外展開と長距離化（図6）

フットパスは、今度は、ワンパターンではなくていろいろなタイプのフットパスを進めるというようなことをやってきました。2010年代になると、さらにそれが膨らんできたといえますか、その中で最初に挙げた「済州島オルレ」。オルレというのは、済州島の方言で細い道、裏道というような感じかな、そういう意味ですけど、この島には1周する450キロぐらいのオルレができていまして、それを10年かけて全部歩きました。

なかなか魅力的なところですし、それからこれを本当に数年の間に作ってしまったというパワフルなおばさま（ヨ・ミンスクさん）がいまして、最近その方の評伝のようなものを読んだんですけど、すごいパワーだと思います。そういうことで、島を1周するオルレというフットパスですね。それができて、これはコロナ騒ぎがなければ今年も行きたいところなんですけど、収まったらまたぜひ再開したいと思っています。

それ以外にも台湾とかヨーロッパにも行っています。そして下から3行目にあります「株式会社ジオ」を立ち上げまして、これは旅行会社です。私の息子が立ち上げた会社で、我々

がフットパスを、あるいは環境体験ツアーを私達が人集めをしたのをツアーの形にしてもらうわけですね。そういう関係でやっております。

「さっぽろラウンドウォーク」のラウンドウォークというのはフットパスの長い、ロングパスとでも言ったらいいでしょうか。そういった研究会を北大が中心になって立ち上げて、私達も加わっています。札幌市とか観光協会とかそういうところが一緒になって作ったものです。これについては「フットパスの長距離化と周回化」と共に後でお話しします。そしてフォーラムを「札幌にもフットパスを！」という名称でやっております。この後になるとフットパスが本格展開する形になりましたし、それと平行して環境ボランティア等、いろいろなを手掛けてきました。それと同時に今度は我々が海外へ行くだけでなく、環境の専門家、そういった方を海外からお呼びするというようなことも何回かやってきました。

2-7. 2020年代：フットパスの新しい展開（図7）

それで今度は2020年代というのは、この2〜3年のことだと思って下さい。それからこれから先のことになりますが、2行目に「防災フットパス」、それから「廃線フットパス」と出てきます。これについても後ほど少しまとめてお話ししたいなと。

ということで、フットパスを長距離化、周回化することと同時に、私自身の中で二本柱にしている環境ボランティア、これをもっと多様な形で展開していきたいと。テーマだけでなく、人々とのつながりも含めて、あるいは行政とのかかわりも含めて、多様化していきたいと思っています。

2-8. エコ・ネットワークのポリシー（図8）

10年刻みでずっと流れを見てきまして、私たちのポリシーと言ったらちょっと大げさですけど、エコ・ネットワークというのは、極めてユニークと自分で言うのも変ですけど、言ってみればいい加減な組織なんじゃないかなと思っています。

まず、会員制は採っておりません。これは野生生物情報センターの時代からそういう方針で来ています。会員制を取りますと、会員同士の結束が非常に強まる、そういうよさはあるんですけど、会員でない方がなかなか近づけない、入ってこれないというような状況がどうしても生まれてしまう。それをなくすために会員制にはしていないことを貫いています。市民が道民がすべて会員だと思えばいいのですから。

今エコ・ネットワークには、エコ友クラブというグループを立ち上げていますが、これは歩く人のための組織であって、エコ・ネットワークの会員ではないですね。よく間違えられますけど。それと、よくNPOじゃないのかとか、NPOを取得しないのか、などと聞かれますけど、私は非NPOと言っております。

一時は海外のこともやっていますからNGOなんて偉そうに言っていましたけど、今はもう自信を持って非NPOと言っています。なぜかという、NPOにいくつか関わって

いるのがあるんですが、そういうのを見ていると、やはりかなり金銭的な面だけでなくて運営する意味でも、事業計画を立てて予算を立てなきゃいけないなど形式を整えるの
に大変手間がかかるということがあるんですね。

ですから、例えば年度計画を立てちゃうと、来年に向けてはいいでしょうけど、今日
飛び込んできてテーマに対応できるのかというようなことがどうしても出てきます。そう
いう面倒くささを一切なくして、即応性を第一に考えてのことで。

それが、例えば極端なことを言えば、突然とんでもない問題が起きたといったときに、
それにいち早くうちがコミットするということができるよさがあるわけですね。何のこ
とはない、私たちはそういう年度計画というのは作っていませんから、出てきたテーマ、我々
ができるものであればすぐにそれに飛び付くということですね。

ですから計画だとか予算には縛られない。こんな組織はたぶんないと思うんですよ。
それは私のいい加減な性格が反映していると思うんですけどね。それで今日まで何とかな
っているからちょっと不思議と言えば不思議だとよく言われるんですけど。その代わり、
ほかの団体との連携、場合によっては後押しをする、そういうものに徹するということを
我々の方針としてやってきています。

あとは行政に頼らない。というか頼りたくない。というのは、我々の動きと行政とはど
うもやっぱりかみ合わない。私は行政に6年弱ですけどいた経験から、それを今は肌身で
感じているわけですね。これについては、今から8年前に亡くなられた植物学者の辻井達
一先生、この方が、私らが1992年にエコ・ネットワークを立ち上げるということを報告に
行きましたら「そうだね、巖（ガン）さんたちがやっているのは奇兵隊だもんね、だから
せいぜいゲリラ的にやってそれに徹したらいいよ」というようなことを言われまして。こ
れは本当に僕は褒め言葉だと今でも思っています。

ミッションなんて言っていますが、今までここで言ってきたようなことを文章にする
とこんなことになるんじゃないかということですね。そのためにこんなことをやりますよ
というわけですが、だからといって、何かを実施するのに来年はこれをやる、再来年は、
そういったような縛りはほとんどありません。ただ、そうは言っても、こういうことを今
年早急にやろうとか、それは来年も続けてやりましょうとか、そういうことは当然決めて
いくわけですね（図9）。

一番最後に書籍の展示販売、それだけじゃなくて出版も結構やっております。ここで
お見せできないんですが。書籍をなぜ扱うようになったのかというと、やっぱり日銭を稼ぐ
必要があるということで、本を売ればなにがしかのお金が入るわけですから、そういうこ
とで始めたわけですね。今ブックショップという形でエコ・ネットワークの中にあるわけ
ですけど、野生生物とか自然系に絞った書籍をそろえているというのは、全道どころか
全国でも珍しいんじゃないかなと思っています（図10）。

2-9. フットパスの対象と分野 (図 11)

じゃあ、いよいよここで、私らの中心テーマ、重要テーマの1つであるフットパスの対象と分野を見てみますと、例えば対象でいえば歴史、文化、自然、それから農。「農」というのは「農業」の「農」ということになりますけれども。それから食ですね。食べ物。食べること。そういったことが対象になるわけです。

そして、分野としてここに挙げた 7K。アルファベットの K とフットパスが非常に相性がいいんだというのに気付いて、ここに羅列してみました。環境の K がありますし、次が健康、それから観光が出ていますね。交流、経済、景観、活性化と。こじつけではなく、こういったものとフットパスが密接につながっている。

ある1つのコースを考えたときに、7K 全部というんじゃなくて、あるコースについては環境かもしれない、別のコースについては観光面で意味がある、そういうコースかもしれない、というように、あるいは複数にまたがる。3つになるかもしれない。そういうようなつながりが出てくる。これがフットパスの優れた点でしょうし、ハイキングコースとはそこが違うのです。

2-10. フットパスと地域活性化 (図 12)

フットパスというのは、歩くわけですから、もちろんスローです。それからシンプルです。時間が当然かかるわけですから、滞在時間の大幅な延長ができる。よく観光の世界で長期滞在なんていう言い方をよくしますが、フットパスこそそういう長期滞在、長期というよりは中期滞在でもいいんですけど、そういう可能性があるんだというふうな思うわけです。

地域の食、食産物というのかな、食と生産物との出会い。長くその土地に滞在するわけですから、あるいは地元の人たちとの交流が促進されたり生まれるということがあると思うんです。

観光の世界では入り込み数、札幌の雪まつりには 200 万人来たとか、我が町の観光地には 1 日当たり何百人来たとか、温泉には 1 日当たり何人来たとか、そういう評価の仕方をすると思うんです。それに対してフットパスは、「人・時間」で評価すると。これがふさわしいんじゃないかなと思うわけです。

つまり、その点では観光目的のフットパスであっても、フットパスの評価というのは何人・時間というもので評価するようにした方がいいんじゃないかなと。その方が価値が明瞭になってくると思います。

例えば、ある観光地に 1 日当たり 1,000 人訪れたとします。そこに 1 時間いれば $1,000 \times 1$ ですから 1,000 人・時間という、そういう数字が得られます。その点フットパスですと、50 人。フットパスで 50 人といえばそんな無理な数字ではないと思うんですね。それで歩いて 5 時間。 $50 \times 5 = 250$ で、250 人・時間という数字が得られます。

次に 20 時間とすると、1 泊なので寝ている時間もありますから、それは取りあえず置い

ておいて、そうするともう 50 人が 1,000 人・時間。この数字は 1,000 人が 1 時間観光地を訪れる数字と同じになってしまう。これは魔法でも何でもありませんね。

私がこういう人・時間というのを考えたのは 30 年ぐらい前だったと思うんですよ。それで多少悦に入りまして、自分が考えたこういう単位になったということですね。ところが前問孝則という、僕が好きな作家が書いた文庫本（ジェットエンジンに憑りつかれた男）の中にこの人・時間が出てくるんですね。

それはどうなのかというと、戦時中にやたらめったら学徒動員とか学校の生徒を集めて飛行機工場で働かすわけです。ところが当時、今でいう工程管理という発想などない時代で、じゃあ、何人、何時間で 1 機のゼロ戦ができるのかということを考えた技術者の方がおりまして、そしたら 1 万 5,000 人・時間だとそこで出てきたんですよ。

僕のオリジナルだと思っていたんだけど、もうすでに今から 75 年以上前にそういうことを考えた人がいたんだなと。でもやっぱりそういうふうに使われるわけですから、非常に意味のある単位だなと思っています。

2-11. フットパスのこれから (図 13)

フットパスのこれからを考えると、1 つの市町村の中に 1 本または数本のフットパスを作ってきたわけですけど、そこだけだったらハイキングコースと変わらないと最近よく思うんですよ。だから、そこからもっと突き出ないといけないと思うんです。それはいろいろな展開が可能なはずです。

1 つは、周回ですね。サーキュラーフットパス。これは先ほどもちょっと出てきましたけど、さっぽろラウンドウォーク、これは開設が間近ということで、来年か再来年か分かりますが打ち上げるはずです。札幌の周辺をぐるっと回る周回でフットパスをつくりますと、120 キロから 150 キロぐらいになる。

コースの取り方によって距離は変わるわけです。そういうものができたら、どうでしょうか、地元の人だけでなく、観光に訪れた人、あるいはそういうフットパス歩きを楽しむ人が、1 回じゃ歩ききれないですよ。20 キロ歩いたとしても 1 週間ぐらいということになりますよ。

そうするとさっきの人・時間でいったらすごい数字になってくるわけです。そういう期待ができるわけです。実際、もうすでに京都では京都一周トレイルというのができているんです。東山から北山の方。それから嵐山のある西山の方ですね。そこを馬蹄型のようにぐるっと囲む、130 キロぐらいのコースがあるんです。

実は僕らは京都一周トレイルに行く予定になっていたんです。ですけれども、札幌発のツアーも控えろということになって取りやめになっていますけど、僕らは去年もう行っていて、なかなかいいです。

お寺とか神社の周辺は、人だかりがすごい状態ですけど、その一周トレイルの方に行くとな非常に静かで、それなりに人も歩いてまして、海外の人が目立ちました。それから広

島も、広島市を中心にぐるっと取り囲む、どちらかというと山をつなげたようなコースで、これも 300 キロ近いコースです。

宮島、厳島神社のあたりもコースに入っています。ですからもう国内でも周回パスができていまして、それに続く形で札幌もそういうものを作る段階にきています。道内の他の地域でも、こういう考え方でいけばどこでもできると思うんです。

そうすれば、観光地を巡ってどこかに行ってしまう人たちが、じゃあ、そこを 1 つか 2 つコースを歩いてみよう。人間というのは面白いもので、僕らがまさに済州島でそうだったように、何コースか歩いちゃうと、では全部歩いてやろうなんていう気持ちになってくるんですね。

だから、そういう呼び込み方もできるわけですから、道内ほかの地域でも周回パスをこれからどんどん進めていきたいと思っています。それともう 1 つはロングパス。これは、隣の町とまずつながるのが始まりになるわけです。

今まで道内に 40 ぐらいの地域でフットパスをやっている地域があるわけですけど、なかなか隣の町につながらない現実があります。これは考えてみたらすぐ分けることで、自分の町がいくら盛り上がっていても隣の町に行くとまったくそうでない、全然フットパスに関心のないというようなケースがよくあるんです。

だから、それをいかに突破するか。つまり隣の町の人をその気にさせるかということから始めなくてはなりません。僕らは町から町へはもちろんなんですけど、前々から考えていたのは、稚内からサハリンに行ったらどうか。すでにサハリンで下見を済ましてきて、これは十分フットパスと言えるだけのコースがあるということを見てきました。

それから函館から青森の方に行ってもいいわけですし、ボーダーツーリズムという言葉も最近あるようですけど、そういうスケールでロングパスがつながっていけばいいかなと思っています。

それから札幌から各方面、例えば小樽やニセコ、新千歳空港、それから石狩、石狩のずっと奥の浜益の方まで歩くロングパスウォークは何年も前から実施しています。

2-12. 新たなフットパスの創出

あと、一番最後の「新たなフットパスの創出」。これは先ほど 2020 年のところでちょっと話しましたが、フットパスをこれからどう展開するかといったときに、こんな形のフットパスもやれるんじゃないかということで挙げました。ひとつは「防災フットパス」です。「防災フットパス」と言ってもいいかもしれない。

2 年前でしたかな、宮城県石巻市の大川小学校がありますね。84 人の子供たちと先生が津波で亡くなった。あそこを実際に見てきたんですよ。ぜひ向こうを歩きに行ったときに足を伸ばそうと思い行ってきました。

そうしましたら、学校のすぐ 50 メートルぐらい先に山が迫っていて、山腹には子供たちがそこで何か作物を作る農園みたいのがあるんですね。にもかかわらずそちらに逃げない

で、わざわざ河口に近い方に行ってああいう悲劇を生んでしまったわけです。

ですから地元の人もそうですし、学校の先生、子供たちも含めて日ごろから歩ける、そういう道があって、これを避災フットパスというふうと呼んだったらどうかと思うんです。そういうものがあれば気楽に逃げ込めたんじゃないかと。長い距離である必要はない。それはゆくゆく考えていけばいいですから。

北海道でいえば例えば日高地方は津波の時にかなり被害が想定されるエリアですね。海岸にかなり丘陵が迫っている地域にこういうフットパスを作っていくこともこれから視野に入れていきたいなと思います。

それから「廃線フットパス」。これは今北海道でもあちこちでJRが廃線になっているだけでなく、すでに廃線になったところがいくつもあります。そのほとんどそのまま放置されて、荒れ放題になっているわけです。でもそういうところをフットパスとして活用したら、個性的なフットパスができるはずですよ。

初めからフットパスとしての再生が無理ならば、当面はサイクリングロードでもいいんじゃないかなと思うんです。サイクリングロードであれば、そこを人が歩いてもいいわけですからね。そういう意味でサイクリングとフットパスとの共生とでもいいですか、そういうことが図れたらいいなと。

最後に書いた「お散歩フットパス」。お散歩フットパスとは言っていないけど、それらしいものは各地にあると思います。町中に、あるいは町の外れを問わず、散歩に行きやすいところに、1キロ、2キロ程度の近くて短いフットパスを設けて、そこを歩く。フットパスと名付けることで、フットパスの知名度を上げるということも目的の1つになります。

散歩やウォーキングしている人はたくさんいますので、そういう人たちをいかにフットパスに引き入れるかということも考えていったらいいんじゃないかなと。我々はどうしても、観光もそうですけど、よそから来た人をいかに楽しませるかということを考えがちですけど、お散歩フットパスであれば地元の人を中心にすることで、地元の人と外から来た人たちが一緒に歩けるようになればもっといいわけです。そんなようなこともこれから考えていけたらいいなと、そんなふうに思います。

2-13. 環境ボランティアとフットパスの多様な活動事例

この辺から話だけじゃあれなので、我々がやってきた二本柱の1つ、環境ボランティアについての話題に移ります。フットパスになります。えりも町でシカの角拾いのボランティア活動を10年ぐらいいやりました。どういうことかという、えりも町の町営牧野は1,000ヘクタールほどある非常に広い牧野ですが、牛の放牧はやっていません。

そこにいまやシカが100頭、200頭って入り込んで、言ってみれば養鹿場のような状態になってしまっている。そうすると、これは雄のシカですけど、だいたい4月の初めあたりから、角を落とすんです。毎年角は再生するんですね。

ところが放牧はやめたんですけど、牧草が育ってますからそこをトラクターを入れて草

刈りを入れるわけです。そうすると、この角がトラクターのタイヤに刺さってバーストしてしまう例が年に何件か起きてしまいます。

山の中で、トラックがバーストしてしまったらさあどうなるか。それを引っ張り出すのも一苦労ですし、修理にも時間がかかる。その間に刈った草が雨に当たったりすると台なしになってしまう。そういうことを地元の酪農家の人たちから聞いたもんですから、そこでひらめて、じゃあ、それを環境ボランティアとしてやらせてくれないかということで 10 年程前から始めたんですね。

だいたい多い年には 100 人ぐらい申し込みがあるわけです。面白いことに、本州、東京あたりからも申し込みが、どこで聞いたのか知りませんが、来るんですね。だけど広い牧場の中にみんなばらばらになって歩いて迷子にでもなったら大変ですから、目の行き届かないところまで行っては困るので、だいたい 25 人、最大でも 30 人が限度なんですね。

そうやって集めた角を地面に並べて皆さんでお披露目をします。100 本以上になりますね。不思議なことに、こういう作業をやると子供が拾うんですね。多いと 10 本ぐらい拾う子がいる反面、目を皿のようにして探す大人で 1 本も見つからないという人がいたり、大変面白いです (写真 1)。

でも事前に酪農家の人が拾って取っておいてくれますので、皆さんにはお土産として持ち帰ってもらうことができるわけです。1 泊 2 日でやるイベントで 2 日目には拾った角を使って角細工をやっています (写真 2)。

だからこれは環境ボランティアと言っていいのか観光と言っていいのか、そのちょうど境界領域のような、それを私は「環境体験」と言っていますけどね、そんな感じになっております。ところが、最近襟裳岬のその牧野にどうも風力発電用の風車が建つということで、土地を貸したのか、買収されたのかということで、去年、今年とできませんでした。また何とか再開したいな思っています (写真 3)。

次は同じ日高管内の平取町に広がる 15 ヘクタールのスズランの群生地では昔、馬を飼っていた町営牧場だったんですね。今は飼っていません。なぜかというところでよくクマが出て馬が被害に遭うもんですから止めてしまったのです。6 月上旬にはそこにスズランがもう一面咲き誇り見事なもんです (写真 4)。

夏には 1 メートルを超す侵入雑草に被われてしまいます。今まではその時期に草刈りをしていたのですが、色々試したところ開花前に侵入雑草を抜き取るのが一番効果的だと分かりました。でするのでその時期に環境ボランティアとして作業をしています。最近では地元の方も積極的に参加してくれるようになりました (写真 5・6)。

これは札幌市内の盤溪に 6 ヘクタールほどの土地がありまして、これは社会福祉法人が所有している森林なんです。そこを法人の子供たちが野外作業する場として運営されているんですが、その周りが森林になっていますから、森林の中にそういう子供たちでも歩ける道を造ってくれということで、その作業を続けています。ササ刈りだけでなく、ちょっとした土木工事並みの作業になります。障害者も歩けるフットパスということで多分、来

年完成すると思います。2キロくらいのコースです（写真7・8）。

これも札幌市内です。南区によくクマが出るというので、一去年の8月大騒ぎになりました。サクランボを目当てに実のなる7月の初めあたりにクマがこの木に付くわけですね。1カ所に5〜6頭ぐらい来てサクランボを夢中になって食べていく。こういうほったらかしにされた果樹園の木を切ろうというプロジェクトが今年から始まっています。サクランボはチェーンソーで伐ります。何かちょっともったいない気もするんですけど（写真9・10）。

次にフットパスになります。黒松内町の例でお話しします。フットパスを歩いてトワ・ヴェールという、ここでソーセージとかハムなどを作るところなんですが、レストランも併設されています。ここではまさに地元の産物で作ったものを食べることにしています。つまり歩いて汗を流して終わりじゃなくて、地元で作られたランチなりを食べると、あるいはお土産に持ってかえるというようなことを我々は努めてやるようにしております（写真11・12・13・14・15・16）。

これは白老町のウポポイのある白老駅からもう1つ先の萩野という小さな駅があります。その近く流れるウヨロ川は川岸を歩くだけで、そのすぐ下にサケがパチャパチャするのを見ることができます。このコースも私らが10年ぐらいの間にできたコースで地元の人たちと一緒に開発したことになります（写真17）。

そうしましたら数年後、今度は大型バスが2台も3台も乗り付けるようになって、一時ここがすごいスポットになったんです。ところが大雨が降るたびに川の状態が変わってしまっていて、サケが集まる場所も変わってしまうんです。この間久しぶりに行ってきましたら、それでも結構見ることができて大変喜ばれました。

小樽というやつぱり運河とか、ごく限られた地域に人が集まって、端から見ると小樽は運河しかないみたいに見えるんですが、そうではなくて、小樽はちょっと山が迫っているだけあっていい歩くコースがたくさんあります。そのうちのひとつが水族館のある赤岩の方からオタモイに至る7〜8キロは本当にいいコースです（写真18・19）。

海側は断崖になっています。赤岩山から奥にうつすら積丹半島が見えます。こういう海岸線がなかなか見事で、結構霧が出てきたりして幻想的な景色も見ることができるかも知れません（写真20）。

次は上富良野です。あそこはコースが10本か11本あって田園地帯を歩くというので、十勝岳が前面にぱっと広がっているという、そういう景観のところを歩くわけです（写真21）。

十勝の新得町の例に移ります。狩勝峠に向かうかつてここに国鉄の線路がありまして、通称狩勝線と言っていました。その廃線になった後を今フットパスとして使っているわけです。これを始めたのが、新得町に住んで、もう亡くなりましたけど、竹田英一さんという方が狩勝線の跡地をフットパスにしました。これは北海道どころか全国的にもトップランナーだと思います。1990年にフットパスを考えて実践している人がいたんです（写真22）。

ここは同じ新得町で共働学舎という施設があります。宮嶋学さんという方がオーナーで

す。知恵遅れの人たちを使ってチーズを作っているところです。せっかくそこへ行くんだから宮嶋さんのところへ寄ったことがあります。彼はまじめですから初めは「アルコールはだめよ」なんて言っていたんですけど、ビールとグラスを用意してくださいまして、非常においしいチーズで盛り上がったことがあります（写真 23）。

これはニセコの神仙沼の方だと思います。ニセコ町も今フットパスに相当力を入れてやりまして。これは高原フットパスと名付けて、下の田園地帯を歩くだけでなく高原の方も歩けるようにするなど、山の方も含めたフットパスにしたらもっとバラエティーがあって面白いんじゃないかと、そんなふうにしけかけたりしています（写真 24・25）。

イギリスの例です。フットパスの標識が至る所にあります。コーンウォール半島はブリテン島南西部に伸びる細長い半島です。英国で一番長いフットパスで 1000 キロぐらいのサウスウエストコースタルパスがあります。こういう採草地とか牧場の中を歩くのが多いんです。ほとんど私有地です（写真 26・27・28）。

済州島のオルレについても海岸線をずっと巡り、ひと区間 20 コース以上から成っています。だいたい 15 キロから 20 キロになっています。コースサインは完璧で迷う心配はまずありません（写真 29・30・31・32・33）。

最後に今、周回のさっぽろラウンドウォークというような周回パスを進めているところですが、かつて 40 年ぐらい前に、札幌周辺自然歩道というのを札幌市が作った時期がありまして、ラウンドコースの一部になっています（写真 34・35・36）。

今まで私の言葉の中であんまり観光という言葉が出てこなかったんじゃないかと思います。当初、私達の活動は観光という意識はまったくなかったんです。ですけどフットパスを始めてから、やはり観光との接点のはっきりしてきました。その辺りについては後程詳しくお話するつもりです。

2-14. まとめ——私にとっての観光とは（図 14）

環境体験の中で代表的な活動のひとつがフットパスで、もうひとつが環境ボランティアだとは改めて説明するまでもないでしょう。このふたつ観光と結び付けることも可能ではないかと思うようになりました。

つまり、先ほどお話しました襟裳岬のシカ角拾いのボランティアの場合は、まさに自発的に来てもらっています。今、実際に津波があったとか、それから洪水があったといえ、全国からボランティアがたくさん集まります。それは皆さん各自の意思で行っているんですけど、そういうことがもう今日では当たり前に行われているわけですからね、フットパスにしても環境ボランティアにしても、何か観光的なアプローチでもって進めていくことができるんじゃないか。そういうことで僕らがやってきたことが新しい展開につながっていくんじゃないかなと、そんなふうに思っています。悪い声で聞きづらかったかもしれませんが、私のお話は以上です。

（下休場千秋） 小川様、大変、興味深いお話をありがとうございました。

3. 補足説明

(下休場千秋) このお話をお聴きしまして、エコ・ネットワークという非常にユニークな環境保全活動をされていて、フットパスという観光との接点の活動もされている、取り組んでおられるということで、あらためて北海道の魅力とか写真を見ると、皆さん方も北海道を歩いてみたいと思われる方がたくさんおられるんじゃないかと思います。

ここで対談に入りたいんですが、その前に私と小川様との出会いを少しお話ししたいと思います。私は、2016年、5年前に大阪から札幌へ引っ越してきました、北大の正門近くにはエコ・ネットワークの事務所がありまして、そこにお伺いしました。

フットパスをやっておられるということで、エコ・ネットワークのエコ友クラブの会員にもなっていただきまして、道内各地であるとか、濟州島オルレ等を会員の皆様と一緒に歩かせていただきました。それがきっかけとして現在に至っております。

3-1. 環境体験と観光

その後2017年から、観光学高等研究センターの研究会を始めたんですが、そこにも小川様とかご子息の皆様にも参加していただいて、これまで研究会を開催してきました。そのあたりを5〜6枚のスライドを使って少し補足の説明をさせていただきたいと思います。

それで、今スライドに出したんですが、先ほどの小川様の最後のスライドのところに環境体験という言葉が出てきました。非常に多様な環境体験というものをこれまで30年以上にわたってされてきているんですが、それを観光とどういうふうに結び付けたいのかということを考えていると思います(図15)。

観光のことを考える場合に、ホスト、ゲストという関係が必ず出てくるんですが、ホストというのは地域住民であり、生活をされている方々です。ホストの立場の方が環境体験をすることによって、1つはふるさと意識とかふるさとへの愛着心が醸成されるんじゃないかと思います。要するに、地域を愛する心が環境体験をすることによって生まれるということが言えるんじゃないかと思います。

ゲスト、要するに観光客であるとか消費者としてその地域を訪れる方もいます。先ほどの小川様の話でありましたようなさまざまな環境体験をすることによって、ただ単に土産物を買ったり、ショッピングをしたりという、モノを消費するという観光から、コトを消費する、体験そのものを楽しむという観光というものに今大きくシフトしているわけですが、環境体験という、先ほどのお話にありましたように、さまざまな素材がありますので、それをいかにゲストの方々に提供できるのかということが、これからの観光を考える上で非常に重要ではないかなと思います。

そうしますと、ホストとゲスト、お互いに環境体験することが重要であるということなんですが、何がそうしたらホストとゲストの環境体験に結び付けるかという、私はここ

で「道草をしたくなるような歩く道づくり」という言葉を使いたいと思います。

道草というのは、目的地に急いで行くのではなくて、たまたま歩いている横に何か珍しいものがあるとか、おいしいものを売っている店があるとか、その地域の方に出会うとか、そういう急いで移動するのではなくて、移動そのものを楽しむ。さまざまな移動の中でそういう素材を体験するという、そういう道草をしたくなるような歩く道をつくっていけば、ホストとゲストが交流できるような、いわゆる歩く滞在交流型観光がこれから実現していくのではないかなと考えています。

なぜそういうふうに考えたかといいますと、北海道大学では2018年から観光創造研究会で、歩く滞在交流型観光の新展開という研究会を開きまして、オルレであるとか、フットパスであるとか、ロングトレイルであるとか、聖地巡礼であるとか、そういう歩く観光の可能性を民産官学の専門家が集まって、もちろん小川様にもメンバーに入っていていただいてこれまで研究会を開いてきました（図16）。

その結果は、歩く滞在交流型観光の新展開（CATS叢書第12号）にまとまっておりますけれども、そこではロングトレイル、信越トレイル、みちのく潮風トレイル、これは次回、来週のテーマになると思いますけれども、フットパスであるとかオルレであるとか、聖地巡礼、まち歩きなどさまざまな全国、海外の事例の研究発表をしていただきまして、これまで歩く観光の可能性を探ってきました（図17）。

3-2. 歩く滞在交流型観光の実装化に関する研究会

その延長線で、2019年から札幌市における産官学連携による歩く滞在交流型観光の実装化に関する研究会を、木村先生をはじめ仲間たちと立ち上げまして、これは市民の健康志向の高まりとか自然趣向とか旅行形態の多様化を背景に、歩くことをテーマとして札幌の観光まちづくりの実現を目指して、先ほどのお話にありましたように、札幌市街地を一周する周遊歩道の設置を実現するための調査研究を目的としておりました（図18）。

その結果、小川様の話でありましたように、この左側の地図の、要するに札幌の、札幌駅、大通り公園を中心とした周囲、この緑の線で示していますけれども、約150キロのさっぽろラウンドウォーク構想ということで、このルートを、小川様もいろいろなアドバイスとか、もう実際にエコ・ネットワークでは昔から歩かれていますので非常に参考にさせていただいて、一緒にこういうコースを今構想を立てています（図19）。

札幌というのは、もう30年以上前から、右側の地図にありますけれども、みどりの基本計画の中で環状グリーンベルト構想という構想に基づいて、200万市民が住む市街地の周囲の里山であるとか、自然歩道、石狩川の河川敷であるとか、公園緑地のネットワークを非常に充実して整備されていってまして、このさっぽろラウンドウォークもすべて公有地を歩くことによって一周できるという、札幌は素晴らしいそういう緑豊かなまちであるということがあらためてこの研究会の中で分かりまして、今、この研究会の有志によってウォークラボ札幌というNPOを設立しようということで、予定通りいけば今月設立認可

になる予定なんです、歩くことによってその地域の魅力を再発見して、自然環境の保全であるとか地域の活性化とか観光振興であるとか、郷土学習、健康づくりに寄与できるということで、このさっぽろラウンドウォークを設定、普及、発展させるためのNPO法人を今設立したいということで、小川様たちと協力して行政の方、民間の方もこれから巻き込んで実現化していきたいと考えております。

3-3. NPO法人「ウォークラボ札幌」の設立（図20）

最後になりましたけれども、実は今この遠隔をしている会場は大学の中ではなくて、テントテン・サッポロ・ステーション(Tentoten Sapporo Station)というゲストハウスを利用させていただいております。左側の写真に写っているところが今私たちがいるところで、今お顔が映っていると思うんですけども、このテントテンの責任者の長谷川さんです。長谷川さんにお世話になってここをお借りして今、公開講座をしているわけですが、これは札幌駅から本当に歩いて5分の非常に便利なおところにある施設で、歩く滞在交流型観光の1つの拠点としてふさわしいところというふうに考えております。

もう1つは、先ほど述べましたNPO法人のウォークラボ札幌の所在地として、この住所を利用させていただくということになっておりまして、具体的に歩く観光を札幌で実現する1つの拠点としてこういうゲストハウスをこれから大いに活用することによって、要するに長期滞在につながる、ゆっくり滞在交流型の観光をしていただくというそういう動きを札幌でこれから強めていければと考えております（図21）。

先ほどのスライドと同じものですが、今日の話の環境と観光のかかわりをどう考えるかということで、小川様の最後の環境体験というキーワードは非常に重要なものではないかと。観光と環境を結び付けるもので、ホストにとってもゲストにとっても環境体験することが非常に意味のあることであろうと考えております。

4. 質疑応答

（下休場千秋） 環境保全活動とフットパスの活動を長年にわたりされてきた小川様は、このコロナ禍の今後といいますか、アフターコロナの時期にどういう観光がこれから重要になるというふうに考えられますか。

（小川巖） 一番時宜を得たご質問だと思うんですけど、一番答えるのが難しい質問じゃないですか。僕は野外に出てコロナに果たして感染するもんなのかどうか、そういうことはほとんどないんじゃないかと思っているんです。それがもし起きたらそれは空気感染で、今の飛沫感染といわれているよりもっと危険な状態のはずです。

毎日都道府県の感染者数が出ていますね。京都が意外に少ないんですね。テレビで見ると、つい何日前でも嵐山あたりごっそり観光客がいたけど、じゃあ、あれがクラスター

になるかという、野外ではそんなに心配しなくてもいいのでは、と思っています。僕は公衆衛生学者でも何でもないので、言い切ることができませんけど、北海道はその点寒くなれば家の中に閉じこもって密な状態になりがちなので、そういった違いがあるのかなと。

ですから野外を歩いている限りそういう心配は僕はしないのですが、さすが海外、道外はほとんど行きません。去年は2回道外へ行ったきりです。でも札幌市内とか道内は何十回も歩いていますよ。移動手段を地下鉄だ、汽車だ、電車だ、その中でリスクがあるかもしれないけど、外へ出てしまえば何でもないと私は思って動いていますけど。

(下休場千秋) アウトドアとか歩く環境というのは、非常に今の時期でも楽しめるということですか。

(小川巖) そうです。

(下休場千秋) 視聴者の方からいくつか質問をいただいているんですが、歩く滞在交流型観光を促進、発展する際には、コース設定もさることながら交流を生み出す仕組みづくりが欠かせないと思いますが、現時点で何か方策はあるのでしょうかという。この辺はどうでしょうか。交流を生み出す仕組みづくり。

(小川巖) それはコース次第ですね。例えば札幌市内でも、僕らは歩いて、特に秋になりますと北区の方はまだ農家が結構あります。そういうところの農作物の直販所などに立ち寄って、近所の人たちと販売している農作物を通じて、これはどうやって食べるのとか、どこへ行ったら売っているのとか、そういうささやかな交流みたいなことは札幌市内にいてもできると思うんです。

これがもう少し遠出することになると、その土地でどういうものを作っているとか、いつ採れるのかなど地元の人たちとその辺を事前にコンタクトを取って、さり気ない形でやるように心掛けてはいます。

(下休場千秋) まだ質問がありまして、テントテンはツアー参加者の方のみ利用できるんでしょうかという質問ですけれども、ここはゲストハウスとレストランがございしますので、どなたでも参加していただくようになっていると思います。

(小川巖) 直接どうですか。

(長谷川英幸) どなたでもご利用ください。

(下休場千秋) ということで、ツアー客には限りませんので。

(視聴者) ここはどういう場所なんですか。

(長谷川英幸) ここは多目的ホールで、今回のようにセミナーでご利用いただいたりとか、飲食を伴う少人数での会食パーティー、立食パーティーなんかも受け付けていますし、飲食の機能を持っているゲストハウスですので、お料理の準備とかお飲み物、酒の準備もこちらでさせていただいて、手ぶらで手軽に使っていただけるような多目的スペースになっています。

上は宿泊スペースなんですよ。上は宿泊スペースになっていますので、ぜひ宿泊をしてもらって、皆さんで談話とか懇親していただく場所として使っていただければと思います。すみません、こんな時間をいただきまして。

(小川巖) いえいえ。

(長谷川英幸) ありがとうございます。

(小川巖) 今、質問された方は昔のうちのスタッフだった人です。今は東京ではたらいしていますけど。

(下休場千秋) 次の質問なんですが、新しいフットパス、道を開くことに一生懸命であっても、その後の維持管理が中核人材の高齢化や費用などで課題になっています。道内のフットパスでの対応事例をご教授いただきたくお願いしますということですが。

(小川巖) これはどこでも付いてまわる話だと思うんですが。僕らはもう一部始めています。先ほどのサクランボの木を伐採する時もやっぱり呼び掛けに応じて参加してくれる人たちと一緒にやることにしています。フットパスについても実際に歩いた経験のある人だったらあそこはよかったから、じゃあ、自分たちで草を刈ろうとかササを刈ろうとかいう動きは出てきます。

私もそういう形で少しずつ今始めています。始め方は、歩かしてもらっていつもいい思いをさせてもらっているんで、剪定ばさみをみんなに持ってもらって道に飛び出た草とかササとか枝を切っていくというようなことをやり始めていますので、いろいろ知恵を絞ってやれるんじゃないかな。

地元の人たちだけでやろうということじゃなくて、よそからも呼び込める、誘い込めると思うんですね。それにはやっぱり、あそこのフットパスを歩いてみたいということになればいい訳です

(下休場千秋) ありがとうございます。まだいくつか質問があるんですが、時間があ

んまりなくなってきましたので、全部にお答えしてもらるのはそろそろなんですが、廃線などを利用する際の整地はどの程度までしていращやるのでしょうか。完璧なほどにしようと思環境体験効果が薄れそうですし、かといって標識を立てるだけでは事故等が起きそうなので、中間地点の定義が難しいと思いますというご質問ですが。

(小川巖) フットパスだけで考えれば、土を入れるだけで十分なところが多いんじゃないですか。ほかのところでも見えていますね。サイクリングロードにするとみんなアスファルトにしちゃいますけど、歩くだけであれば、砂利はそのまま残る場合が多いので、そこに土をかぶせる。

もっといいのは、森林ボランティアをやって間伐をした時など、それでチップを作ります。そのチップを敷くのが一番効果的だとは思っています。だから、環境ボランティアとフットパスとそこでうまくこと Docking するような、そういう持っていき方もできるんじゃないかなと思います。

(下休場千秋) ありがとうございます。まだまだ質問があるんですが、時間がもう押していますので、新たに私の方から 1 つだけ質問をさせていただきたいんですが、次世代の若い人たちに何か伝えたいことがあればぜひお願いします。

(小川巖) 若い人に言うのであれば、実際にフットパスを歩きましょうということと、そういうボランティアと一緒にやりましょうということだと思います。一緒にやることで結構いろいろなものが見えてくるようなんですね。以前、本州の大学生 20 人ぐらい呼んで作業をやってもらいました。

私らはこういう方針でやるんだと言って作業をやってもらいましたが、彼らは彼らなりのやり方もあるんですね。作業をやることでそういうことに気付くわけで、私らはそういうきっかけをつくるのが役目ですから、いろいろ経験をしてもらうことで次につなげることができると思うんですね。

だからひと口に環境体験って僕は言っちゃいますけど、そういうものに一歩でも二歩でもかかわってもらえればいいなと。その次が見えてくるんじゃないかなと思いますけど。

(下休場千秋) ありがとうございます。そうしましたら時間になりましたので、これからも小川様にいろいろご指導いただきたいと思いますけれども、残念ですけれどもこれで小川様のご講演を終わりたいと思います。本日は誠に興味深い話をありがとうございました。また、ご参加いただきました視聴者の皆様方にもお礼を申し上げます。これで公開講座、「観光現場の挑戦」の第 1 回目を終了させていただきます。ありがとうございました。

(小川巖) どうもありがとうございました。

環境と観光

-市民活動としての環境保全とフットパス-

北海道大学観光学高等研究センター

2020年度公開講座 観光現場の挑戦

2020年12月1日（火）

エコ・ネットワーク代表 日本フットパス協会理事

フットパス・ネットワーク北海道（FNH）事務局長

（公財）北海道新聞野生生物基金評議員

小川 巖

小川 巖（おがわ いわお）

1945年 北海道松前町生まれ、2才から高校まで神奈川県横須賀市で育つ。信州大学農学部を経て1970年北海道大学大学院農学研究科入学。

1984年 北海道庁退職
野生生物情報センター設立（代表委員）

1992年 同センター解散
エコ・ネットワーク設立（代表）

（財）北海道新聞野生生物基金アドバイザー（後評議員）
2002年 フットパスフォーラム「歩く文化の国イギリスのフットパスを北海道にも」（道新野生生物基金）

全道フットパスの集い開始

2003年 全道フットパス・ネットワーク準備会発足

2009年 日本フットパス協会設立（理事）

2012年 フットパス・ネットワーク北海道（FNH）設立（事務局長）

図1 経歴

自然、環境からフットパスへの道程

■1980年代から年代別に関わったテーマを挙げると、多様なテーマに取り組んできたことが分かる。周囲からは存続できるかどうか、危ぶまれたが...

- ・バブル景気の真っ只中にあったこと。
- ・野生生物、自然への関心が高まったこと。
- ・アウトドアブームが始まったこと。

等が持ちこたえた理由として挙げられる。

■大きな流れとしては...

自然、野生生物→環境→フットパスと主要テーマが変遷してきた。

図2 エコ・ネットワークの履歴

1980年代

■所属：野生生物情報センター（1984～1992年）

■受託組織：日本野鳥の会札幌支部、さっぽろ野の花の会、野生動物写真研究会

■テーマ：

野鳥観察、鳥類調査、ヒグマ調査協力、フラワーウォッチング、植物画勉強会、動植物写真展開催、ネイチャーゲーム、カッコウキャンペーン、「おーい！北海道」キャンペーン、自然観察ガイド養成講座、バックパッキング、自然保護指導員講習会、自然に親しむ集い、野生動物の保護管理シンポ、ナチュラリスト・レポート、野生動物映画上映会、自然保護関連シンポ、ワイルドライフ・レポート発行

■テーマ（要約）：

野生生物観察・調査、自然関連行事・各種講師、野外活動の推進

図3 1980年代

1990年代

■所属：エコ・ネットワーク（1992年～）

■受託組織：ヒグマの会、野生動物救護研究会

■テーマ：

自然（森林）遊び、どろ亀さん上映会、ワンデイウォーク、タララ大
自然塾、北海道新聞野生生物基金（1992年）、ナショナルトラスト
&ピーター・ラビットツアー（3回）、ブナウォッチングツアー（黒松内）、
週末田舎人（黒松内）、かんじぎウォーク（黒松内）、ワイルドツアー、エ
コ・ウォーキング（1992年～）、野生生物写真展、外来種問題シンポ、
海外国立公園視察（アメリカ）、フラワーソン、カミネッコン（植樹）、
フォレストクラブ（平取）、自然を生かした地域づくり

■テーマ（要約）：

自然体験→環境体験、環境・自然系団体との連携、アウトドアプロ
グラム、野生生物問題

図4 1990年代

2000年代

■所属：エコ・ネットワーク

■受託組織：全道フットパス・ネットワーク準備会

■テーマ：

海外環境研修ツアー（イギリス、デンマーク）、フットパスウォーク（札幌市内、
北海道内、日本国内）、海外フットパスツアー（イギリス、フランス、スペインほか）、海
外動物園研修ツアー（オーストラリア）、フットパスフォーラム（2002年）、
全道フットパス・ネットワーク準備会（2003年）、全道フットパスの集
い（2003年）、エコ・ウォーキング、アニマル・レスキュー研修会、ワ
イルドツアー、イギリスCAT訪問研修、一斉フットパスウォーク（全道
で秋開催）

■テーマ（要約）：

海外環境研修、野生動物救護、フットパスの展開

図5 2000年代

2010年代

■所属：エコ・ネットワーク、酪農学園大学

■受託組織：北海道カリマンタン交流協会、FNH、知床100m²運動北海道支部

■テーマ：

済州島オルレウォーク、親子エコキャンプ、鹿角拾いボランティア（えりも）、森づくりボランティア（平取）、親子植樹体験（道新野生生物基金）、海外植樹ボランティア（インドネシアほか）、台湾ウォーク、札幌周回ウォーク、欧州フットパスウォーク（イギリス、ドイツほか）、日本フットパス協会（2009年）、エキノコックスベイト作戦、海外環境専門家招聘、（株）ジオ設立、札幌ラウンドウォーク研究会、フットパスの長距離化&周回化、盤溪癒しの里山プロジェクト、ワイルドサーモンフットパス、フォーラム「札幌にもフットパスを！」

■テーマ（要約）：

フットパス本格展開、環境ボランティアの多様化、海外環境専門家との交流

図6 2010年代

2020年代

■所属：エコ・ネットワーク

■受託組織：

■テーマ：

機動環境ボランティア、さっぽろ周回フットパス、新たなフットパスの創出、避災フットパス、廃線フットパス、クマの市街地侵入防止ボランティア、スズラン群生地雑草除去ボランティア、クマの市街地侵入防止果樹伐採、北大ヒグマ研50年史、盤溪癒しの里山プロジェクト、フォーラム「札幌にもフットパスを！」、さっぽろ周回ウォーク

■テーマ（要約）：

フットパスのロング化、環境ボランティアの多様化

図7 2020年代

エコ・ネットワークのポリシー

- 組織としての会員制はとらない。
- ・ **バリアーをなくす。誰でも入って来れる組織であるべき。**
- NPOを取得しない。非NPOを貫く。
- ・ **即応性を第一に考える。**
- ・ **計画、予算に縛られない。**
- ・ **他団体との連携、後押しに徹する。**
- 行政に頼らない。
- ・ **活動は奇兵隊またはゲリラ的であるべき。**

図8 エコ・ネットワークのポリシー

私たちは次のようなミッションのもと活動しています。

- ・ 自らの活動のみならず、環境や自然に関する他の活動を紹介するよう努めます。
- ・ 関連団体・組織または個人と協力して行う活動を積極的に行います。
- ・ 環境系の各分野を結びつける役割を担います。
- ・ 環境系のみならず他のジャンルとの連携にも取り組みます。
- ・ 未開拓の新しいテーマに果敢に挑戦していきます。
- ・ 市民と共に環境を考え、自然を楽しむため共に行動します。
- ・ 環境分野の人材育成を進めます。

図9 エコ・ネットワークのミッション

ミッションのもとに次のような事業を行います。

- ・ 自然を生かした地域づくりのアドバイザー
- ・ 環境セミナーの企画・開催
- ・ エコ・ウォーキングの開催
- ・ エコキャンプの企画と普及
- ・ 環境ボランティア活動の実践
- ・ フットパスづくりと普及活動
- ・ 環境・自然系の印刷物の編集と刊行
- ・ 環境体験プログラム開発
- ・ 市民参加型調査の企画・実施
- ・ 環境・自然分野に関する書籍等の展示販売

図10 エコ・ネットワークの事業

フットパスの対象と分野

フットパスがもつ奥深さと幅の広がりにより可能性を見出した。

対象:歴史、文化、自然、農、食など

分野:7Kで表すことができる。

環境	地域の自然を見直す。地域の自然の価値に気づく。自然の多様性を知る。
健康	身体的のみならず心理的（精神的）により。探求心が刺激される。
観光	知らなかったものを知る機会になる。長い時間その土地に触れあうことが可能になる。
交流	歩く人同士、土地の人とのコミュニケーションが生まれる。地域間の交流につながる。その土地の産物を知ってもらえる。買ってもらえる。
経済	地域の産物、製品を知ってもらう。消費につながる。規模は小さいながらビジネスに発展する可能性。
景観	遠景としての景観だけでなく、近景もまた大切な要素となる。
活性化	歩く人の元気を高めるとともに地域を元気にするツールになり得る。

図11 フットパスの対象と分野

滞在時間の大幅な延長が可能

- SlowでSimpleなフットパスを歩くことで大幅な滞在時間の延長ができるようになる…
- 地域の食産物との出会いや地元の人との交流が促進される。
- 観光が入り込み数で評価するのに対して、フットパスは【人・時間】で評価することができる。
- ある観光地に1,000人が訪れて1時間滞在なら1,000人・時間。
- フットパスなら50人でも5時間で250人・時間、20時間（1泊）で1,000人・時間となる意味は大きい。

図12 フットパスと地域活性化

フットパスのこれから

一つの市町村の中に1本または数本のフットパスを作ったレベルではハイキングコースと変わらない。

多様なフットパスの展開

■周回（サーキュラー）フットパス

- 札幌ラウンドウォークの開設間近か
- 京都、広島に続け！
- 道内他地域で！

■ロング（フット）パス

- まず隣町と繋ぐ越境パス（町から町へ、稚内からサハリンへ、函館から青森へ）
- 札幌から各方面へつなぐ（札幌→小樽、ニセコ・黒松内、千歳、石狩市浜益区）

■新たなフットパスの創出

- 避難フットパス（津波に備え、高台、丘陵に緊急時に使える道）
- 廃線フットパス（江差線、札沼線、日高線などをフットパス化またはサイクリングロード）
- お散歩フットパス（ウォーキング等に地元の人が利用できる短距離コース）

図13 フットパスのこれから



写真1 エゾシカの角拾いボランティア（えりも町）



写真2 牧場に落ちたエゾシカの角（えりも町）



写真3 えりも・エゾシカ角拾いボランティア募集チラシ



写真4 すずらん群生地(平取町)



写真5 スズラン群生地の環境ボランティア活動（平取町）

2017年8月17日

エコ・ネットワークがやる市民参加型環境ボランティア
平取町スズラン群生地の侵入雑草を抜き取る

日高管内平取町栗倉(めむ)地区には日本一の規模を誇る15haのスズラン群生地があります。6月末から8月上旬にはたくさんの人が集まりに訪れます。ところが近年、ヨモギ、カラマツソウ、ササ、ススキなどが侵入するようになり、スズランが全体的に衰退傾向にあるとされています。

私たちは7月以降2回に分けて、これら目立つ雑草の抜き取りを行っています。第3回目になる今回は、さらに徹底した抜き取り作業をする予定です。もとより広大な群生地の一部に過ぎませんが、来年に向けての実験的な取り組みと考えています。国内最大と言われるスズラン群生地を長続きさせるための環境ボランティアに力を貸してください。

■主 催 ■ エコ・ネットワーク（環境市民団体） ■後 援 ■ 平取町

■資 格 ■
年齢・経験問いません。

■作業内容 ■
群生地に繁殖している雑草（ヨモギ、カラマツソウ等）を抜き取り。

■日 時 ■
2017年9月25日（月）作業時間 10：00～15：00

■集 合 ■
9：30（原則として現地集合） 平取町本町「ふれあいセンター」駐車場

■参 加 費 ■
1,000円（材料費、通信費、傷害保険料等に充当）

■定 員 ■
15名（先着順）

■持 ち 物 ■
野外作業に適した服装、昼食、飲み物、帽子、飲み物（作業中は現地で用意）

■そ の 他 ■
・小雨程度であれば実施します。
・主催者の使用車に数名乗車可能です。
・お申し込みの際住所、氏名、年齢、電話番号をお知らせ願います。

お問い合わせ・お申し込みはエコ・ネットワーク（環境市民団体）まで。
 〒060-0809 札幌市北区北9条西4丁目エールビル8F
 TEL：011-737-7841 FAX：011-737-9606 E-mail：eco@hokkai.or.jp
 WEB：http://city.hokkai.or.jp/~eco/

写真6 スズラン群生地の環境ボランティア活動募集チラシ



写真7 盤溪癒しの里山プロジェクト、植樹（札幌市）



2020年10月30日

盤溪癒しのプロジェクト11月例会のお知らせ

年明けからコロナ騒ぎで生活に活動に大きな影響が出ています。その中で当プロジェクトは、何とか1回のペースで活動が続けて来られました。冬期の最後となる活動になります。

■11月15日（日） 10:00～14:00でいつもと同じです。

■以下の作業を予定しています。

- ・クマ除け網の撤去
- ・オタマ造の改修
- ・太田新道の修繕
- ・作業小屋新築（継続）
- ・冬期活動について

■内山バスターミナルから便乗ご希望の方は、ターミナル大通路（小泉医院前）9:30 出発。ご一報願います。

昼食をお忘れなく。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆
 エコ・ネットワーク 小川 龍
 〒060-0809
 北海道札幌市北区南9条西4丁目エルムビル5F
 TEL: 011-737-7841 FAX: 011-737-9506
 E-mail: eco@hokkai.or.jp
 WEB: <http://city.hokkai.or.jp/~eco/>
 ☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

写真8 盤溪癒しの里山プロジェクト、山道作り（札幌市）



写真9 ヒグマ出没対策の環境ボランティア活動（札幌市）

2020年6月8日

クマが市街地に侵入するのを防止するための環境ボランティア

毎年、札幌の一部地区や道庁の森からヒグマが市街地に現れるようになり、その被害騒ぎとなることが繰り返されてきました。住宅地と森林が隣接している場所が多い札幌の特殊性も関係しているようです。

クマの市街地への侵入を防止するには、クマが移動経路として利用する場所の草刈りと好物であるサクランボ、ナシ等の放棄果樹の伐採が非常に有効であることが実証されつつあります。

そこで2種類の作業を環境ボランティアの一環として実施します。現在コロナ禍のため行動に制約がある状況ではありますが、関心のある市民、住民の皆さんのご参加をお待ちしています。

■作業場 ①道に中小河川沿いの草刈り ②放棄果樹の伐採と枝条処理

■場所 札幌市南区緑野・廣敷地区を中心としたエリア

■時期 ①6月26日（金）②6月17日（木）、20日（土）※7月及び8月以降にも実施します。

■参加費 無料 **■定員** 各回10名程度

■主催 エコ・ネットワーク（環境市民団体） 株式会社環境保全 EnVision 環境保全事務所

■協力 札幌市

■申込方法

- ・まずエコ・ネットワークへお問い合わせください。
- ・車刈り、枝条処理のどちらかを選んでいただきます。両方でも構いません。
- ・それぞれの集合場所等についてお知らせします。
- ・作業時間はおおむね8:30～13:30頃を予定しています。

■その他

- ・原則として現地集合・解散です。昼食は各自持参です。
- ・作業用の道具は主催者が用意（持ち込み可）。
- ・新型コロナウイルス感染拡大防止対策は各自行っていただきます。
- ・雨天の場合090-2773-2038 または 011-581-2038（小川組）へお問い合わせください。

この活動は北洋銀行の「はっくー基金」の助成を受けて実施します。

お問合せ・お申込みはエコ・ネットワーク（環境市民団体）まで。
〒060-0609 札幌市北区北5条西4丁目7-4 エムビル8階
TEL: 011-737-7843 FAX: 011-737-9006 E-mail: eco@hokkai.or.jp
URL: <http://econetnetwork.jp/>

写真10 ヒグマ対策ボランティア、サクランボの伐採（札幌市）



写真11 フットパスコースから市街地を望む（黒松内町）



写真12 フットパスとコースサイン（黒松内町）



写真13 歌オブナ林に至るフットパス（黒松内町）



写真14 ススキとササを刈り取ったフットパス（黒松内町）



写真15 「黒松内町特産物手づくり加工センター（トワ・ヴェール）」での昼食



写真16 地元産品を食材としたランチ



写真17 サケが遡上するウヨロ川フットパスのコース（白老町）



写真18 小樽海岸自然探勝路（小樽市）

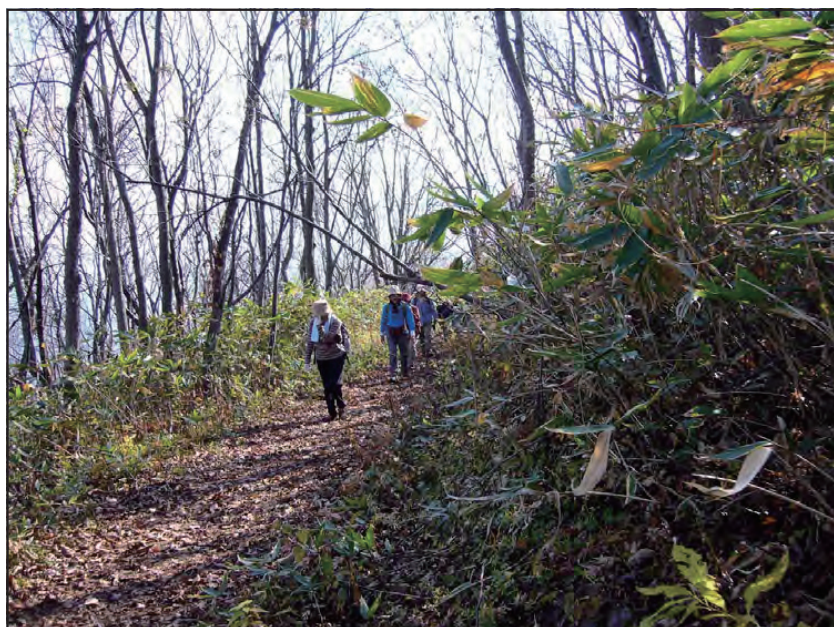


写真19 赤岩オタモイ線歩道（小樽市）

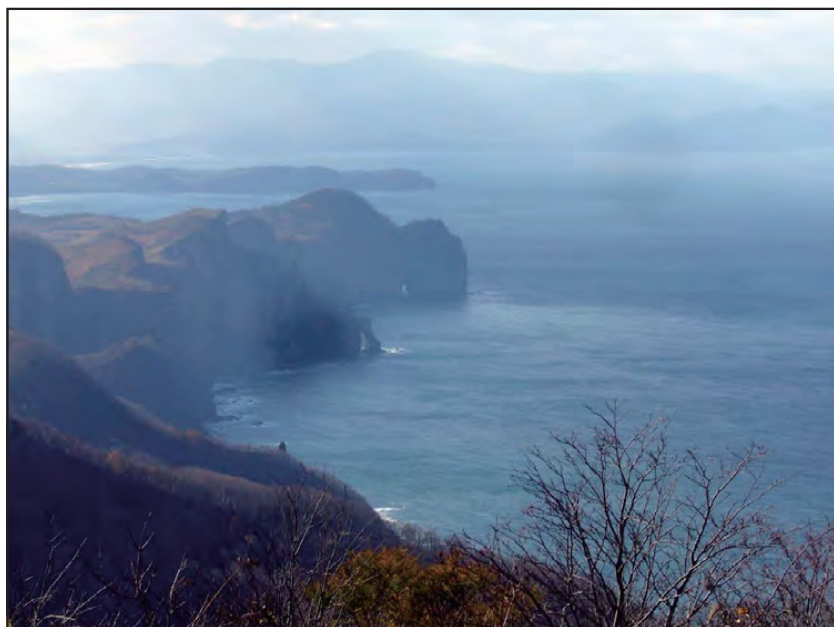


写真20 赤岩山から積丹半島を望む（小樽市）



写真21 田園地帯のフットパスを歩く（上富良野町）



写真22 旧狩勝線を利用した廃線フットパス（新得町）



写真23 共働学舎におけるフットパスでの地域交流（新得町）



写真24 心地よい木道のフットパス（共和町）



写真25 神仙沼のフットパスコース（共和町）



写真26 フットパスの標識（イギリス）



写真27 コーンウォール半島のフットパス（イギリス）



写真28 放牧地のフットパス（ヘブデンブリッジ）



写真29 済州オルレ（韓国）



写真30 済州オルレ（韓国）



写真31 オルレコース途中に設けられた記念スタンプ台



写真32 済州オルレのシンボル「カンセ（原生馬）」の道標

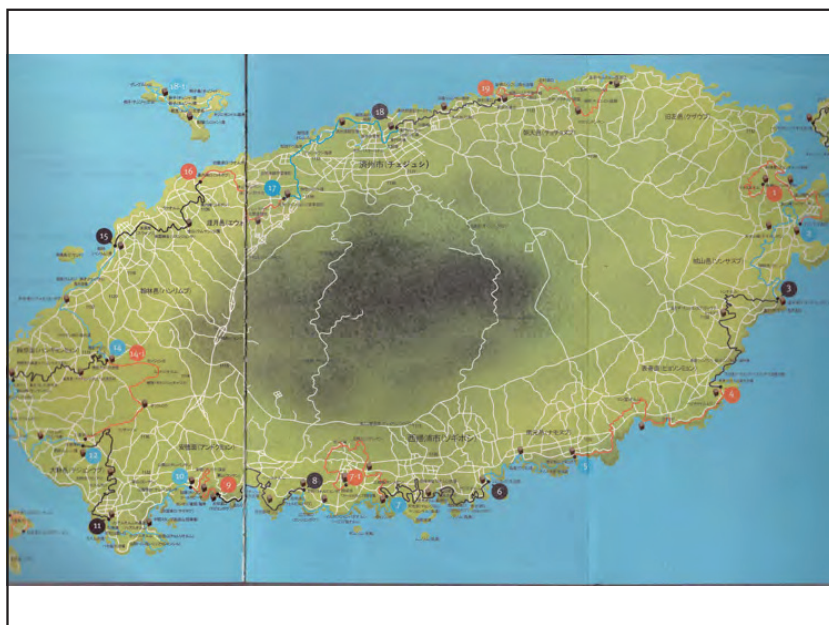


写真33 済州島を一周する延長425kmの済州オルレ

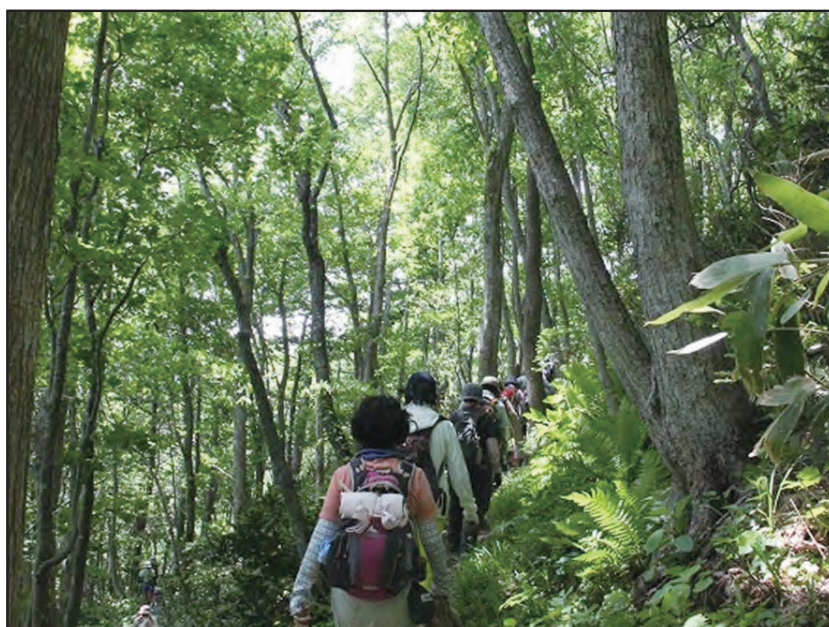


写真34 札幌周辺自然歩道（札幌市）



写真35 藻岩山スキー場を下る（札幌市）



写真36 札幌周辺自然歩道のコースサイン（札幌市）

まとめ 私にとっての観光とは？

エコ・ネットワークでは1992年以来、環境、自然に関する様々な取り組みをしてきた。私はそれらを**環境体験**と称している。

フットパスも環境ボランティアも環境体験であるが、それを観光と結びつけることは可能であろう。

それによって新しい展開につながると考える。

図14 まとめ 私にとっての観光とは

○どのように「**環境体験**」と観光を結びつけるのか。

- ホスト（地域住民、生活者）の**環境体験** ➡ 故郷への愛着心の醸成
- ゲスト（観光客、消費者）の**環境体験** ➡ 「モノ」から「コト」へ
- ホストとゲストを結びつける「道草をしたくなるような歩く道」づくり ➡ 「歩く滞在交流型観光」の実現

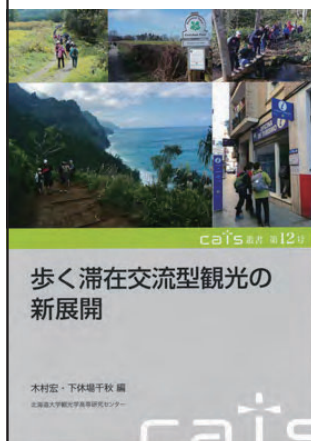
図15 環境体験と観光

○ CATS観光創造研究会 「歩く滞在交流型観光の新展開」 2018年3月開催

- 開催趣旨
- 歩く旅のあり方を軸として、地域の自律的、持続的な発展を目指す滞在交流型観光の今後の展開について、国内外のオルレ、フットパス、ロングトレイル、聖地巡礼に関する民産官学の専門家による研究発表と事例報告に基づき議論を深め、歩く滞在交流型観光の新たな可能性を明らかにする。

図16 CATS観光創造研究会「歩く滞在交流型観光の新展開」

○ 歩く滞在交流型観光の事例研究

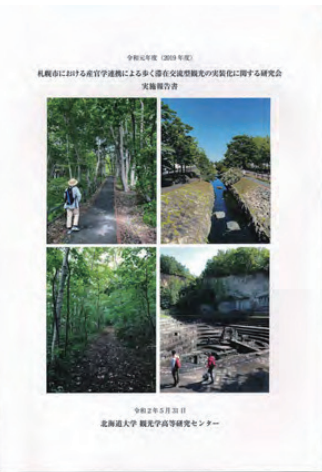


- ロングトレイル(信越トレイル、みちのく潮風トレイル、九州自然歩道)
- フットパス(イギリス、日本各地)
- オルレ(濟州島、九州、宮城)
- 聖地巡礼(サンティアゴ巡礼、四国遍路、熊野古道)
- まち歩き(佐世保時旅、水郷柳川ゆるり旅)

図17 歩く滞在交流型観光の事例研究

「札幌市における産官学連携による歩く滞在交流型観光の実装化に関する研究会」

(2019年度～)



市民の健康志向の高まりや、自然趣向、旅行形態の多様化を背景に、「歩く」ことをテーマとした札幌の観光まちづくりの実現を目指し、札幌市街地を一周する周遊歩道の設置を実現するための調査研究

図18 札幌市におけ産官学連携による歩く滞在交流型観光の実装化に関する研究会

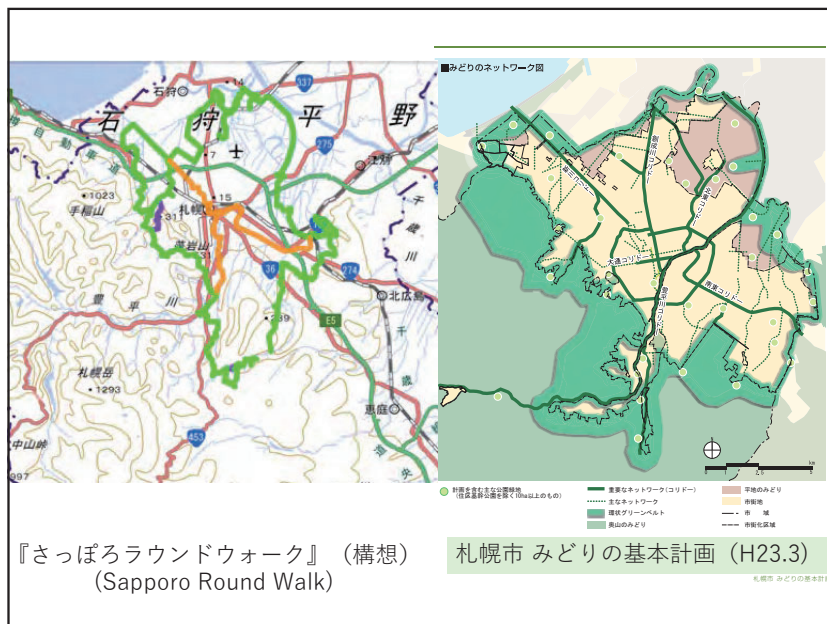


図19 「さっぽろラウンドウォーク構想」と「札幌市環状グリーンベルト構想」

特定非営利活動法人『ウォークラボ札幌』

設立趣旨

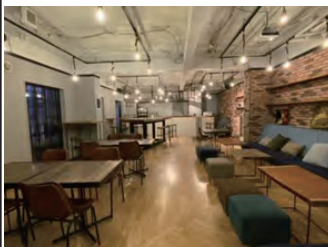
2020年12月設立予定

歩くことは、先人によって築かれたまちなみ、歴史や文化、自然など世界に誇れる財産を再発見、再認識するとともに、自然環境の保全、地域の活性化、観光振興、郷土学習、健康づくりに寄与することができます。

札幌において歩くことの楽しみを広め、新たな交流を生むことを実現するため、健康・環境・観光・交流・景観をテーマとした周遊歩道「さっぽろラウンドウォーク」を設定、普及、発展させ、歩く文化を醸成していくことを目的としてNPO 法人を設立いたします。

図20 特定非営利活動法人「ウォークラボ札幌」設立趣旨

テント テン 札幌ステーション
(Ten to Ten Sapporo Station)
Hostel and Kitchen
札幌市北区北6条西8丁目3-4



- 歩く滞在交流型観光の一つの拠点
- NPO法人「ウォークラボ札幌」の所在地

図21 NPO所在地、民泊レストラン「テントテン札幌ステーション」

第 2 回 町をつなぎ人をつなぐ、1,025km のみちづくりへの挑戦

桜庭 佑輔

環境省東北地方環境事務所十和田八幡平国立公園管理事務所 みちのく潮風トレイル担当

相澤 久美

NPO 法人みちのくトレイルクラブ 常務理事兼事務局長

木村 宏

北海道大学観光学高等研究センター 教授

1. 問題提起

（木村宏）今回 5 回に分けて実施される公開講座のテーマとして「観光の現場の挑戦」というタイトルが決まりました際に、真っ先に浮かびましたのが、昨年全線開通をむかえたこの『みちのく潮風トレイル』の取り組みです。今日は 1,025 キロの歩く道をつくるという偉業を成し遂げられたその立役者のお 2 人にお越しいただいていますが、東北から、そして東京から、このコロナ禍ではありますが駆けつけていただき有難うございます。ライブ感を存分に味わっていただきながらお話を伺いたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今回、第 2 回目のテーマにしたいのが、「町をつなぎ人をつなぐ、1,025km の道づくりへの挑戦」ということです。4 県 28 市町村でしたね、市町を貫く道を作ることで、いろいろなことがつながることの意味を、観光という視点から考えてみたいと思います。

ご登壇いただくのは、環境省東北環境事務所十和田八幡平国立公園事務所でみちのく潮風トレイル担当をされる桜庭さんと、このみちのくの長い道を維持、管理し、利活用について取り組んでおられる、NPO 法人みちのくトレイルクラブの相澤さんです。どうぞよろしくお願いします。まず私から 3 点問題提起をさせていただきます。1 つは「広域連携による観光推進の意義」。2 つ目が「新たな挑戦で何が見えたのか」。そして 3 つ目が「歩く文化の醸成について」です。全体の構成としては、それぞれの取り組みを 15 分ずつお話しいただいたあとに、この 3 つの問題提起にそって議論をしていきたいと思います。

それでは、まずは桜庭さんからお話を伺います。よろしくお願いいたします。

2. みちのく潮風トレイルの誕生とその思い

(桜庭佑輔) 環境省の桜庭といいます。今日は秋田県と青森県の県境にある十和田湖から参りました。

普段は国立公園内の自然の保護と活用ということをベースに、国立公園内の風景の管理、施設の整備、観光客の受け入れの環境整備といったことをやっております。本日は、私が十和田湖に赴任する前に担当していた三陸地域でのロングトレイル、みちのく潮風トレイルの設定について話題提供します。

この取組は、東日本大震災後の復興事業の中で被災地沿岸を貫くロングトレイルを作ってはどうかというところから始まります。最初は直線距離で 350 キロ程度の構想であったのですが、地域と道をつくり込む中で 1,000 キロ超えのロングトレイルとなりました。

みちのく潮風トレイルは青森県、岩手県、宮城県、福島県にかかる道です。画像にあるのは(スライド 1)、岩手県の宮古市のあたりの海岸線を歩く場面です。海際、かなり海に近いところを歩いていく、そういう道の設定をしながら、震災復興、交流人口の拡大に取り組んでいこうという事業です。

トレイルとはそもそも何ぞやということですが、ロングトレイルというのは、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドだとか、ヨーロッパにもあります。

おおむね欧米の方が多く歩いています。住んでいる人がかかわり、地域が道を支えていく、ロングトレイルの存在が地域に文化として定着していくと、そういった道もあります。

代表的な例は、アメリカの東海岸にある 3,500km のアパラチアントレイルです。世界でも最も格式の高いロングトレイルと言われます。このロングトレイルは、アメリカ合衆国が認定するナショナルトレイルの第 1 号として認定を受けています。

歴史もある。そして地域の人たちもこのロングトレイルのことを認知している。アパラチアントレイルというのはどういうところかといいますと、あまり標高の高いところではなく、やや日本の湿潤な環境にも近い森の中や街を貫いたトレイルです。全線歩くのにだいたい半年ぐらいかかるというトレイルです。

3,500 キロを歩いていると、ハイカー同士がすれ違ったり、抜きつ抜かれつし、何回も行き会うものですから、ハイカー同士の顔見知りが増えていく。ハイカー同士の心の交流が生まれていく。それがトレイルの体験で、非常に重要な部分になっています。

また、ハイカーを無償でもてなす、支えると言っていいと思うのですが、ルート沿線の住民の方がいらっしゃる。写真(スライド 3)のようにハイカーを招いて食事の提供をしたり、宿泊を提供したり、そして 3,500 キロもあるトレイルですから、たまに道路、車道の横断場所や峠に、クーラーボックスを置いて飲み物なんかを自由に取っていただいというような形で、地域住民が歩くハイカーをリスペクトして支えてという、そういうトレイルを支える文化が出来上がっているというのが第 1 号のロングトレイルであるアパラ

チアントレイルには見られるということで、アパラチアントレイルは東部アメリカの文化として根付いているということが言えると思います。

なぜアパラチアントレイルを紹介したかといいますと、みちのく潮風トレイルは、アパラチアントレイルのように地域に文化として根ざすようなトレイルを目指そうということで始まりました。

先ほど震災復興のために始まった事業ですと言いましたが、環境省としますと、10 年、20 年ではなく、100 年以上続くロングトレイルとしてつくり上げたいという思いがあって、震災復興、その先ということを見据えて事業を始めました。

この写真（スライド 4）ですが、写真の中心にいらっしゃる方、つえを突いているちょっと白髪交じりの方が、環境省に対して三陸にロングトレイルをつくったらいいのではないかと提案した、加藤則芳さんです。

日本ではロングトレイルの国内第一人者といわれている方です。2013 年に亡くなっているのですが、このときはすでに ALS という筋肉が萎縮していく難病になられておりました。

つえを突きながら環境省に来られました。これは震災から 2 週間後ぐらいの写真です。そのときに、加藤則芳さんが、三陸でロングトレイルをつくったらどうだという提案をされました。

加藤さんがおっしゃるには、山に行くロングトレイルは海外にもあるのですが、海岸のロングトレイルというのは世界でも珍しい、海岸のロングトレイル、まさに環境省が所管する三陸の国立公園を縦断するようなトレイルをつくったらどうだということです。

加藤さんがおっしゃったのは、三陸の厳しい海岸線を上り下りしたり、海沿いの岩場を歩くといった結構、体力的にハードなロングトレイルを設定できるよと。あと、満潮になると行けないようなアドベンチャー要素があるようなロングトレイルをつくれたら、非常に珍しく魅力的なトレイルができるのではないかとということでした。

また、アパラチアントレイルのように地域がかかわり、地域から声がわき上がってくるようなトレイルづくりをしようということを提言されています。そして、環境省の取り組みが始まりました。

環境省は、震災復興でグリーン復興ビジョンというのをつくって、7つのプロジェクトを立ち上げました。そのうちの 1 つが、南北につなぎ交流を深める道、みちのく潮風トレイルということで、青森県蕪島から福島県松川浦まで歩く道を通すという事業になっております。

そして、加藤さんは、いいロングトレイルをつくるためには、まず環境省の職員自らが歩く必要があるということでした。そこで私に与えられた最初の仕事が、リュックを背負って現地を歩くことでした。

写真（スライド 6）はスタートのときの JR 八戸線の鮫駅。そして右の写真が、ルートの中でそれなりの距離を占める、昔の交易路の名残である三陸浜街道を調査している様子で

す。そして左下がゴールである汽水湖の松川浦です。当時私は東京勤めだったのですが、東京から出張で通って現地調査に 47 日、他の業務もしながらの調査でしたので、期間とすると 1 年 4 カ月かけて現地調査を行いました。

そして東京勤務の後、岩手県の現地の事務所に赴任しました。みちのく潮風トレイルの作り方の特徴なのですが、地域の方々の参画によりロングトレイルをつくっていききたいということで、地域の住民の方々と座談会をたくさん行いました。

座談会の写真（スライド 7）に写っているのは、ネイチャーガイドの方々とか、関係の役場の方々だとか、右の方は普段から国立公園で活動されているパークボランティアの方々が参画して、ルート案を作っている様子です。

ルート案をつくり、土地を持っている方々とか、その他関係者に同意を取ってルート設定していきます。左下の写真は、地域の住民の方々と一緒に、道が消えかけているようなところを整備して道にするという作業をしているところです。

草が生えてきているところを、地域住民の方々と一緒に草刈りをする作業を、環境省の現地の事務所が音頭を取りながらやって、一緒に道をつくっていったというところが、みちのく潮風トレイルの非常に大きな特徴になっています。

地域住民と行政が、ワークショップを行い、地域資源の再発見、昔あった道を掘り出して、そこにまつわる歴史を掘り出す。そしてその再発見をもって新たに活用していく方法を一緒に考えていく。それがみちのく潮風トレイルのつくり方です。

みちのく潮風トレイルは、企画から 8 年強で、1,025 キロが全線開通しました。2019 年 6 月 9 日に全線開通のセレモニーを宮城県の名取市で行いました。ワークショップをやっていたプロセスの中で 1,000 キロ超えという状況になりまして、この 1,000 キロ超えの道をどう管理していくかということが今後の大きな課題です。このみちのく潮風トレイルが通過する 4 県 28 市町村の首長様に集まっていただいて、みんなで結束してやっていこうということで号令を掛けたのがこの全線開通のセレモニーでもあります（スライド 8）。

地域の方々と一緒に道をつくって今ルートが存在しているというところで、また、後ほど相澤理事からもお話があるかと思いますが、こういった方々と運営側は密に連携して、コミュニケーションを取ってやっていくという努力をしていることが、みちのく潮風トレイルの特徴です。

「ささえる人がいて道がなりたつ」。ロングトレイルは非常に長く、環境省、県、市町村の行政体だけでは成り立たないというのが実際です。システムをどう効率的につくったとしても、そこには住民セクターのかかわりがないと道は維持できませんし、また、道の価値も発揮できないと考えています。

ですので、まさに地域の人たちとともにつくり、歩いていく。それがみちのく潮風トレイルの命題になっているということです。これを 4 県 28 市町村やっていこうということで、今回議題になっている広域連携というところにつながっていくのかなと思っております。

最後のスライド（10）はタレントのなすびさんが地域住民と交流しながら歩く様子です。

なすびさんは、全線開通の少し前にボランティアで全線を歩いて、それで「Facebook」などで話題提供をしていただきました。

なすびさんは、今もみちのく潮風トレイルのメンバーとして大変活躍いただいているところです。私からの情報提供は以上でございます。

(木村宏) ありがとうございます。震災は2011年ですから、2019年までの8年の歳月をかけてこのみちのく潮風トレイルが整備された。桜庭さんがおっしゃる通り、仕組みができていてもやはり住民セクターが関わっていかないと継続した道の活用、維持管理ができない、という話だったと思いますが、できた道の管理をどのようなシステムとして残していくのか、住民セクターをはじめとした多くの人たちをどうやって巻き込んで維持、管理していくのか、この点についてNPO法人みちのくトレイルクラブの常務理事であり、また事務局長の相澤さんからお話をいただきたいと思います。

3. みちのく潮風トレイルを支える仕組みづくり

(相澤久美) 初めまして。NPO法人みちのくトレイルクラブの事務局長、常務理事もしております相澤久美と申します。私からは、「みちのく潮風トレイル」管理・運営の仕組みの構築ということでお話をさせていただきたいと思います。今、桜庭さんからお話がございました通り、みちのく潮風トレイルは太平洋沿岸を南北につなぐ1,000キロを超えるロングトレイルです。震災後につくられた三陸復興国立公園の中を一部通ります。これは環境省の長距離自然歩道という施策の1つで、全国には10本、2万7,000キロの長距離自然歩道があります。

みちのく潮風トレイルは、その中でも一番新しく、1,000キロを超える長い道のりですが、実は10本の中で一番短い長距離自然歩道で、東北太平洋沿岸自然歩道という正式名称が付いています。通称としてみちのく潮風トレイルと呼ばれています。

青森県八戸市から、4県28市町村と先ほどから紹介されておりますが、地図上で示しておりますのでご覧ください。青森県に2市町、そして岩手県に12市町村、宮城県にも12市町村、そして福島県に今は2市町、これで合計4県28市町村の広域連携事業となっています。

また、桜庭さんもおっしゃっていましたが、地域の人たちと一緒につくる、官民連携の枠組みになっており、全線1,000キロの中でルート上に、6つのサテライト施設と呼ばれるインフォメーションセンター、それからビジターセンターが存在します。環境省や県が設置した施設で、これらを運営している民間団体の皆さんとも連携をさせていただいております。

スライドに黄色く主要な6つの施設を示しましたが(スライド6)、そのうちのみちのく

潮風トレイル名取トレイルセンターに私はおります。NPO法人みちのくトレイルクラブのスタッフはここを拠点とし、全線を統括する本部としてルートの管理を行っております。

ほかに、最近、紫色でマークした唐桑半島ビジターセンターや、新しくできた鮎川浜のビジターセンターの方たちとも連携をさせていただきながら、ルートの管理をしています。

先ほど開通までのプロセスについては桜庭さんがお話しされた通りです。ご本人はおっしゃいませんでしたけれども、最初に全線を歩いて調査された桜庭さんが示されたルートをもとにワークショップを実施し、現地調査などを地域の方々と協働し、部分開通を繰り返していかれました。その後さらにイベントやワークショップを重ね、詳細な現地調査を繰り返し、完成をめざしてこられました。当時はいろいろな課題もあったと聞いています。

一番の課題は、このトレイルを誰がどのように維持、管理していくのかという点だったと聞いております。最優先事項はいったい何なのかと。トレイルを何のために設置しているのかを明確にすること、また地域の合意と、地域を挙げた機運の醸成が必要であろうということが課題としてあげられました。桜庭さんがおっしゃっていたことですね。

1,000 キロの道を一定の品質で管理すること、それからルートの管理者が4県28市町村に及ぶことを考えると、管理運営体制の構築をしっかりとしていくべきであろうと議論されたということで、環境省と民間による管理運営体制の構築を検討していく事業が開始されました。

これは2015年から2017年まで、3年間にわたって実施されたのですが、この時点から私も事業に参加しています。官民連携で取り組むために、2015年から宮城県の民間団体として参加しています。それまでは各地のコンサルティング会社の方、ロングトレイルの専門家の方などに、遠方からお越しいただいて多くのお力添えをいただいていたと聞いています。

地域の人達が地域の貴重な資源を守りつつ運営していくためには、地域住民やの民間団体の参画が必要です。多くのステークスホルダーがかかわっていくため、まず共有できる理念をつくらなければならない。これは木村先生にアドバイスをいただいたと記憶していますが、みちのく潮風トレイル憲章を作成しました。

また、やはり大事だったのは地元の関係者の皆さんへのヒアリング、それから関係者の皆さんにも参加していただいた全線の現地調査ですね。コースの状態を4県28市町村、同じ規格で皆がしっかり把握できるような調査。これは、我々調査をする側、環境省や、地域の方々と試行錯誤を重ねました。そして管理台帳の作成です。これは全ルート、1,025キロを台帳に落とし込んで、地図上で管理するものと、「Excel」の表にして管理するものを作成しました。

同時に、啓蒙活動として、ミニフォーラムですとかワークショップを開催して、地域の方にロングトレイルとはいったいどういうものなのか、そしてどのように未来につないでいくのがよいなどお話しして、3年間繰り返しました。あわせて運営計画の策定をしてまい

りました。

策定された運営計画の、最初のページにある、みちのく潮風トレイル憲章をご紹介します。前文と憲章からなっており、必ずセットで皆さんにはお伝えし、見ていただいています。なぜ、何のためにこのトレイルができて、誰がどのようににかかわってくれて、どのように未来につなげるのか、ということが前文に書かれています。次に、みちのく潮風トレイル憲章の 6 つの条文があり、これを今も毎年地域の自治体の皆さんや関係者の方と会議をするときに、必ず冒頭に見ていただき、共有するようにしています。読んでいただくのは大変なので、動画にまとめています。自治体、環境省の職員、協働している民間団体、地域住民の方にも見ていただいて、私たちが発行するハイキングマップブックの中でも冒頭に掲載し、歩く方にも共有していただけるようにしています。

その憲章をつくりながら、ワークショップをしたり、フォーラムをしたりということをして、運営体制を検討していきました。ちょっと表が小さくて申し訳ないのですが(管理・運営体制図)、緑色の統括本部が、みちのく潮風トレイル名取トレイルセンターに置かれています。私どものみちのくトレイルクラブが運営をさせていただいています。そして図の左の方から、種差海岸インフォメーションセンター、北山崎ビジターセンターというふうに、サテライトと呼ばれる民間が運営しているサテライト施設が記載されており、サテライト連絡会と呼ばれる会議が組織されています。また、環境省の保護官事務所があり、種差海岸インフォメーションセンターであれば八戸市、階上町、洋野町という 3 つの市町が名前を連ねていますが、色分けした縦の列ごとに地域連絡会を組織しそれぞれの立場で横断的な話し合いができる場を設けています。

名取トレイルセンターを含めて 6 つのサテライトとサテライト連絡会、サテライトごとの 6 つの地域連絡会で情報共有しながら、全線のトレイルの管理をするために、2017 年から管理運営体制の試行を始め、運営計画を徐々にバージョンアップしていきました。現在、年 2 回、6 つのサテライトが集まり、サテライト連絡会で情報共有をし、これからの事業展開を協議する場として開催されています。

地域連絡会は、年 2 回、6 カ所で開催されているので、合計 12 回で、統括本部はすべての会議に参加しますが、そこで自治体の皆さんに困り事がないか、路体の状態はどうか、どのように利用促進をすべきかというような情報共有をする場になっています。

こういった情報共有の場を持ちながら、全体の管理と利用促進に関して協働して広域に連携して進めています。名取トレイルセンターができるまでは、管理運営体制の試行をしながら、トレイルセンターの事業計画を検討したり、新しく作るホームページの企画検討をしたり、トレイル沿線の利便施設すなわち、宿泊施設やトイレ、お風呂、コインランドリー、スーパーマーケットなど、歩く人にとって必要な利便施設の情報を集約してきました。さらに、トレイルの PR の動画を作成なども、自治体の皆さん、それからサテライトの皆さんに協力いただきながら進めていったのが 2017 年から 2018 年でした。

2019 年 5 月、全線開通の一月前に東北太平洋岸自然歩道、通称みちのく潮風トレイルの

運営計画が確定しました。この道をどのように管理していくのか、またどのように利用促進をしていくのか、運営計画の構成員は誰なのか、そしてその構成員の役割は何なのかということを示したものを策定し、環境省と4県28市町村、6つのサテライトで合意しました。そして、この計画にのっとりみちのく潮風トレイルの運営を実施しています。

その拠点施設である名取トレイルセンターが、運営計画の確定に先立つ2019年4月にオープンしました。こちらでは現在、窓口やインターネットを通じハイカーの皆さんに情報提供しています。全線を大きな地図で俯瞰して見ていただけるようになっていて、館内案内カウンターやオープンスペースで情報提供したり、ハイカー同士、また地域の方とハイカーが交流できるような談話室も提供しています。

2021年の5～6月には、キャンプ場もオープンする予定になっています。このスライドはトレイルセンターの中です。よろしかったらぜひ遊びにいらしてください。

そして、みちのく潮風トレイルは運営計画にもとづいて、市町村の皆さんからサテライトに、サテライトから統括本部にさまざまな情報が集約されるようになっているのですが、それらの情報は名取トレイルセンターのWEBサイトで公開されています。

環境省もみちのく潮風トレイルのホームページを開設していますが、より幅広い情報をお伝えできるように、みちのくトレイルクラブで独自にホームページを作成し、トレイルの歩き方や最新情報、注意情報をお伝えするようにしています。

ルート情報については、トレイルクラブが作成したハイキングマップブックや「Googleマップ」の地図上でもコースを見られるようになっています。歩くために必要な情報を得られるデータブックも作成しており、販売などもトレイルクラブが主体的に行っています。2019年6月9日にみちのく潮風トレイルが全線開通して、先ほど桜庭さんの写真にもありましたが、首長さん、4県28市町村の担当者の皆さんが一堂に会してくださいました。担当の皆さんは総勢80名ぐらいいらっしゃいました。感無量の思いでした。

またみちのく潮風トレイルの応援団も増えていきます。道づくりをこれまで支えてくださった方、町の住民、事業者さん、地域で歩くのが好きな方もたくさんいらっしゃいます。また、子供たちもみちのく潮風トレイルの応援をしてくれています。

そして国内外からハイカーが来てくださって、皆さんが歩いてくださることで、地域住民も少しずつ、みちのく潮風トレイルを認識してくれるようになってきているなと思います。

管理と利用促進というのは表裏一体で、管理台帳を作り、情報収集をして管理はしているのですが、利用をどうするか悩みは尽きません。広域連携する中での役割分担してそれぞれの構成員が利用促進活動、広報活動をしていくための役割分担を図にしています。

一番下、統括本部は、主に通して歩く皆さんを対象に、みちのく潮風トレイルというロングトレイル、1,000キロ超える歩く旅の魅力をしっかりブランディングして、国内外に発信する。

そして1,000キロをしっかりと歩けるようにした上で、その上のセクションをどうするか。セクションハイカーというのは部分的に歩かれる方ですけれども、サテライトは担当しているエリアをハイカーがしっかりと安心して歩けるように管理及び利用促進をする。市町村をまたいだイベントの企画などもあり、そういった情報発信もしてもらっています。

一番上の市町村はデイハイカーがターゲットです。おそらく、ここの利用が人数として一番多いのですが、近隣地域の方が歩いてくださるのをサポートする。それぞれの市町村の担当区間でイベントを実施したりして、利用を促進してもらっています。

最近のみちのく潮風トレイルの全体のルートマップとは別に、市町村ごとに自分たちのエリアのトレイルルートと、寄り道ルートや、観光施設、景観のよいところなどを載せたマップを個別に作り始めてくださっているところもあって、こういったことが進んでいくことでみちのく潮風トレイルの利用を促進できるのではないかと考えています。統括本部が依頼したことではないのですが、具体的にこのような動きが市町村から生まれてきているというのが非常にありがたく、うれしいことだと思っています。

運営計画に構成員の役割分担はあるのですが、それ以上に積極的に取り組んでくださっている状況かと思います。地域の住民の方々は、積極的に整備に協力してくれるようになりつつあり、また、歩いてきたハイカーに親切にしてくださるなど、それぞれに取り組んでくださっています。

憲章の最後、6 段目にあった、「歩くことを愛するすべての人々を歓迎し、皆で育てる道とします」の中にある「みんなで育てる」というのがロングトレイルの事業にとって、本当に大事だと思っています。

みちのく潮風トレイルの場合は、環境省が東北の私たちの住んでいるところに「ロングトレイル」という1つの舞台を用意してくれたのだと思っています。今後、わたしたち事業者や地域住民がこのトレイルをどのように生かしていくのか、それぞれがどう演じていくのか、ということが問われていくのだと思います。

この舞台の上では、ハイカーの存在が重要だと思います。地域の方々は特別なことをしなくても、歩いてきたハイカーに声を掛けてくれるだけでもいいということをお願いしています。

誰でも参加できるのがロングトレイルという事業だと考えており、地域計画の一環で、持続可能な地域づくりにつながると思います。ロングトレイルを歩いていく中では、地域とそこで暮らす人そのものが光で、ハイカーはそれを全身で体験しながら歩きます。実際に触れて、いろいろなことを学んでいく。「光」を「観る」ということが、観光であると言われますが、ロングトレイルにとっては、地域で暮らす人とその生業、歴史、文化、目に入る全てが光ではないかと思っています。

まだまだこれから取り組まなければならないことがあります。たとえばトレイルエンジェルとしてハイカーをサポートする人や、トレッキングガイドを増やす必要もあります。ハイカーである証を持つと、それでサービスを受けられるというような仕組みも作ろうと

しています。ハイキングマップブックをハイカー証の代わりに持っているハイカーはある市町村ではキャンプ場に無料で宿泊していただくことができるような制度です。

また、全線踏破した人の登録の実施や、スタンプラリーの検討もしています。整備ボランティアの登録受付もしておりまして、今現在 100 名ほどハイカーや地域の方が、トレイルの整備活動に協力してくださっています。

本当に歩きに来ていただけたらうれしいです。ただ歩くこと、が東北の復興につながっていくということを信じて、運営計画を作りました。今後、少しずつ成長していて、いずれ統括本部中心の取組がなくても、地域全体が勇氣的、自立的に動いていくようになったら、初めて本当の意味で運営体制が整うことになるのではかと思っています。10 年かかるのか 20 年かかるのか分かりませんが、引き続き地域の皆さんと、すでに連携してくれている仲間たちと、取り組んでいければうれしいなと思っています。

(木村宏) 相澤さん、ありがとうございました。

お 2 人にはみちのく潮風トレイルができた経緯と、それからその持続可能な、最近よくこの言葉が使われますが、長くみんなに愛されるようにしていくにはどうしたらいいのかという話をさせていただきました。

4. 道がつなぐ「広域連携による観光の意義」

(木村宏) 早速議論をしていきましょう。それでは先ず、広域連携による観光推進の意義についてお話しします。広域連携について皆さんどういうふうにお考えになっておられますか。図（スライド 2）に示しました通り、行政レベルでいうと、魅力的なまちづくりを実現するために財政力を上げていくとか、高度な住民サービスを実現していこうとか、それから住民の生活圏の拡大に伴う行政サービスの適正化の類を挙げてみましたが、自治体が連携することによって、業務の効率を上げ合理的に自治運営がなされることを目指すのでしょうか、観光については、誘客市場が拡大していく、ブランドの形成が可能になるなど、多彩な地域の資源の活用・発掘が可能であるなどのスケールメリットが出てくることや、それによって地域でのサービスレベルが上がっていくなどと、連携することにより誘客効果が増していくなどのプラスの面が考えられます。

また、国の観光政策としても、誘客効果を見込んでの広域連携とか、周遊して回る仕組みづくりは、半世紀も前から推奨しているわけですね。しかし課題も見えてきています。地域内の合意形成が取りづらいとか、それから協働に対する価値観の違い。仕組みをつくっても動かない、動かせない。また、それから既得権や、地域の習慣の違いなどが広域の連携を邪魔をするとか、前からある縄張り意識みたいなものですね、そして無関心層の存在。たぶんこういう課題にはお二方とも直面してきたのではないかと思います。

一方で、みちのく潮風トレイル、いわゆるロングトレイルと呼ばれるものの広域連携を考えてみると、連携軸がはっきりしていますね。連携の根幹たる道があって、それを利用して支える、次の世につなげていくという。誰もが共通概念として「道があること」を認識している。

それから、ブランドのイメージもつくりやすいですね。さらに、利用者に対してどういうサービスをすべきかが明確になっています。また、利用者の声が聞きやすい。特にみちのく潮風トレイルのようにシステムチックに運用がされているところでは、ビジターセンターでハイカーの声が拾えとか、主な情報源としてのWEBサイトやSNS上での書き込み等、利用者の声がおのずと集まる。また、それから新たな交流が生まれる、利用者の声に沿ったプログラムへの展開も可能です。こういったいろいろな分かりやすい効果が出てきていて、きちんとハンドリングをしていくことによって広域の連携が強固なものになっていきます。連携軸がはっきりしていることで、広域連携する意味や、成果が見やすいのではないかと考えますが、このあたりを踏まえてお2人に少しコメントをいただきます。広域連携はうまくいかないなというのもまた定説ではありますが、みちのく潮風トレイルの道づくりを通して広域連携に対して感じたことや実際に、直面した事例などお話しください。

桜庭さん、まずは、行政側と立場としてはいかがでしょうか。

(桜庭佑輔) 行政サイドからは、まずこの事業は国でやりましょうということでやり始めましたが、地方公共団体にアプローチしていき、理解と協力を得ながら、地域住民のセクターと道づくりをやったというのが私の先程の説明でした。一方で今木村教授からお話があった、民間事業者同士の連携、お互いに関係のない業種の協働はなかなか発想が追いつかないのですけれど、そこはまだみちのく潮風トレイルが十分できておらず、これから取り組んでいくべきところでしょう。

まず最初にアプローチした地方公共団体さんには、先ほどの観点の通り、我々は何をやりたいのかといったときに、歩く道をつくりたい、そしてそこを人が歩いて、人が歩くという観光というか旅なんですけれども、それを定着させていきたいという話をしました。DMOでも広域連携で苦労している中で、やりたいことがかなりはっきりしていたことが、まず取り組みの取っ掛かりの部分としてはよかったところと思っています。

あとは、地方公共団体に説明したときに、地方公共団体は観光なり交流人口を拡大したいという共通の課題があるのですが、よくよく見てみると市町村さんごとにそれに対するアプローチの仕方が違ったり、あとは、端的に言えばやりたいと思っている計画が、各市町村それぞれちょっと違ったりしました。最初はぴんと来ない市町村もありました。しかし、ある町が、ある村が少しずつ道づくりに理解を示し、すごく盛り上がり始めていつてくる町なんかが出てくると、ああ、うちも通るからやらなきゃいけないのかなという気になってくるというのがありました。ちょっと離れたところが盛り上がり誘客をすすめ、そ

こからハイカーが歩いてくれば、ああ、どおりでリュックを背負った人が来るようになっていいのか、関係者が何かそういうことを言っていたなと思いだしたときに、ああ、他の地域の関係者とLINE（線）でつながってるんだなということに気づき、相互の町を行き来するようなツアーがくまれ始めました。

もちろん号令掛けは必要ですけども、構想から8年9年たって、うちもやりますよという雰囲気になんてなっていましたね。一方で地域住民につきましては、役所、役場の職員が行って顔を見せて参画してくださいと言わないと、参画したいけど参画するチャンスがわからないというか、二の足を踏むようなところがありました。その働きかけは民間事業者にも積極的にやってこようと思っていますし、これからもやっていかなきゃいけないところです。みちのく潮風トレイル自体、今のところ行政サイドである程度うまく連携できているというような状況かと思います。

（木村宏） 国の事業に歩調を合わせたところもあれば、最初は懐疑的であった地域もあるでしょうし、私も少なからずみちのく潮風トレイルの事業には関わらせていただきましたが、震災復興の最中に、レジャーのための道をつくるというか、観光のための道をつくることに反対の意見も多かったと思いますが、その辺はいかがでしたか。

（桜庭佑輔） やはり震災になる前から、東北でも仙台のような大都市もあれば、被災地沿岸というのはわりと小さい規模の自治体もありますし、そういったところは地域課題として、もともと交流人口の拡大というテーマは非常に大きなテーマでした。

その中で、復興のための町づくりの方法というのが課題になり、1度津波で流されたところについて、都市計画をやり直して、防潮堤を造り、緑地を造り、人が高台に移転している。新たな土地利用が区分けされたが、住民がそのエリアにどうかかわるのかということ自体が、地域住民もなかなかイメージがわいていなかったと思います。こういったときによそから人が訪れるという想像をもって、被災した土地を見ることをワークショップにおいてやりました。ああ、人がこの地域にまた来てくれるようになるのかなと考える。ワークショップは、参加した地域の方が住んでいる町の未来をイメージする作業でもありました。

（木村宏） だんだんと地域の人たちも足元を見るようになってきたということでしょうね。

（桜庭佑輔） はい、そうです。

（木村宏） 相澤さんはNPOの立場で同じように前に進めてこられましたが、連携すること、広域連携を仕掛けるうえで何か苦労されたりとか、地域の中に入られた際に、地域

の人たちの思考が変わってきたとか、何か広域連携について思われたことはありますか。

(相澤久美) よくある話ですが、先ほどご説明した通り全市町村へのヒアリングを繰り返したわけですが、自治体は担当者が替わっていくわけですね。なので、当初、環境省の担当官が話をしてくださっていた自治体の担当者がもういなくなっていて、またゼロから「トレイルって何ですか?」というようなことが多くありました。一方で小さな村のやる気のある担当者さんで、担当がずっと変わらない人もいらして、そこはずっとやる気がある。

行政機関と広域連携をやっているといわれるのは、担当者が替わっていくこと。過去の取組をつなぎ止めることができるのは民間の管理団体の役割だと思います。我々の人員配置はあまり替わらないです。先ほどお伝えしたサテライトとしてある、ビジターセンター、インフォメーションセンターを運営しているのも地域の民間団体の皆さんなので、めったに異動や配置換えがないので、過去の経緯をちゃんとお伝えできる。また、みちのく潮風トレイルは、たまたまアクティブレジャーと呼ばれる地元採用の女性たちが何人かいるのですが、彼女たちが替わらずにいてくれたおかげは大きいです。新しく異動してこられた環境省の保護官にも新しくなった市町村の担当者にも、みちのく潮風トレイル憲章など、過去の取組や先人の思いを伝えてくれています。

それがないと、新しい担当者に対して、何のためにこれをやってきたのかを伝えられない。マニュアルだけでは伝えきれないことを、環境省の内部で伝える人たちがいたことはありがたいことでした。また、サテライト連絡会と地域連絡会という、会議体を構成しており、統括本部は年 14 回、会議を巡業していくのですが、そこで直接顔を合わせて、毎回しっかり議論していくというのは実際とても良い仕組みだと思います。

必然的に、担当者はだいたい 3 分の 1 ぐらいずつ替わっていきますので、そのたびにゼロからしっかり説明することを続けていかななくてはならないと思っています。

(木村宏) 広域をつなぐ、みちのく潮風トレイルには憲章があって、何かあったらその憲章に戻ってみる機会があり、ただ、担当者はどんどん替わっていく。そこに NPO があって、官民の連携とはよく使われる言葉ですけど、まさにこれが官民が連携をすることによって気持ちが伝わっていくということですよね。

(相澤久美) そうですね。ですから、憲章は紙の上にあるだけではだめで・・・皆さん読まないのですね。そこで、思いが通じるような動画の制作も試みました。動画にすることで憲章を身近なものにできるようにしました。

(木村宏) 全線開通してから 1 年ちょっと、2 年目になりますかね。途中で新型コロナウイルス感染拡大という予想もしなかった事態に陥りました。コロナ騒ぎの直前までは外国

人もだいぶ歩き始めていたようではすけれども、いろいろなハイカーが歩くことによって、地域の人がどんなところで、広域連携していると意識していると感じられますか。

(桜庭佑輔) 全線開通してからコロナの前に台風被害もあって、なかなか全線開通の実績を積む期間が短くて、来年以降また本番を迎えるような感じかなと思っています。

(相澤久美) ずいぶん歩いてくれています、本当に。5月ぐらいからです。全線開通の直前から、みちのく潮風トレイルをたくさん報道していただきました。去年台風の直後に地域の事業者さんにヒアリングに行くという機会があったのですが、驚くほどに協力的で、道案内してくれる、電源を貸してくださる、水をくませてくれる、ここに浄水を引いてあげるとか、様々な協力をお伺いした事業者さん全員が話して下さいました。

それはなぜかと聞くと、「歩いている人をよく見かけるよ、朝職場に行くときに歩いていて、家に帰ろうとしたらまだ歩いているんだよね、あの人たち。大きなバックを背負っているから目だつよね」など。私が仕事で歩いていたら、畑にいたおじいちゃんたちに、「今日はバックバックがちっちゃいね」って言われたこともあります。私は仕事なので小さいバックバックを背負っていたのです。

とてもリアルに、ハイカーが歩いていることを地域の人たちが見ています。歩いていると結構目立ちます。ハイカーには「どこからきたの？」と声をかけてくださるのですが、遠くから歩いてきたことに皆さん本当に驚いて、頑張ってるね、と声をかけてくれたりもしています。

(木村宏) ハイカーを介してつながっていることが分かってきたりしているのですね。あそこから歩いてきたのか、どこへ行くのってね。

(桜庭佑輔) そうですね。この人がすごく遠くから来ているんだ、そことつながっているんだという感覚はたぶんトレイルを通してお持ちになっている方が結構いらっしゃるのではないのでしょうか。

5. 新たな挑戦で何が見えたのか

(木村宏) それでは話題を変えて「新たな挑戦で見えてきたもの」について議論したいと思います。

これは宮本常一の言葉ですが(スライド 7)、要約すれば、歩いてみると大事なものが見えてくるよという内容です。歩かなければ分からないよとも読めますね。文字だけでは読み解けないものも関わった人の分だけ意味があるとも言っています。もう一点、これは私

の恩師が言ったことですが、恩師がアメリカへ留学しているときに、アメリカ人の教師が言ったことだそうです(スライド8)。日本は広い国である。峠を越えるたびに文化や言葉、風習など国が違う、これほどまでに多様な文化を持つ奥深い国はない、という話ですが、少し意識気味ですが、歩いてみなくては分からないことが多分にある。そして歩くことは楽しいということではないでしょうか。

もう一つ、これは、イザベラ・バードの東北紀行の軌跡です。東北の日本海側を主に歩いています、みちのく潮風トレイルのある太平洋岸は船で帰ってきています。イザベラ・バードが初めて日本を訪れて、東北を歩いて、いろいろなものを感じた。その時の思いが今もたくさん書物で残っていますが、明治の時代の出来事であるこの軌跡をたどる人たちが現れ、それを契機にして交流会が生まれ、勉強会や、イベントが催されています。すなわち、これはイザベラ・バードが道中で見聞し、感動したことが今の時代に語り継がれつながっているという例だと思うのですが、私の恩師の教師が言った小さな日本の国のさらにその中に存在する国を超えて道を歩くことの価値と宮本常一が言う道を歩くということの意義、という2点の視点を念頭に新たな挑戦で見えてきたことについてのお話をお願いいたします。後世に残る道として、今見えてきたことをお話してください。

(相澤久美) 私はもともと観光関係者でもありませんでしたし、トレイルのことも全然知らなかったのも、個人的には気が付かない間に挑戦することになり、すべてのことが新しいというのが正直なところですかね。ただ、宮本常一は大ファンです。また、地域の方々の声を聞かせていただくことの大切さについては、震災をきっかけに東北に10年ほど通う中、痛感しています。まずは桜庭さんの話を聞いてみます。

(桜庭佑輔) 先ほどのスライドで、路傍の石碑にもいろいろな意味があるという話でした。トレイルの路線設定の仕事は4年取り組みましたが、私が行ったのは地域の人たちと直接触れ合って道づくりをしたということです。何がその中で見つかるかというと、道のその地域での意味とか、歴史といいますか、住んでいる人たちにとっても意味合いがある道というか、単純に現地調査では分からなかった、ちりばめられたいろいろな価値、いろいろな情報が、ワークショップをやるごとにいっぱい出てきたということですね。

なので、道は人によって持っている思いが違って、すごく多面的な価値を持っていて、歩くことによって少し想像するのですが、それが、ただ通常の旅をするとか観光するとかとは違う次元の体験というか、自分の内面の中を掘り下げるプロセスみたいなのがあって、現地調査ですら分からなかったことが地域の人々とともに活動することによってどんどん自分の中で深まっていきました。例えばワークショップをやった後に、まだ道がつながらない区間があったのですが、そこを1人で調査したときに、ああ、この道はこういうにおいがする、こういう意味合いがあるとか、そういったことがルートを歩くことで自分の中でどんどん深まっていきました。

道の意味合い、歴史自体を私は知らないけれど、使われてきた道の裏側に深い世界が広がっているのだなという思いになった。道を歩いて感じるものは、たぶん人それぞれです。その中で目撃できるというか、感じられるものが全然違うので、そこら辺がやはりこの道づくりや道を歩くことの魅力であるというふうに思いました。

(木村宏) 私もワークショップでお邪魔しましたが、地域の人たちが回を重ねるごとにその探究心を深め、学ぶ姿勢が強くなっていく様子を思い出します。それと、私が印象深かったのは、自分の地域のことを一生懸命調べれば調べるほど、隣のことが気になりはじめ、隣の町はどうなっているのか、自分の住む町とどんな関係にあったのか、そこを歩いてみよう、その先はどうなっているのだろうと道に対する想いも、まさにつながっていく、連携していく、探求がどんどん広がっていく、それが1つの価値観として、共感としてつながっていくということを参加者が感じている様子です。この光景に接し、これは道だけでなく、人の心がつながっていくのだなと思いました。

まさにそういうことはやってみなくては分からなかったことですし、チャレンジすることで人々の気持ちに変化していく、繋がっていくということなのではないでしょうか。

(相澤久美) 皆さんがおっしゃった通りですけれども、私はこの事業に関わったときは、ある程度ルートは決まりトレイルができつつある時でした。それをどうやって運営していくのかを検討するのが私の仕事でした。まさに喧々諤々とやってきました。しかし、仕組みをつくっただけではだめだということを、日々感じています。

後発ながら調査に参加し、トレイルづくりに参画し、そこに集う様々な人たちの関わりがどんどん増えていくことで、魂がこもっていくことを実感しています。この数年、人と物と事が有機的につながっていけるように沿岸を走り回ってきました。今もまだ試行錯誤の最中です。

6. 歩くことで見えてくる地域の姿、歩く文化の醸成

(木村宏) 続いて3つ目の議論に入ります。ここでは歩く文化の醸成についての議論をしたいと思います。ま桜庭さんは道なき道をつなげる作業からスタートし、その道筋が何となく見えてきた、そしてその道を歩くための仕組みができ、徐々に人が歩き始め、感動している人が現れてきたという経過をたどっています。みちのく潮風トレイルを歩く文化というものができ始めているのでしょうか、この時点でまだ文化という言葉を使っているのか分かりませんが、歩く文化の醸成についてご意見ありますか。

(桜庭佑輔) みちのく潮風トレイルは現在海外からはなかなか来られない状況ですけど、

スルーハイクといって一気に歩き通すという方々、1 カ月半か 2 カ月ぐらいかかるのですが、そういう方々がいっぱい出てきているということに正直驚いているのが私の感想です。

道の設定はしましたが、歩く人、それに繰り返し関わる人たちが交わって魂が宿る道としてつながっていく。そしてその価値がつけられている。多面的になるということだと思います。それが交わって何かがつくれる、その仕組み自体が文化をつくっていく、定着させていくということになっていくのだと思います。ですから、今後、たぶん 100 年たっても 1000 年たってもそこが一番重要で、歩く人とそこに存在する、簡単に言えば住まう人たちとの接触、もしくは歩く人同士の接触、まさにアパラチアントレイルが何で文化と言われるかという、そういう人と人とが交わってつくり上げていく空間が何千キロも連続しているという素晴らしいものだから、文化として認められている。

そして、一番その要素として大事だなと思うのは、アパラチアントレイルは地元の人が歩く人を尊敬するそうです。そうすると、歩く人は地元の人に感謝してまたそれも尊敬の念にかわるのです。人と人とが交わる時に、ものすごくポジティブな、もしくは感動的な感情がお互いにあり、そしてそれを唯一無二のものだとして感じるという。そこまでのプロセスになっていくことによって、文化として、素晴らしいものとして定着していくという段階に入っていくのではないかなと思います。

(木村宏) 前回の話にあったフットパスの文化。フットパスというのはイギリスを中心とした、これも歩く文化だと思うのですが、今のアメリカの人と人とが尊敬し合いながら歩いて、肩を組み、歓喜するという、この文化とまた違いますね。

やはり文化はそれぞれにあるということ、私はいま話を聞きながら感じたところですが、相澤さんはいかがですか。トレイル文化が開花したなと思いますか、みちのく潮風トレイルの場合は。

(相澤久美) 正直まだまだだと思っています。アメリカのハイキングカルチャーについて、私はいろいろなハイカーから今教えてもらっています。まだまだ私自身も学んでいる状況ですし、みちのく潮風トレイルにトレイル文化が開花したのかも判断ができません。木村先生が代表を務められる信越トレイルですとか、北海道だと北根室ランチウェイの代表の佐伯雅視さんですとか、一般社団法人日本ロングトレイル協会に参加されているいろいろなトレイルの先輩がたくさんいらして、その取組を学んでいる最中です。まだ産声を上げたばかりのみちのく潮風トレイルにトレイル文化が育まれたとは言い難いです。それはこれからではないでしょうか。

みんなでちょっとずつつくり上げていくというか、トレイル事業を進める先輩たちの活動を参考に我々が内外の人々の交流の懸け橋を整備し、少しずつその文化らしいものに近づけているのかなという気がしています。私が生きている間に、本当に歩く旅の文化というものが日本に根付くのを見届けられるのかも正直分かりません。

ただ、みちのく潮風トレイルでも少しその芽が生えてきていて、それに栄養をたくさんあげたり、陽当たりをよくしてあげたりして、一緒に育っていききたいなと思います。

(木村宏) みちのく潮風トレイルをつくるときに、環境省が、「歩いて旅をすることを理念としたロングトレイルの文化を日本に定着させることを目的とする」とうたっています。

東日本大震災からの復興に貢献するものとして、また、震災の記憶を引き継ぐための道である。先ほどからお話が出ている交流だとか、人々の暮らし、生活、生業、その他地域の文化、これに地域住民と関係者としてハイカーが交わることで、交流することによって新しい文化ができていく。

まさにこれが東北、みちのくの歩く文化になっていくのでしょうか。みちのく潮風トレイルの文化をつくっていくということについては、これからもお2人にはご尽力いただきたいと思っていますし、さらなる躍進をお祈りいたします。最後に、みちのく潮風トレイルの文化の醸成についてその抱負を語っていただきましょう。まず、相澤さんからお願いします。

(相澤久美) 本日は皆さま、どうもありがとうございました。引き続き地域の皆さんと環境省、それからハイカーの皆さんと協働して、みちのく潮風トレイルを育てていきたいなと思います。仲間になってくださる方、ウェルカムですので、どうぞよろしく願いいたします。

(木村宏) それから、ナショナルトレイルという、国の管理のもとに開設されたトレイルということで、本日はお話をしていただきましたけれども、このナショナルトレイルが果たす役割と未来像みたいなものを、最後に桜庭さんにお話しいただきましょう。

(桜庭佑輔) 相澤さんのお考えと一緒に、みちのく潮風トレイルはまだまだだと思いますけれど、歩く文化ということであれば日本という国の国土を見たときに、いろいろな、まさに景色、風土があって、日本ロングトレイル協会に加盟しているところも含めていろいろなトレイルがあると思います。日本で働いている人は、2週間ぐらい休みを取るというのが限界だとすると、例えば250キロぐらいのロングトレイルが各地域に何本か出来上がるということによって、各地域の風土、文化、地域住民の生活とか、そういったことが見て回れる仕組みが日本の国に定着してくるのではないかと思います。そういった取り組みをまさに官民でやっていくというような状況になれば日本の歩く文化の発展にもつながっていくのではないかと思います。

(木村宏) まさにナショナルトレイルの今後の在り方をお示しいただきました。

歩く文化の醸成についてはその先の効果も期待できそうです。本来ならばこれからさら

に掘り下げて議論をしたいところですが時間が過ぎてしまいました。また第2弾、第3弾をしなくてはならないと思いながらも、ここで本日の議論の場を閉じたいと思います。

何かと不手際が多く、桜庭さん、相澤さんには存分に思いの丈をご披露いただけませんでしたことお詫びいたします。また、遠路お運びいただきましてありがとうございました。これもちまして本講座を終了させていただきます。視聴いただきました皆さんもありがとうございました。

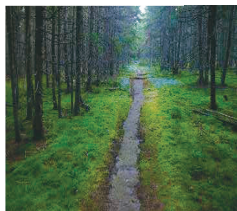


1



2

アパラチアントレイルの風景



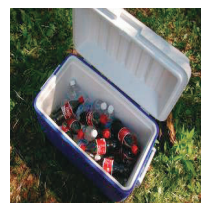
苔むした森に続く一筋のトレイルルート



半年の長くつらい旅がハイカーどうしの心の交流を深める



トレイルセンター



ハイカーを無償でもてなすルート沿線の住民

アパラチアントレイルは東部アメリカの【文化】になっている

3

2011.3撮影 @環境省

海岸のロングトレイルは
めずらしいから海外からも
人が来るよ

三陸でロングトレイルを作ったら
いい道ができるよ

アパラチアントレイルのように地域
が関わり、地域から声が湧き上
がってくるようなトレイルにしよう！

三陸の厳しい崖の海岸線を登り下りしたり、
満潮になるといけないような道がGOOD

4

みちのく潮風トレイルの経緯

＜基本理念＞

**三陸復興国立公園の
創設を核とした
グリーン復興**

-森・里・川・海が育む自然とともに歩む復興-

再編成を検討する地域
(青森県八戸市の蕨島から宮城県石巻市・女川町の牡鹿半島までとその周辺の自然公園)

種差海岸隔上岳

みちのく潮風トレイル

陸中海岸

気仙沼

南三陸金華山

祝上山万石浦

松島

松川浦

○ 国立公園
● 国定公園
○ 県立自然公園

＜基本方針＞

1. 自然の恵みを活用する
2. 自然の脅威を学ぶ
3. 森・里・川・海のつながりを強める

グリーン復興プロジェクト

- ① 三陸復興国立公園の創設(自然公園の再編成)
- ② 里山・里海フィールドミュージアムと施設整備
- ③ 地域の宝を活かした自然を深く楽しむ旅(復興エコツーリズム)
- ④ 南北につなぎ交流を深める道
(みちのく潮風トレイル 青森県蕨島～福島県松川浦)
- ⑤ 森・里・川・海のつながりの再生
- ⑥ 持続可能な社会を担う人づくり(ESD)の推進
- ⑦ 地震・津波による自然環境への影響の把握(自然環境モニタリング)

5

職員実行で現地調査47日

(移動だけの日含めて49日)

6



7



8



9



10



1



2

三陸復興国立公園の中を歩くロングトレイル

日本に34あり、東北地方に2つある国立公園の1つ「三陸復興国立公園」。青森県エリア、岩手県北部エリア、岩手県中部エリア、岩手県南部エリア、宮城県エリアの5つのエリアからなる。北部は波がつくりだした豪大な海岸が続くのに対し、南部は入り組んだリアス海岸がみられる。繰り返される津波や夏のやませによる冷害といった自然の脅威とも共存してきた人の知恵や技術、文化を体験できるエリア。



日本の国立公園の分布(環境省HPより)



三陸復興国立公園エリア

○日本の長距離自然歩道のひとつ

長距離自然歩道は、環境省(当時の厚生省)が昭和44年(1969年)から計画し、国及び各都道府県で整備を進めた。昭和45年(1970年)の東海自然歩道の整備に始まり、50年経つがまだ開通していない道もある。日本に10あるすべての道の整備が完了すれば、全国自然歩道の総延長は約27,000kmとなる。みちのくに圏道トレイルは、全線開通した一番新しい道であり、唯一官民連携の管理体制が敷かれている。

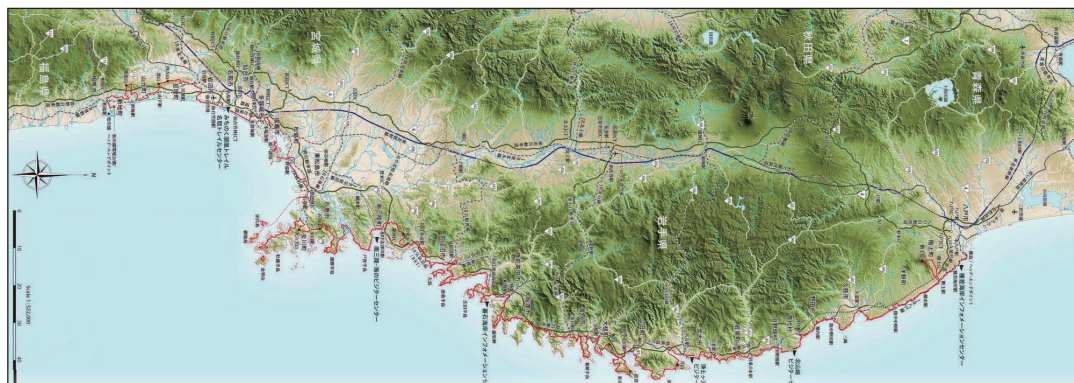
4. 長距離自然歩道一覧(着手年度順)

名称	整備年度	延長
東海自然歩道	昭和45～昭和63	1,697km
九州自然歩道 (やまびこさん)	昭和50～昭和55	2,920km
中国自然歩道	昭和52～昭和57	2,303km
西国自然歩道 (西国のみち)	昭和56～平成元	1,637km
首都圏自然歩道 (関東ふたのこのみち)	昭和57～昭和63	1,800km
東北自然歩道 (新庄の城道)	平成2～平成8	14,374km
中部北陸自然歩道	平成7～平成12	14,028km
近畿自然歩道	平成9～平成15	3,295km
北海道自然歩道	平成15～平成24	4,585km
東北太平洋沿岸自然歩道 (みちのくに圏道トレイル)	平成25～平成30	900km



(出典: 自然大好クラブHP 環境省)

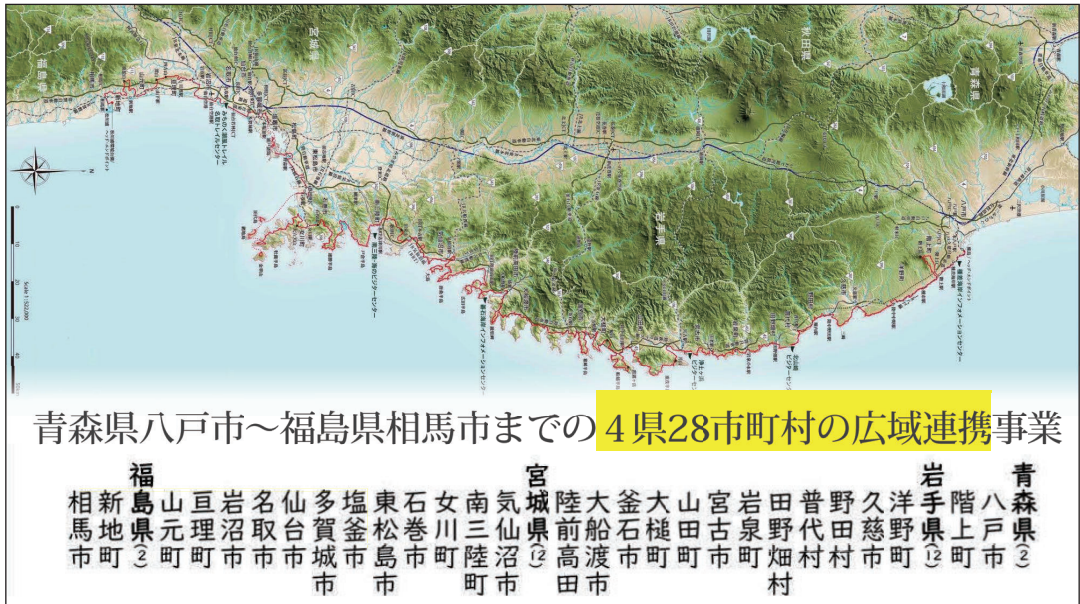
3



青森県八戸市～福島県相馬市までの **4県28市町村の広域連携事業**

6つのサテライトも連携し運営する1,025キロのトレイル

4



5



6

部分開通までのプロセス



7

平成23年～路線設定→環境省の自主事業として開始

<ワークショップによる路線決定>



<住民とともに現地調査>



<イベントによる普及啓発>

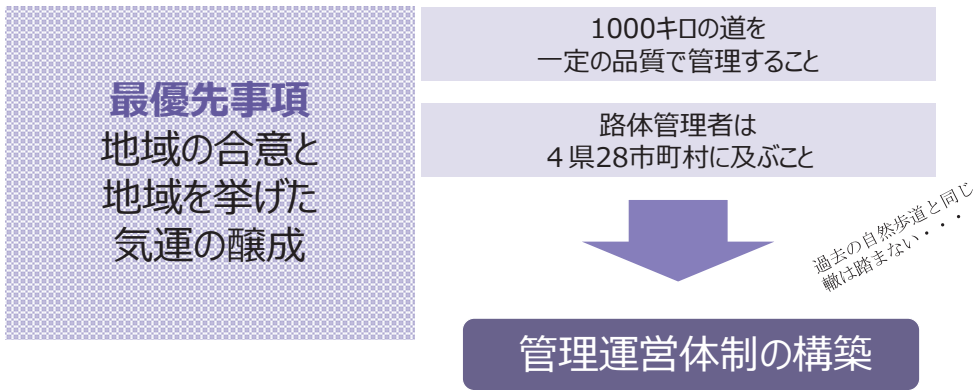


- 派手なイベントに興を唱える人も！（復興のさなかに何事だ！）
- 住民の意識が上がらない、浸透しない。
- 路体の設定に手間がかかる、管理者への理解がなかなか得られない。

暗中模索

8

路線の設定と並行して最優先事項の整理が必要

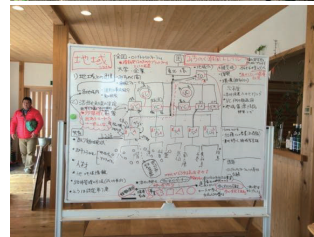


9

環境省＋民間による管理運営体制構築の検討

1. 地域の合意＝理念の共有 →「みちのく潮風トレイル憲章」作成
2. 全線開通に向けてスケジューリング
3. 体制づくりのための検討・調査等
 - ・地元関係者へのヒアリング
 - ・全線の現地調査→路体管理者（所有者）のリストアップ
 - ・管理台帳の作成
 - ・環境省との調整（推進本部、現地保護管理事務所との打ち合わせ）
 - ・先進地事例調査（九州自然歩道、日本ロングトレイル協会等）
 - ・普及啓蒙活動（ミニフォーラム、ワークショップ…）
 - ・ビジターセンターネットワークの構築→サテライト施設
 - ・メインセンター（統括本部）の設置計画策定
 - ・メインセンターの機能・設計
 - ・総合的な管理運営計画の策定

2015年度～
宮城県の民間団体が参画
(自然体験活動団体)



管理運営体制の検討

2015年～2017年

10

みちのく潮風トレイル憲（前文）

2011年3月に発生した東日本大震災は、東北太平洋沿岸に未曾有の被害をもたらしました。千年に一度と言われる自然の猛威に直面し、自然とどのように向き合うべきか国内外問わず世界中の多くの人たちが考えざるを得ない大きな転換点となりました。環境省は震災後、持続可能な地域づくりを目指すと共に豊かな自然と地域の暮らしを未来に引き継ぐため、「グリーン復興プロジェクト」を策定し、取り組みを進めてきました。その取り組みの一つが、「みちのく潮風トレイル」です。

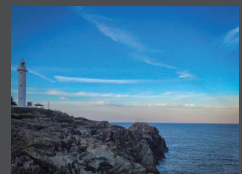
自然と人との関わり方を考えるために「自然の中を歩くこと」の大切さを提唱し続けた加藤則芳氏より、「三陸海岸の国立公園を通るナショナルトレイルを官民協働で」との提言を受け、青森県八戸市から福島県相馬市までの4県28市町村にまたがり太平洋沿岸を一本の道でつなぐ、海岸のロングトレイルが誕生しました。

美しい自然や景観はもちろんのこと、地域に暮らし人々とこの地を訪れる人々との交流、自然の恵みと震災の記憶、自然との共生の中で育まれた暮らしや歴史・文化を大切に、このトレイルに関わる人々にとって「自然と人の共生を示す象徴の道」となり、誇りあるナショナルトレイルとして存続することを願い、ここに6つの憲章を定めます。

11

みちのく潮風トレイル憲章

1. 美しい風景と風土を 楽しむ道 とします
2. 地域に暮らす人々とこの地を訪れる人々の間に
心の交流が生まれる道 とします
3. 自然の優しさと厳しさを 胸に刻む道 とします
4. 震災をいつまでも語り継ぐための記憶の道 とします
5. 豊かな自然・文化を次世代へ 受け継ぐ道 とします
6. 歩くことを愛するすべての人々を歓迎し、
皆で育てる道 とします



12

環境省＋民間による管理運営体制構築の検討

ゲストを招き、地域住民や行政関係者向けのワークショップ、基調講演やクロストークを2年連続各地（で開催



管理運営体制の検討

2015年度～2017年度

13

みちのく潮風トレイルの管理・運営体制

みちのく 潮風トレイル 連絡会 構成 団体	統括本部																																																																																									
	    															統括本部																																																																										
	サテライト サテライト運営者／事務局 サテライト連絡会 構成会→															三陸沿岸 インフォメーション センター NPO法人 ACTY 北山崎ビクター センター NPO法人体験・たのびの ネットワーク／田野畑村 浄土ヶ浜ビクターセ ンター産直協議会 ／宮古市 一社）大船渡市観光物産協会 碓石海岸のびビク ターセンター NPO法人海の自然史 研究所 みちのく潮風トレイル 名取トレイルセンター NPO法人みちのくトレイルクラブ																																																																										
	サテライト運営協議会 構成会・出資本															環境省／八戸市／階上町 NPO法人ACTY 環境省／岩手県／宮古市など沿道17市町村／宮古観光文化交遊協会会長 関啓祐 大船渡市 業務課員先：一社）大船渡市観光物産協会 環境省／南三陸町／石巻市／NPO法人海の自然史研究所 環境省／名取市／NPO法人みちのくトレイルクラブ																																																																										
	環境省 八戸 自然保護官事務所 宮古 自然保護官事務所 大船渡 自然保護官事務所 石巻 自然保護官事務所															仙台 東北地方環境事務所																																																																										
	全体通し番号 地域連絡会通し番号																																																																																									
	<table><tr><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td></tr><tr><td>八戸市</td><td>階上町</td><td>洋野町</td><td>久慈市</td><td>野田村</td><td>喜代村</td><td>田野畑村</td><td>岩手県</td><td>山田町</td><td>大槌町</td><td>釜石市</td><td>大船渡市</td><td>陸前高田市</td><td>気仙沼市</td><td>南三陸町</td><td>大川町</td><td>石巻市</td><td>東松島町</td><td>多賀城市</td><td>仙台市</td><td>名取市</td><td>岩沼市</td><td>亘理町</td><td>山形市</td><td>新地町</td><td>相馬市</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																														1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	八戸市	階上町	洋野町	久慈市	野田村	喜代村	田野畑村	岩手県	山田町	大槌町	釜石市	大船渡市	陸前高田市	気仙沼市	南三陸町	大川町	石巻市	東松島町	多賀城市	仙台市	名取市	岩沼市	亘理町	山形市	新地町	相馬市				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30																																																												
	八戸市	階上町	洋野町	久慈市	野田村	喜代村	田野畑村	岩手県	山田町	大槌町	釜石市	大船渡市	陸前高田市	気仙沼市	南三陸町	大川町	石巻市	東松島町	多賀城市	仙台市	名取市	岩沼市	亘理町	山形市	新地町	相馬市																																																																
	都道府県 青森県 岩手県 宮城県 福島県																																																																																									
地域連絡会 三陸沿岸インフォメーションセンター連絡会 北山崎ビクターセンター連絡会 浄土ヶ浜ビクターセンター連絡会 碓石海岸インフォメーションセンター連絡会 南三陸・海のびビクターセンター連絡会 みちのく潮風トレイル 名取トレイルセンター連絡会																																																																																										

みちのく潮風トレイルは、統括本部としての名取トレイルセンターを中心に、6つのサテライト施設で管理・運営。各市町村との連携についても、サテライト施設を通じて連絡会を実施。管理・運営だけでなく、広報イベントの実施等利用促進においても、サテライト施設と連携・協働すること、様々な対応がスムーズになるよう調整。（※現在は、唐桑半島VVC、南三陸・川口VVC、杜都半島VVC等が必要に促して連携）

14

環境省＋民間による管理運営体制の試行

1. 第1回、2回：サテライト連絡会議の開催（6つのサテライトが年に2回参加）
2. 第1回、2回、3回：地域連絡会議の開催（4県28市町村がサテライト毎に年に2回参加）
3. 全市町村、一斉巡視の実施→管理台帳の更新
4. センター事業計画の詳細検討（運営マニュアル、収益計画の検討等）
5. ホームページの企画書作成
6. デジタルマップシステムの構築検討
7. トレイル沿線の利便施設調査
8. トレイル宣伝用動画の作成（風景、インタビュー、地域住民）
9. センターパンフレットの作成
10. トレイルを活用したプログラムの実施
11. 関係イベントでのトレイルの宣伝
12. 全線開通式典の準備
13. トレイルセンター開所式に向けての準備……他、諸々
14. データブックの調査及び作成（助成金事業）



管理運営体制の試行

2017年度～2018年度

15

2019年5月、

東北太平洋岸自然歩道（みちのく潮風トレイル）運営計画 確定

東北太平洋岸自然歩道（みちのく潮風トレイル）

運営計画

令和元年（2019年）5月
東北地方環境事務所

1. はじめに
 - (1) みちのく潮風トレイル憲章
 - (2) 本計画の趣旨及び位置付け
 - (3) 用語の定義
2. 広報
 - (1) 実施把握
 - (2) 歩道の情報の管理及び共有
 - (3) 路線地図の作成
 - (4) 利用者への情報発信の内容
 - (5) 情報発信の手段
 - (6) 問い合わせへの対応等
3. 企画
4. トレイルセンターの管理運営
5. 運営の体制
 - (1) 構成員
 - (2) 運営体制
6. その他
 - (1) 路線の再設定

16

拠点施設：みちのく潮風トレイル名取トレイルセンター



2019年4月19日 OPEN!!

2021年
キャンプ場OPEN!

管理運営体制の実施

2019年度～

- 面積
約1,000m²
- 収容人員
約200名
- 従業員
6名
- アルバイト
1～2名

17

ハイカーのための設備



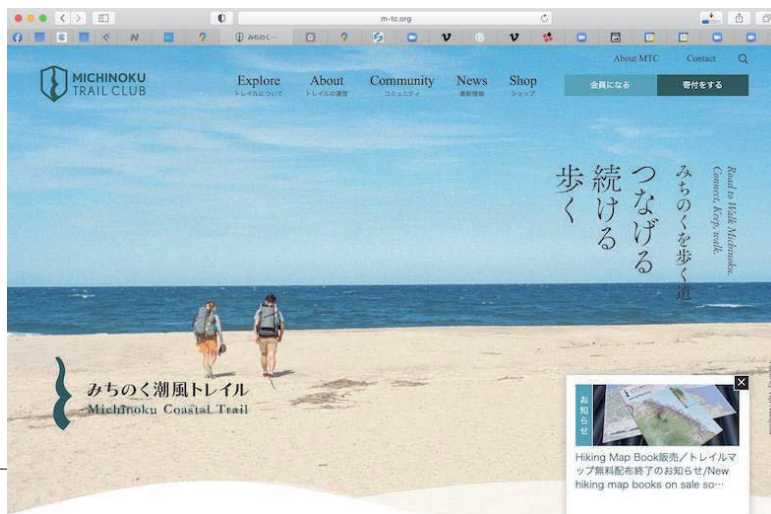
18

NTC Website



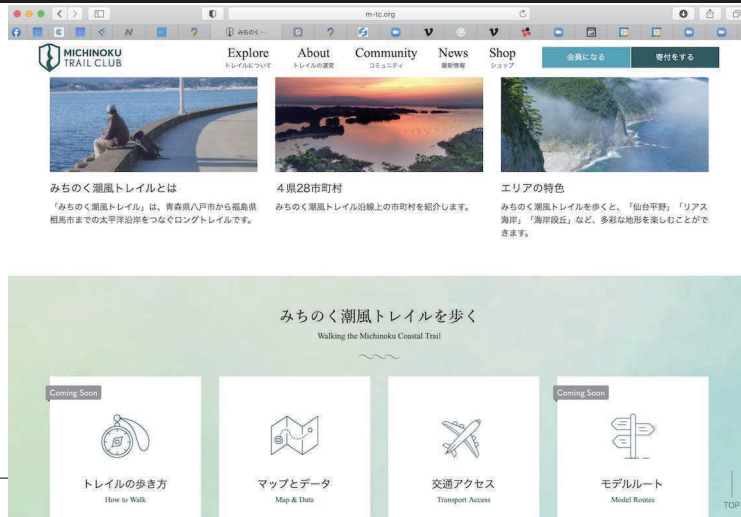
19

NEW Website



20

NEW Website



21

NEW Website



22

NEW Website



Explore
トレイルについて

About
トレイルの運営

Community
コミュニティ

News
最新情報

Shop
ショップ

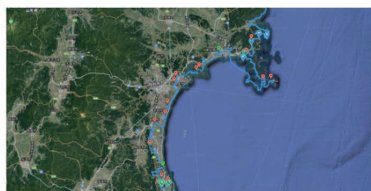
会員になる

寄付をする

Maps and Data

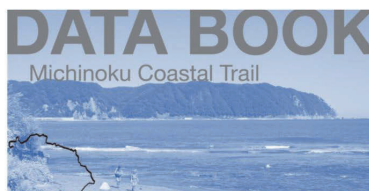


1000kmを超えるみちのく潮風トレイルを歩くためには、ルートの情報が必要不可欠です。みちのくトレイルクラブでは、Google Map上にルートを公開しているほか、ご自身の端末にダウンロードしてお使いいただけるGPX形式の地図データを公開しています。歩きながらスマートフォンで確認できるので、とても便利ですが、電池切れをする可能性や、みちのく潮風トレイルのルートの中には、携帯電話が圏外になるエリアもあります。必ずご自身が歩く区間に対応したHiking Map Bookを持ち歩くようにしましょう。



オンラインマップ・GPSデータ

ご自身のスマートフォンの中に、みちのく潮風トレイルのルートをダウンロードして、いつでもルート情報をチェックしてみましょう。



地図・データブック

区間ごとのルートを記されたHiking Map Book、全線に渡るスポット情報が記されたData Book。どちらも活用してみちのく潮風トレイルを楽しんでください。

23

2019年6月9日
みちのく潮風トレイル
全線開通！

24



25



26



環境省、4県28市町村の担当者の方々

27



道づくりを支えてくれた人も

28



29



30



31

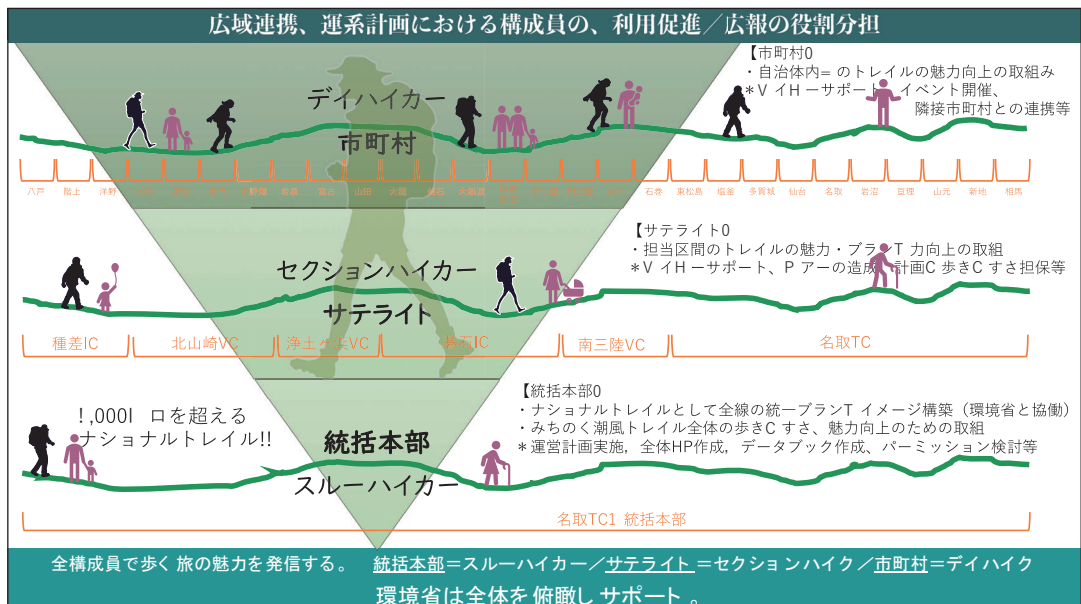


32



ハイカーは地域への広告塔！

33



34

歩くことを愛するすべての人々を歓迎し、
皆で育てる道 とします

35

多くの方の参加があり、初めて繋がっていく

皆で育てる道

ハイカーは歩くことで道を育てる

地域の人は特別なことはなくても、

ハイカー（歩く旅人）に声をかけるだけでいい

トレイルがあることを知ってくれるだけでもいい

けど、いまや道の整備やハイカーのサポートにも協力してくれている

- ロング ディスタンス トレイル＝地域計画＝持続可能な地域づくり
- **地域とそこに暮らす人そのものが光**で、それをちゃんと**観る**、ことが結果、**観光**

管理運営体制＝地域の誇り

36

ハイカーを迎え入れてくれる地域住民との連携を模索

トレイル エンジェル

1,025キロ分のエンジェルと繋がる仕組みの構築
統括本部長中心にサテライトと連携し沿線事業者への協力依頼を実施中

37

ハイカーの利便と、地元住民への配慮

ハイカー証制度 DATA BOOK・HIKING MAP BOOKと連動

1,025km スルーハイカーの受入れ体制強化  セクション、デイハイクも安心して歩ける

38



HIKING MAP BOOK

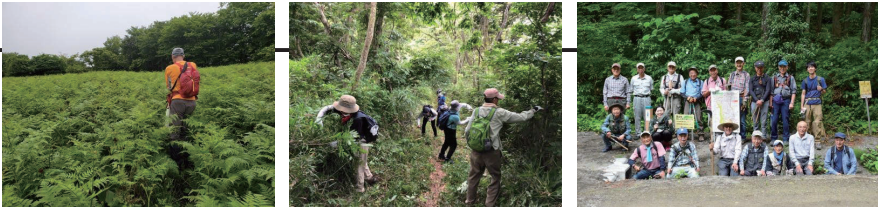
39

ハイカーの裾野拡大と地域の参加促進

踏破登録実施中／全線スタンプラリー検討中

全線踏破者はまだ20名／スタンプラリーは要望が多い

40



整備ボランティア登録受付

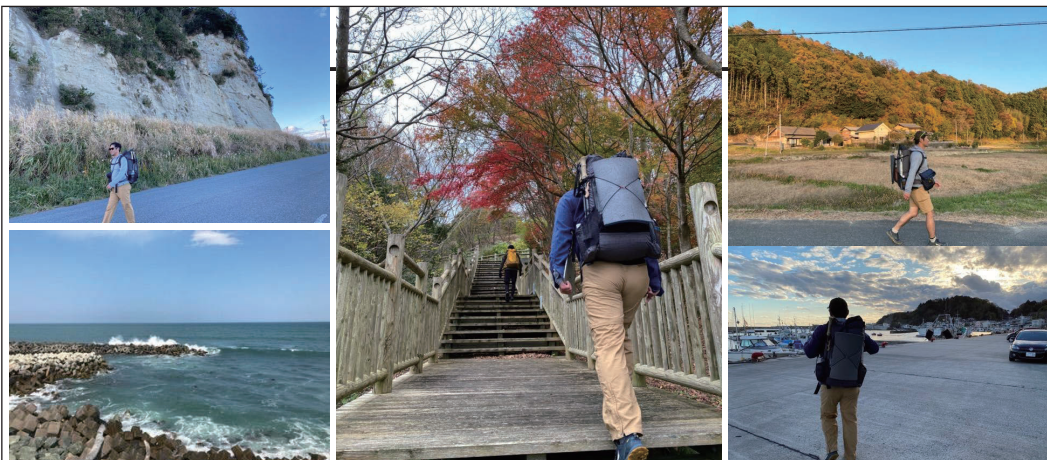
みんなで道をつくり、まもる
現在、地域内外から100名程度が登録。絶賛受付中

41

みんなで未来に繋ぎたい道
みなさんの助けが必要です

歩きにきてくれたら嬉しいです。
ただ「歩く」こと＝観光が東北の復興に。

42



“うつくしま浜街道” 交流人口拡大事業

～浜通りを歩いて旅するトレイルコース造成及びモニターツアー実証実験～

福島から世界へ。

43



福島県の浜街道、10市町にもロングトレイルの動き

福島県

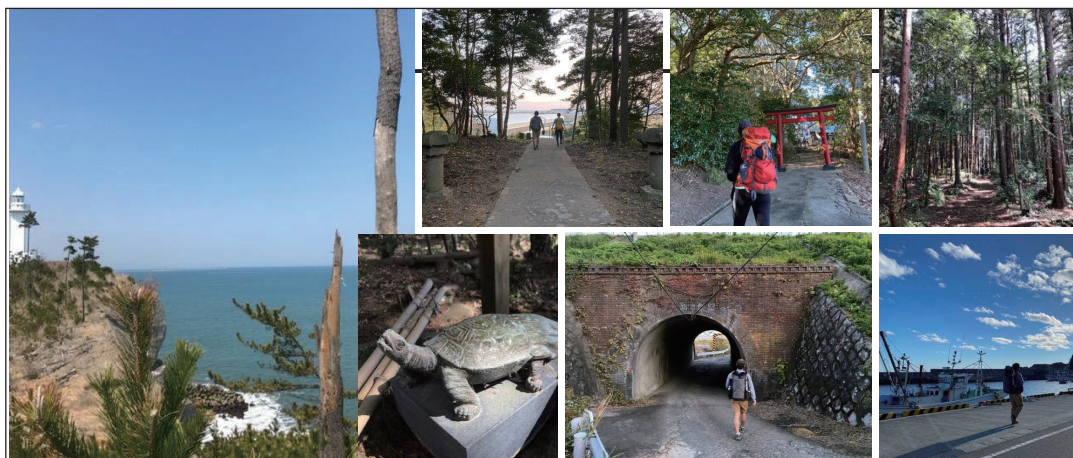
沿岸10市町約
200km

新地町
相馬市
南相馬市
浪江町
双葉町
大熊町
富岡町
檜葉町
広野町
いわき市

**2020年～
民間主導
での策定
を開始！**

みちのく潮風トレイルと接続すれば4県36市町村の広域連携事業！

44



みちのく潮風トレイルとの接続も視野に、浜通りを歩いて旅するトレイルコースを策定中

みちのく、東北沿岸 から世界へ。

45



みちのく潮風トレイル、
ぜひお出かけください。

ご静聴ありがとうございました。

46

問題提起

1. 広域連携による観光推進の意義
2. 新たな挑戦で何が見えたのか
3. 歩く文化の醸成とは

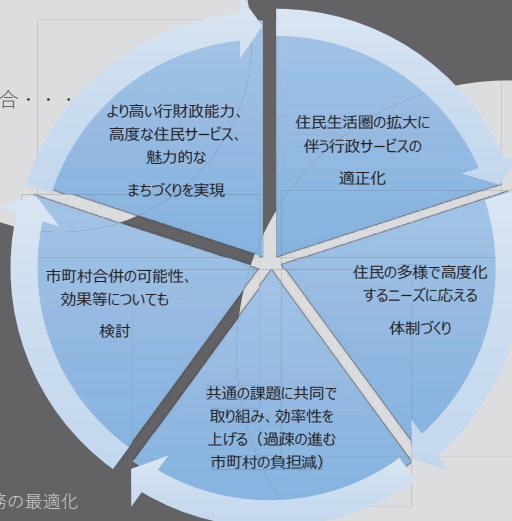


1

行政レベル

協議会、事務委託、事務組合、広域連合・・・

自治体連携による住民サービスの 向上と業務の最適化



2

- ・ 誘客市場の拡大
- ・ 地域内の様々な魅力や資源を活かしたブランド形成が可能
- ・ 地域内ブランド確立による資源の底上げが可能
- ・ 地域内における受け入れ体制レベルの格差を認識することから、地域内のサービスレベルの向上につながる
- ・ 地域内の多様な業者、分野の連携を生み連携協力体制が確立
- ・ 地域内に新たな交流が生まれ、機運の醸成につながる
- ・ 地域内で新たな連携動線が生まれ、滞在プログラムが多様化
- ・ 地域内の様々な資源や観光施設を活用し、滞在時間を伸ばす
- ・ 地域内の相互扶助、補完関係が生じ、事業費コストの軽減につながる
- ・ 相互理解と協力体制が不可欠

観光レベル

3

広域連携を意識した観光政策

- | | | |
|-------|------------------------|--------------------------------|
| 1962年 | 総合開発計画 | 国土の均衡ある発展：観光ルート開発 |
| 1987年 | 第4期総合開発計画 | 「交流」と「連携」 |
| 1998年 | 第5期総合開発計画 | 「広域観光」の言葉が使われる |
| 2004年 | 観光立国推進戦略会議 | 面的観光地 |
| 2007年 | 観光立国基本法 | 関係者相互の連携 |
| 2008年 | 観光圏整備法 | 面的観光地の実現に向けた法整備 |
| 2011年 | 観光地域プラットフォーム支援事業 | 広域観光 |
| 2015年 | 日本版DMO（観光地域づくり法人）登録の開始 | プラットフォームの具体化
（地域、地域連携、広域連携） |

4



課題(連携を阻む要因)

- 域内の主体間の合意形成ができない
- 協働に対する価値観の違い
- 仕組みを作っても動かない、動かせない(人材の問題)
- 地域内の既得権
- 習慣
- 古くから残る「縄張り意識」
- 無関心層の存在
- 金の切れ目が縁の切れ目

5



みちのく潮風トレイル (ロングトレイル)
がつなぐ広域連携

- 連携軸がはっきりしている
- トレイルの特徴を活かした「ブランドイメージ」が作りやすい
- 利用者に対するサービスも明確
- 利用者の声を拾いやすくサービス向上のための問題点が明確
- 地域内においても「歩くこと」を軸とした交流が生まれる
- 既存の滞在プログラムを活かした交流も可能
- ゆっくりではあるが波及効果がわかりやすい
- ハンドリング組織の必要性

6

自分の歩いてゆく道や、道の両がわにある田や畑の形、家のように、または道ばたの小さな忘れられた石碑などにも目をつけて見たことはあるでしょうか。そうしたものの、みなわれわれの祖先の手によってつくられたものであり、そこには古い人の心がこもっているのです。その心をよみとることも、またたいせつな学問であると思います。文字に書いていないことが多いのですが、文字に書いたものだけが、私たちに呼びかけているのではありません。たとえ、どのようにつまらないと思うものでも、人手にかかって加工されているものには、その人の心がこもっているのです。

宮本常一『日本の村・海を開いた人々』

7

「日本は資源の豊かな国だ。人間が生きていくために大切なものを日本はすべて持っている。美味しい水、豊かな土と緑。これは世界に誇れることだ」

「日本は非常に広い国だ。北海道から沖縄まで、大変豊かな自然があり、文化がある。たくさんの国が集まっているようなものだ。でもアメリカはそうではない。そういうことを比べると、日本は広い国だと思ってよいのではないか」

小山邦武講演語録、2008「ありのままの田園で進める生活観光」より

8



1831-1904

イザベラバード「日本奥地紀行」

- ・越後米沢街道・十三峠交流会
- ・イザベラ・バードの道を歩く会
- ・イザベラバードの道を辿る会 などなど

旧道整備・勉強会・交流会・解説書・地域づくり活動



出典：Nippon.com イザベラ・バード 旅の道程をたどる日本の奥地を記した時代の旅行家
<https://www.nippon.com/ja/japan-topics/000889/> 2020.12.5

9



歩く文化

人間の生活様式の全体。人類がみずからの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体

「歩いて旅をする」ことを理念とした「ロングトレイル」の文化を日本に定着させることを目的

東日本大震災からの復興に貢献するものとして、また、震災の記憶を引き継ぐための道

交流・人々の暮らし、生活、生業・祭り・慣習・教育
 観光・余暇活動・決まりごと・思想・・・・

地域住民・関係者・ハイカーがともに「歩く文化」を認識

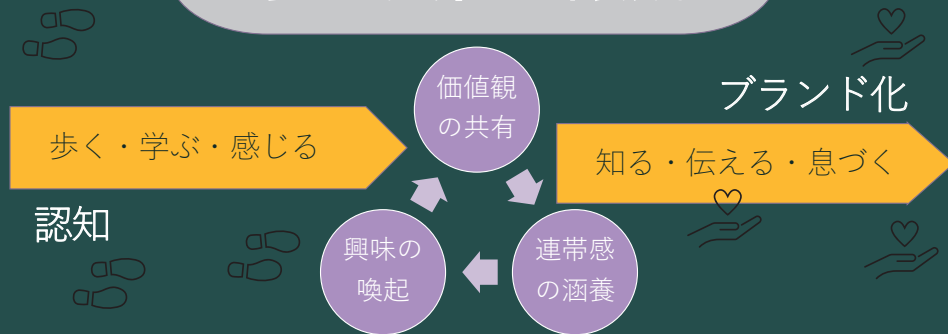
『みちのく潮風トレイル』

10

本日のテーマ

“つながること”の意味を考える

歩く文化の醸成



11

第3回 観光を通してアイヌ文化の継承を目指す

——阿寒湖アイヌコタンの挑戦

廣野 洋

阿寒アイヌコンサルン 理事長

岡田 真弓

観光学高等研究センター 准教授

1. 趣旨説明

（岡田真弓） まず、本日のゲストである廣野洋さんのプロフィールをご紹介します。廣野さんは、少年時代を北海道観光ブームにわく阿寒湖アイヌコタンで過ごされました。その後、上京してお仕事をされるかたわら、首都圏に暮らすアイヌの方々とともに伝統文化の継承に取り組まれました。2008 年、阿寒湖アイヌコタンに戻ってからは、伝統舞踊の踊り子として活躍されながら、伝統文化の継承や普及活動に力を注がれました。その後、阿寒アイヌ工芸協同組合の「営業マン」として、観光を通じた文化伝承と経済的自立の両立に向けた活動を展開されます。そして 2019 年、アイヌの知的財産保護と多角的なアイヌ文化発信を目的とした一般社団法人阿寒アイヌコンサルンを設立されました。

今日は、阿寒湖アイヌコタンの観光振興の取組や、近年廣野さんが積極的に携わっていらっしゃるアイヌの知的財産保護に関してご講演いただく予定です。講演に先立ちまして、今回の公開講座「観光現場の挑戦」というテーマのなかで、なぜ阿寒の取組を取り上げたかについて、少しご説明したいと思います。

北海道観光とアイヌ民族との関係は、明治時代初期にまでさかのぼると言われ、本日のテーマである阿寒も、すでに明治 30 年代には小中学校の修学旅行地となっていたようです（齋藤 1999）。旅行が一般化しつつあった大正期には、北海道＝大自然のイメージアイコンとしてアイヌ民族が取り上げられ、白老や旭川のアイヌコタンが観光地として知られるようになります。戦後、日本各地で観光振興事業が行われると、北海道の観光PRにアイヌ文化が紹介される機会が増えました。昭和30年代から40年代の北海道観光ブーム時には、アイヌ文化が北海道観光における重要なコンテンツとして認識されるようになり、白老や阿寒などに観光アイヌコタンが誕生します（斉藤 2000）。同時に、民族文化を観光目的で

「消費する」ことや和人によって「消費される」ことに対する批判が起り始めたのも、この頃です。その後、アイヌ文化の伝承、記録、後継者育成の場としての観光の役割に目が向けられるようになり、白老、平取、阿寒などの地域では様々な取組がなされてきました。

一方で、ここ数年来、北海道内で検討されているアイヌ文化を核とした観光振興は、先にお話した北海道観光とアイヌ民族との関係性とは一線を画す、エポック・メイキングになり得ると感じています。エポック・メイキングのきっかけの一つは、国がアイヌ施策の一環としてアイヌ文化振興に積極的に取り組むようになったことです。2007年に「先住民族の権利に関する国連宣言」が採択され、翌2008年に「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両院で可決されました。その後、国には先住民族であるアイヌの文化復興に配慮すべき強い責任があるという考えのもと、国によるアイヌ政策、とくに文化復興、伝承活動の推進に関するアイヌ施策が行われました。新たなアイヌ施策を円滑に推進するためには国民の正しい理解が不可欠であり、またアイヌ文化復興の拠点となる施設が必要であることから、民族共生象徴空間の開設が決定しました。2013年からは、民間企業、行政機関、学術機関などの連携により、アイヌ語の挨拶「イランカラテ（こんにちはの意味）」を北海道のおもてなしフレーズとして普及させるキャンペーンも行われております。皆様のなかには、新千歳空港やサッポロビールの缶などで、このキャンペーンのマークを見たことがある方もいるかもしれません。

さらに近年、アイヌ民族をテーマとした漫画や小説が注目を浴び、新たな北海道観光のコンテンツとして認識されつつあります。2014年から連載が始まった『ゴールデンカムイ』という漫画は、これまであまり光が当てられなかった詳細なアイヌ文化の描写やアイヌ語のセリフなどが用いられ、メディアにおけるアイヌの表象を大きく変えるきっかけとなりました。テレビアニメの放送も後押しし、幅広い年齢層がアイヌ文化に触れる機会となっています。昨今では、漫画の登場人物たちが訪れた道内各地を、読者やファンが同じく訪れるという現象が見られたり、『ゴールデンカムイ』の作品とコラボレーションしたツアーも登場したりするなど、本作品が北海道の観光振興にとっても一定の役割を果たしていることが分かります。

このように、アイヌ民族や彼ら・彼女らの文化に対する社会的な関心が高まるなかで、アイヌ文化の復興や継承をアイヌの人々の経済的な収入につなげる有効な手段として、観光が果たす役割に期待が寄せられています。一方、後継者育成、文化伝承と経済的自立の両立といった従前からある課題に加え、例えばアイヌ文化の不適切な使用、アイヌの観光事業者に対する差別といった新たな倫理的課題も顕在化しつつあります。いま大きな画期を迎えようとしている北海道観光とアイヌ民族、そして文化を改めて考えなおしてみたいという思いから、本日の講演テーマの着想に至りました。

本日の舞台である阿寒は北海道でも有数の観光地であり、またアイヌ民族と観光との歴史もその関係性も深い場所でもあります。現在の阿寒湖アイヌコタンは、昭和29年に当該地域の土地を所有していた前田一步園財団から無償で土地が提供されることとなり、阿寒湖

畔に暮らしていたアイヌの人々が居を移し、店舗を持つようになったことで形成されました。そもそも阿寒の観光開発の契機は、大正10年に国立公園候補地となったことです。阿寒では早くから観光開発が行われていましたが、同時にアイヌの伝統文化の継承活動も早い時期から取り組まれていました。終戦後間もない昭和23年、徐々に観光客が戻りつつあった阿寒湖畔で木彫お土産品の製作・販売を行っていた山本多助氏は、伝統文化の継承を目的として、釧路アイヌ古典舞踊保存会を設立しました。この釧路アイヌ古典舞踊保存会の発足から2年後、当時観光客によって持ち帰りが多発した阿寒湖のマリモを保護する取組の一環として、先の山本多助氏を初めとする地元のアイヌの人たちも参画する「まりも祭り」が始まりました（煎本2001）。現在では、道内各地のアイヌ関係者も多く参加する阿寒でも有数のイベントになっています。

このようにアイヌ文化伝承を核にしつつ、観光業を主な経済活動に据えてきた阿寒湖アイヌコタン。廣野さんからもお話がありますが、イオル再生事業を通じて文化伝承地および観光地としての整備をさらに進めています。また、阿寒町を含む釧路市エリアは、国の観光立国政策の対象地域の3都市のうちの1つに選定されており、さらにこれに連動して阿寒摩周国立公園が国立公園満喫プロジェクトの8国立公園のうちの1つに選定されている状況です。地域全体としても観光振興が進むなか、アイヌ文化とのコラボレーションも行われています。例えば、阿寒湖アイヌシアターではアイヌの伝説をベースにし、アイヌ伝統舞踊、現代舞踊、デジタルアートを融合させた新しい演目『ロストカムイ』が2019年から上演されています。『ロストカムイ』を上演する阿寒アイヌ工芸協同組合によると、ほかの演目も含めた阿寒アイヌシアターイコロの2019年の入場者数は、前年度比2,200人増の5万9,009人にのぼっており、今後の集客効果にも期待が寄せられています（2020年3月28日北海道新聞道東版）。また、同じ年に開始した「阿寒湖の森ナイトウォーク『カムイルミナ』」も注目される観光コンテンツの1つです。これは夜の阿寒摩周国立公園の森に、アイヌ民族に伝わる神話を題材とした映像が映し出されるもので、参加者がそのなかを歩きながら進むという体験型デジタルアートツアーです。このように阿寒の観光現場では、アイヌ文化を核とした新しい観光振興の取組も進んでいる状況です。

実はこの『カムイルミナ』、今年はコロナの影響で開催が中止となりました。『カムイルミナ』の代替イベントとして企画されたのが、新型コロナウイルスの終息への願いと医療従事者に感謝を示す催し、「カムイへの祈り カマイコオリパク」です。イベントでは、夜に遊覧船で阿寒湖に出て、願いをしたためた紙を入れたプラスチック製ボールを湖に投げ入れます。このボールには、医療従事者のシンボルカラーである青色の電球が入っています。下船後、観光客はたいまつを持って阿寒湖の温泉街を行進、最後に阿寒湖アイヌコタンでカムイノミという神事に参加し、阿寒湖アイヌコタンのみなさんともに新型コロナウイルスの終息を願います。

このように先人から受け継いだ伝統文化の継承に努めつつ、常に創造的な文化交流や情報発信に挑んできた阿寒湖アイヌコタン。文化伝承と経済活動の両立、後継者育成、そして

アイヌ民族や文化への理解促進といった課題に向き合いながら、アイヌ民族自らが観光活動をマネジメントすることを目指している地域といえます。

2. 観光を通してアイヌ文化の継承を目指す——阿寒湖アイヌコタンの挑戦

2-1. 阿寒湖アイヌコタンの概要

（廣野洋） 今日「観光を通じたアイヌ文化の継承を目指す」とテーマで、阿寒湖アイヌコタンの様々な取組をご紹介します。写真1（またはスライド2）が阿寒湖アイヌコタンの様子です。道を挟んで両側に、個人が経営する商店が並んでいます。多くが1階に店舗、2階と3階に住居スペースという構造になっています。阿寒湖アイヌコタンは、一応アイヌ民族しか住めないことになっておりまして、前田一步園から無償で土地を借りて自分たちで建物を建てて暮らしています。



写真1 阿寒湖アイヌコタン（撮影：岡田真弓）

阿寒湖アイヌコタンにある組織をご紹介します。私が会長を務めております阿寒アイヌ協会は、公益社団法人北海道アイヌ協会の第1類正会員となっておりまして、目的も北海道アイヌ協会と同じです。主にアイヌの社会的地位の向上や文化の保存・伝承及び発展に寄与することを目的に活動しています。

現在の阿寒アイヌ協会の会員数は 50 歳以上が大半を占めていまして、ちょうど私が 56 歳で一番多い年代となっております。男女ともほぼ同じ数で、課題は若い世代のアイヌが少ないことです。一度、就職または進学でコタンを出たらなかなか戻ってこないのが現状で、後からお話ししますが、ここが担い手問題の根源かと思います。釧路市全体で見ますと、約 500 世帯、1,100 人ほどのアイヌが暮らしております。その多くが、釧路地区の市街地に暮らしており（955 人、433 世帯）、阿寒地区には 145 人、62 世帯が、阿寒湖温泉には、120 人ぐらいのアイヌが暮らしています。

次に、阿寒アイヌ民族文化保存会をご紹介します。保存会は、各地域のアイヌ文化、とくに舞踊やアイヌ語の継承および担い手育成を目的に活動している組織です。阿寒アイヌ民族文化保存会に特徴的なのが、ユーカラ座の育成です。阿寒湖では昔から、アイヌの神謡集に基づいた演劇づくりを行い、舞踊として公演してきました。それがユーカラ座です。ユーカラ座では、これまでもアイヌの神謡集に基づいた舞踊劇を、パリや東京などで披露してきました。いまも一応ユーカラ座がありまして、いつでも練習をして演劇の舞台に立てる準備ができています。

阿寒アイヌ工芸協同組合は、阿寒湖コタンでの商売に関する組織です。阿寒アイヌ工芸協同組合は、例えば阿寒湖アイヌシアターイコロやオンネチセなどの共同施設の維持管理をしたり、共同で販売する商品をまとめて買って組合員に卸したりします。また、阿寒湖アイヌ工芸協同組合では、阿寒アイヌシアターイコロでの演目づくりにも携わり、公演によって得られる収入で組合の運営を行っています。

最後に、阿寒湖コタン調整委員会という組織をご紹介します。これは、前田一步園財団との阿寒湖アイヌコタンの土地の賃貸借、およびコタン内の調整全般を行う組織です。例えば、阿寒湖アイヌコタンからアイヌが出ていった場合、あるいは亡くなった場合、土地が空きます。その際、誰にその土地を継いでもらおうか、誰に使ってもらおうか、そういった調整を行い、前田一步園財団と交渉をする組織です。

2-2. イオル再生事業と文化伝承活動

次に私どもで取り組んでおります、イオル再生事業を紹介します。現在、道内 6 地域がイオル再生事業に取り組んでおり、白老が中核イオルに設定され、一番初めに着手されました。次に平取、札幌、静内、十勝、私どもの釧路、阿寒の順です。ここでは、釧路アイヌ協会と阿寒アイヌ協会と一緒にこの事業に取り組んでおります。スライド 8 の地図には旭川が出ていますが、旭川はまだスタートしていません。

イオル再生事業とは、アイヌの伝統的生活空間の再生を目的としており、アイヌ文化と関わりの深い有用植物、樹木や草、木の実などを保護し育成するなどの活動を行っています。こうしたアイヌ文化に不可欠な資源を保護し育成した先には、樹木ですと生活道具を作る、山菜ですとアイヌ料理を作る、そういったアイヌの伝統的生活を再現させる取組が行われます。アイヌの伝統的生活空間の再生や伝統文化の実践のほかにも、こうした活動を文化交

流を通じて一般市民に対して普及啓発することも、事業の一環として行われています。

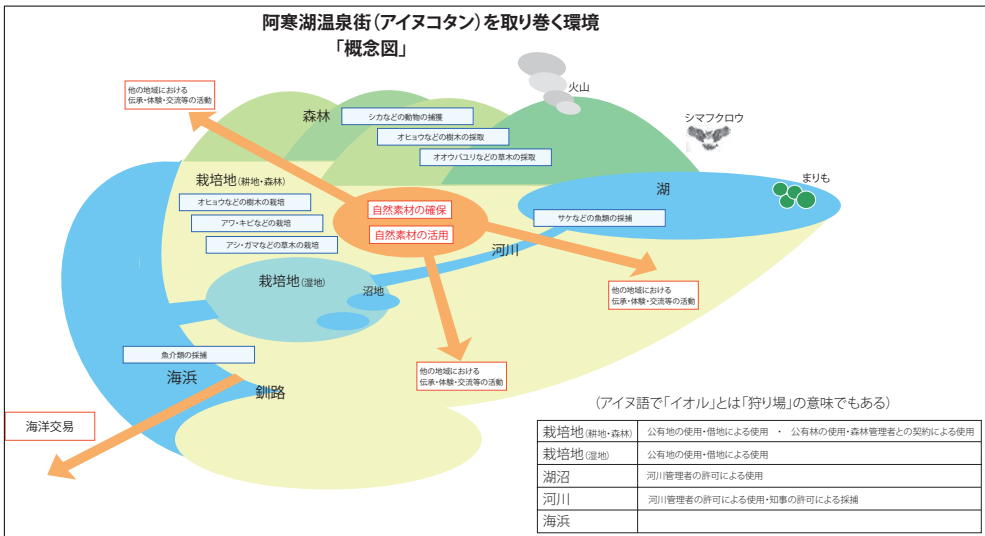


図1 阿寒湖アイヌコタンのイオル概念図(スライド9、出所:「阿寒・釧路地区地域イオル提案書」6頁)

阿寒湖周辺には、立派な大自然があり、湖も川もあります。さらに、阿寒摩周国立公園であることも考えますと、私たちはいまある森を中核にイオル再生事業を展開していこうと考えました。基本的には、植樹をしたり、草を植えたりはしない方向でいます。一方、釧路アイヌ協会が進めている釧路市街地でのイオル再生事業の舞台は海です。アイヌは交易もしていましたから、海を中核としたイオル再生事業です。さらに、釧路ではガマを栽培したり、ギョウジャニンニクを栽培したり、そういった水辺の植生環境復元にも力を入れています。

阿寒に話を戻しますと、私たちのイオルの地域拠点は阿寒湖アイヌシアターイコロです(スライド10)。多様な自然環境に囲まれた阿寒で取り組まれる様々な文化伝承活動の舞台、そしてそれらが文化交流を通じて地域住民や国内外の観光客に向けて発信される舞台としての阿寒湖アイヌシアターです。阿寒湖アイヌシアターのすぐ近くに、オンネチセという建物があり、阿寒アイヌコンサルンの事務所もそこにあります。現在、アイヌ政策推進交付金事業の一環で整備を進めており、オンネチセ内にアイヌアートミュージアムをつくりました。さらに厨房も併設して、ツアーのお客様にアイヌ料理を楽しんでもらうことができる施設にしました。アイヌシアターイコロの左側に森がありますが、ここがイオルの展開地となっています。ここには、アイヌの有用植物がたくさんあり、各有用植物に関する説明板を設置したり、散策路を整備したりすることで、観光客がアイヌ文化と植物について学べる空間をつくりました。この森から阿寒湖にかけてのエリアにも森があり、ここでもイオル再

生事業が行われています。先ほどの場所と同じく、この森にも散策路を敷設しまして、後ほどご紹介しますガイド事業でもこの散策路を活用しています。

阿寒湖アイヌシアターイコロの収容人数は、座席数が 332、立ち見を入れますと 450 人ほどの施設です。劇場はすり鉢状になっており、すり鉢状の下にステージがあります。ここでは「アイヌ古式舞踊」のほかにも「阿寒湖アイヌが演じる人形劇」、「イオマンテの火まつり」、「ユーカラ劇」といった様々な演目が上演されています。

先ほどご紹介したオンネチセの隣に、アイヌの伝統家屋を復元したポンチセという建物があります（スライド 14）。床には囲炉裏が切っており、ここで伝統儀式をやっています。復元された伝統家屋なので、床や壁には断熱材が入っていて、冬でも温かいです。この写真では、ポンチセの壁沿いに様々な展示物が置いてありますが、これは新しく整備したオンネチセの方へ移動しました。したがって、現在は囲炉裏とつり棚だけが残されており、おもに伝統儀式の時のみ使用しています。

阿寒湖アイヌコタンでは、文化体験プランをガイド事業やイオル事業といった様々な事業のなかで行ってきました。木彫りの体験、刺繍の体験、そしてムックリづくりおよび鳴らし方の講座などを文化体験プランで提供しています。

最近、阿寒湖アイヌコタンで取り組んだプロジェクトに『阿寒ユーカラ ロストカムイ』の上演があります。アイヌの伝統舞踊と現代舞踊、そしてデジタルアートを融合させた演目となっております¹。アイヌ女性はかつて口に入れ墨をしていたものですから、『ロストカムイ』の宣伝ポスターではそれを再現し、公演のなかでも入れ墨をしてやっております。このように伝統文化に現代音楽や映像を入れてみる、という新しい挑戦的取組も阿寒湖アイヌコタンの特徴だと思います。

2-3. アイヌの知的財産の保護に向けて

阿寒湖アイヌコタンでは、アイヌ文様やアイヌ語といった私たちアイヌ民族の文化を知的財産と考えています。私たちはいま、先祖から受け継ぎ、育んできた知的財産を適切に使用することで普及させようという活動を行っています。アイヌ民族以外の人たちにも、アイヌ民族の知的財産を適切に使用してもらい、そして何より広く知られてほしいと、そのように思っております。

先ほど『ゴールデンカムイ』の話題が出ましたが、『ゴールデンカムイ』を見たお客様が網走刑務所に多く来館されるようになったため、受刑者が刑務作業で作る製品にアイヌ文様を入れたいという相談がありました。そこで、網走刑務所の製品に入れるアイヌ文様を私たちが監修して、製品化してもらいました（スライド 18）。網走刑務所で販売しているアイヌ文様入りのエプロンは、公益財団法人矯正協会から優れた刑務所作業製品に贈られる賞を取ったそうで、現在ではこのエプロンは全国の刑務所で販売されているそうです。

私たちは、アイヌ文化を知的財産として保護していく取組を始めたわけですが、実はすでに 20 年ほど前からアイヌ知的所有権研究会を立ち上げていました。阿寒湖にある鶴雅グル

ープさんから、ホテルのなかにアイヌ文化を取り入れたいという要望をいただいたことがきっかけでした。その際、アイヌ知的財産権の研究会をつくり、鶴雅グループさんとの対応に当たりました。鶴雅グループさんでは、従業員の制服にもアイヌ文様をプリントではなく刺繍で入れたいということで、阿寒湖アイヌコタンの女性たちが刺繍を施しました。そして、阿寒湖アイヌコタンで作成した製品を鶴雅グループさんに買ってもらい、その収益をアイヌ知的所有権研究会の今後の活動経費として積み立てていく、というふうにしました。

ただ、鶴雅グループさんとの一連の作業が一段落してからは、アイヌ知的所有権研究会の活動も止まっていました。その結果、周囲もだんだんとアイヌ知的所有権研究会のことを忘れてしまい、企業が阿寒湖アイヌコタンの個人に直接仕事を依頼したり、それに伴ってトラブルも起きたりしました。こうした状況のなか、『ゴールデンカムイ』の影響によってアイヌ文化への関心もより高まってきたことから、私たちもう一度、このアイヌ知的所有権研究会を再構築して体制を整えようということになり、阿寒アイヌコンサルン設立に向けて動き出しました。阿寒アイヌコンサルンは、2019年5月16日に設立総会を開き、8月28日に正式に一般社団法人として設立されました。

これまでも、北海道内外の企業などから、「アイヌ語を商品名に使いたい」、「アイヌ文様をデザインに取り入れたい」、「アイヌの神話を舞台にしたい」、または「アイヌの古式舞踊を披露してもらいたい」などの相談がありました。こうした外部からの相談に対し、阿寒湖アイヌコタンのどの組織（阿寒アイヌ協会、阿寒アイヌ民族文化保存会、阿寒アイヌ工芸協同組合、コタン調整委員会）が依頼を引き受けるかという点は、コタン内部でも議論になっていました。そこで、阿寒アイヌコンサルンが相談者からの依頼を受ける窓口となり、その依頼内容に応じて最も適切な組織に対応してもらえるようコーディネートする役目を果たすようにしています（スライド20）。冒頭で紹介した阿寒湖アイヌコタンの4組織の会員に、阿寒アイヌコンサルンの役員になってもらい、阿寒アイヌコンサルンで受けた依頼内容を各組織の代表で合議するようにしています。阿寒アイヌコンサルンが監修・制作したアイヌ文様や製品などには、アイヌ文化の適切な利用であることを認証するマークとコードを発行しています。相談者は、阿寒アイヌコンサルンにコンサルティング

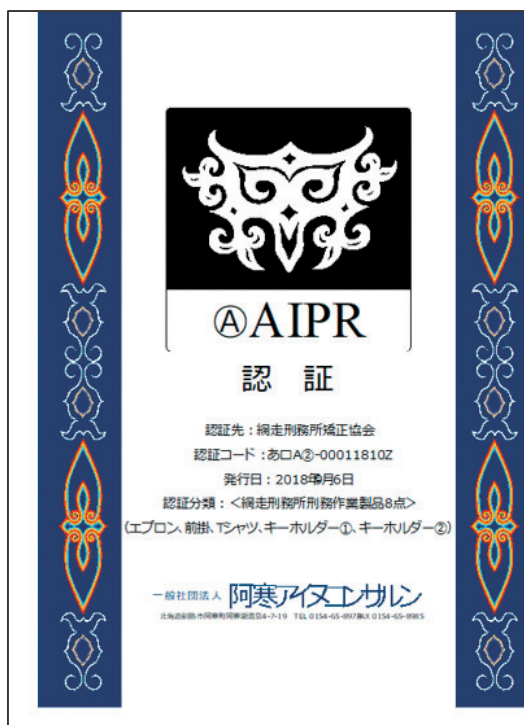


図2 認証票（スライド20より転載）

料や認証料を支払うことで、この認証マーク付きのアイヌ文様などを使用できるようになります。認証マークには、アイヌ知的財産権の略である A I P R (Ainu Intellectual Property Rights) と書いてあり、商標登録もしてあります。これを認証 I D と一緒に交付しています。図 2 の認証票は網走刑務所からの依頼の際に発行したもので、認証先、認証コード、発行年月日、商品内容が記載されています。認証票を発行することで、その認証票を発行したアイヌ文化に対して、私たちが責任を持つことになります。もし、阿寒アイヌコンサルンが認証したアイヌ文様や製品について、他地域のアイヌなどから質問がきた場合でも、コンサルンが責任を持って対応しますということで認証票を発行しています。

阿寒アイヌコンサルンのことを広く知ってもらおうと、新聞に広告も出しました(スライド 21)。この新聞広告を見て相談に来たという方もいて、去年に比べて今年は相談件数が増え、実際に契約まで進んでいる事業もあります。今年の 9 月には、阿寒アイヌコンサルンのホームページもつくりⁱⁱ、コンサルンが受ける代表的な相談内容(アイヌ文様、アイヌ語、アイヌ芸能、アイヌ料理)を掲載し、こういったことに関心のあるお客様に対応しています(スライド 22-23)。ホームページの「アイヌ文化のクリエイターの紹介」というところで、阿寒アイヌコンサルンが認定したクリエイターを紹介しています。みんな物づくりをする人たちで、彫刻家だったり、刺繍家だったり、織物をする人、アイヌ料理が得意な人、講話が得意な人、いろいろな分野のクリエイターとして登録しています。相談者から依頼が来ると、コンサルンのなかにある 5 名で構成される認定委員会が、依頼内容に最も適したクリエイターを選んで派遣(アイヌ文様のデザイン、あるいは伝統芸能の上演など)する仕組みです。

ここからは、なぜ会社をつくったのかをご説明したいと思います。2019 年の「アイヌ施策推進法」を契機に、アイヌ政策推進交付金というものが付くようになりました。この交付金事業を、私たちアイヌ自身が自分たちの意思に基づいて活用していくための受け皿、ウタリ(同胞)の手による「法人格」を持つ組織が必要だったため、会社をつくることになりました。さらに、コタンには複数の組織がありますので、組織間の調整をする役目を果たす会社をつくろうということになりました。

阿寒アイヌコンサルンが担う事業としては、(1)知的財産の管理、(2)舞踊・工芸・食・ウパシクマ(言い伝えや伝説)・儀式などの文化継承と後継者育成、(3)アイヌ文化デザインの商品開発・販売、その監修、(4)文化情報の発信(舞踊公演や楽器の演奏事業を域外に派遣)、(5)アイヌ文化ガイドの域内事業等のマネジメントを行っています。こういった事業化ノウハウの確立と、他の地域のアイヌとのノウハウ共有をやっていると思っています。

現在、コタンには阿寒アイヌ民族保存会、阿寒アイヌ工芸協同組合や観光協会もあります。しかし既存の組織ではなく、なぜ新しい組織が必要になったのかという点をお話しします。新しい交付金事業の受け皿となる組織は、観光振興に限らず、舞踊、工芸、儀式、料理などの文化伝承を推進していく必要があります。また、観光地(阿寒)における収益だけでなく、

ほかの国や地域においても文化交流や情報発信などを通じて阿寒湖アイヌコタンが経済活動を行えるようにしたいと考えています。そうすると、文化伝承、文化交流、情報発信、知的財産の適正管理をアイヌ自身で実践できる既存の組織はなかったため、新しい組織を作ることにしました。

次に、なぜ一般社団法人を選択したかですが、知的財産の適正管理を通じて得られた収益は、阿寒湖アイヌコタンの国内外における文化交流、情報発信、阿寒湖アイヌコタンの文化伝承促進といった公益目的で用いるからというのが理由です。一般社団法人は、非営利で社会貢献を目的とする団体なので、知的財産管理などで収入を得る場合、営利目的の株式会社よりも社会的信用力が高くなるため、円滑に事業をすすめることができると考えました。さらに、一般社団法人は発起人が2人以上で済むのでコンパクトにスタートできますが、設立には30万円ほど掛かります。また課税対象にもなります。NPO法人は、賛同人が10名以上必要で、スタート後の意思決定も煩雑になります。ですが、設立に費用はかからず、非課税ということでした。しかし、何よりそのときは急いでいたこともあって、みんなで検討した結果、一般社団法人でいこうということになりました。

ここで、阿寒アイヌコンサルンの強みをまとめてみました。私たちは、新しい交付金事業を阿寒湖アイヌコタンの意思に基づいて主体的に活用していくため、私たちアイヌによる法人組織を設立しました。また、文化伝承や文化交流、情報発信、知的財産の適正管理を私たち自身で行うため、阿寒湖アイヌコタンの各組織と外部の依頼者をつなぐ役割も期待されています。知的財産保護事業からの収益は、コタンの国内外における文化交流、情報発信、阿寒湖アイヌコタンの文化伝承促進に充て、持続可能な文化伝承や後継者育成を目指していきたいと考えています。

2-4. 次の挑戦

もう1つご紹介させていただきたいのが、アイヌ文化周遊ルート造成事業についてです。北海道観光振興機構の周遊ルート造成事業に申請し、3年間助成金が認められたので、アイヌの文化伝承を活発に行っている道内各地域を結ぶ公益周遊ルート造成事業に取り組みました。アイヌ文化活用における広域連携にむけたアイヌ文化周遊ルートづくりです。私たちは、ユーカラ街道プレミアムと呼んでいて、白老を拠点として白老からお客様を各地域に、また阿寒に来たお客様にほかの地域にも行ってもらうことを目指しています。各地域の特色ある文化、得意な文化を観光コンテンツづくりに活かそうということで、アイヌ文化周遊ルートづくり協議会を設立しました。この協議会のメンバーである阿寒、白老、旭川、札幌、函館、平取は、公益周遊ルート・ユーカラ街道づくりのために、まず地域文化の洗い出し、そしてその磨き上げ、さらにはユーカラガイド事業の展開に向けたガイド養成も行っています。さらに、ユーカラ街道をプレミアムな旅行にしようということで、阿寒の場合はオンネチセを整備しました。

各地域で得意な分野を出し合いました（スライド30）。阿寒の行事ですと、まりも祭りや

ヒメマス祭り、アイヌアートショーがあります。先ほどお話しした『ロストカムイ』や『カムイルミナ』といった公演や体験型アクティビティもやっています。札幌は都会ですから、アイヌミュージックのコンサートをやってはどうですか。旭川には有名な動物園があり、その動物園にはアイヌが神と信じている動物がたくさんいますので、その動物たちを紹介するだけでも十分なコンテンツになりますね。平取は伝統工芸品が得意ですから、平取はそこを前面に出しましょう、といった話し合いを3年間続けて、コンテンツに磨きをかけて商品化を図っています。いまのところ、各地域で単発商品を作っていて、すでに試行している地域もあります。近い将来、すべての地域をつなげて1週間のツアーにしたいと思っています。

このユーカラ街道事業でもガイド養成をしています。阿寒ではこのたびのアイヌ政策推進交付金事業のなかでも、ガイド養成およびガイドツアーのコースづくりを行い、すでに6月1日からガイドツアーの予約を開始しています（スライド31）。最初の頃は非常に良い反響をいただき、予約が結構たくさん入っていました。残念ながら、コロナの影響で予約数が減ったり、ガイドツアーもストップしたり再開したりせねばならず、という状況です。

いま、阿寒アイヌコンサルンの事務所が入っているオンネチセも、アイヌ政策推進交付金で整備しました。ユーカラ街道づくりのなかで、ツアーには食が付き物だというアイデアが出たので、この建物のなかに厨房も整備しました。オンネチセでカムイノミ儀式をやって、その儀式の後にアイヌ料理を食べてもらえるように、食事スペースも併設しました。オンネチセのなかでは（スライド33）、アイヌアートを展示しています。ほかの地域には、立派な博物館がたくさんあります。また、釧路市にも立派な博物館があります。私たちは、アイヌアートを重視したミュージアムにすることにし、その点でほかの地域と差別化しようと考えています。ここ（スライド34）が儀式をするスペースで、床に囲炉裏を切りました。この囲炉裏は可動式となっていて、上にある火柵もボタン1つで上に上がっていくようになっていますので、例えばここで古式舞踊のミニライブを開催したいときは、囲炉裏を移動してステージに変更できるようになりました。

3. 阿寒湖アイヌコタンにおける「観光現場の挑戦」

（岡田真弓）ここからは私と廣野さんとの対談形式で、廣野さんのご講演内容をもう少し掘り下げていきたいと思います。まず私から1つ質問させてください。アイヌ民族やアイヌ文化に対する関心が高まっている一方で、アイヌ文様が適切に使われていなかったり、アイヌ語が間違って使用されていたりすることも多く見られたので、それがアイヌ文化を適切な形で使用してもらうことで保護していきたいという想いにつながったというお話だったと思います。阿寒アイヌコンサルンの設立、あるいはもうすでに20年も歴史があるアイヌ知的所有権研究会を立ち上げる際の具体的なきっかけ、あるいはコンサルンという会社

を立ち上げる際に参考になった国内外の事例などがありましたら教えてください。

(廣野洋) 私は一時期バスの運転手をしていたことがあります。バスを運転していますから、ほかのバスをすぐ見るわけですよ。阿寒湖は観光地ですから、いろいろなバスが入ってきますが、どう見ても怪しい文様が多い。これはアイヌ文様ということで描いているのかな？というのが増えてきました。アイヌ文化が注目されるにつれて、どんどんそういった文様が増え、さらにはアイヌ語を間違えて使っているものもありました。こうした体験がきっかけとなり、アイヌ文様もアイヌ語も適切に伝えなければだめだと思うようになりました。

その時にちょうど『ゴールデンカムイ』が流行っていきまして、網走刑務所からアイヌ文様のデザインを使いたいという相談がありました。網走刑務所は筋をちゃんと立てて、使っているかと相談してくれたんです。デザインも何回も何回も打ち合わせをして、作り上げていきました。間違ったものが出回ると、やはり私たちは悲しくなるんですね、自分たちの先祖から受け継いだものなので。すでにちゃんとした組織(アイヌ知的所有権研究会)があるのだから、本格的に取り組ましようと思ひに声を掛けました。

そして海外では一度、2017年にアメリカのワシントンD.C.で開催された先住民アートショーを見に行きました。

(岡田真弓) 先住民アートショーですか。

(廣野洋) そうです。先住民族の知的財産権のことで北大の先生に相談したら、先進地を見に行くのが一番だということだったので、アメリカで開催された先住民アートショーを見に行きました。ワシントンD.C.にある国立アメリカンインディアン博物館のなかに、アメリカ先住民のアーティストがいっぱいお店を出していて、そこでバイヤーが商品を買付けするための商談をしていました。こっそり見ていると、高価な値段でやりとりしている。絵を描いている人、彫刻や彫金や織物をしている人などいろいろなアーティストがいて、お客様の数も数え切れないほどびっしりいました。海外では、先住民政策のなかでこういった工芸品のブランド化が進んでいるなと思いました。

(岡田真弓) ビジネス側と先住民族のアーティスト側が、対等に交渉できる機会がある状況を見られたということですね。

(廣野洋) そうですね。やっぱり文化を大切にしている。海外の博物館はどこへ行ってもいっぱいですね。例えば、先住民政策が進んでいるニュージーランドに行った際、テ・プイア博物館(ロトルアにあるニュージーランドの先住民マオリの文化を紹介する施設)に行きましたが、やはりここもお客さんがあふれていました。マオリの伝統舞踊公演も私たちの阿寒どころの比じゃない。あちらこちらでショーをやっていたり、工芸品を売っていたり。

ニュージーランドでも、マオリの組織が認証した工芸品には認証マークがついていて、アーティストの顔写真もついていました。こうした取組をみて、やはりアイヌもやらなければめだと思いました。さらにテ・ピアには、私たちがやろうとしている担い手育成のための施設もありました。マオリの若者たちは、そこでお給料をもらいながら伝統文化を何年間か学び、その後、マオリ文化に関連するところに就職する。施設では、就職の斡旋もしてくれるそうです。まさにこれこそが私たちのやりたいことで、いまはそれを目標にやっています。

(岡田真弓) なるほど。阿寒アイヌコンサルン設立の背景には、先住民文化に対して高い関心が寄せられるなかで、まさに先住民族のアイデンティティーにもかかわる文様や言葉を適切に普及していくためには、先住民自身による文化マネジメントが必要だと感じられたのですね。阿寒アイヌコンサルンの設立から約1年が経とうとしているところですが、実際に事業を開始されて新たに見えてきた課題はありますか。

(廣野洋) 認証事業のなかでアイヌ文様のデザインの依頼がきた場合、デザイン作成のためのデザイン料がかかります。デザイン料には、認証料が含まれています。また、阿寒アイヌコンサルンの規定では、認証したデザインまたはコンサルンが蓄積・保有するデザインを使って商品を販売する場合、テクニカル料がかかることを定めていますⁱⁱⁱ。いわゆるロイヤルティーとよばれるものです。しかし地元の阿寒や釧路ですと、いままで自由にアイヌ文様を使っていたので、小さな商店や卸問屋さんにはテクニカル料についてなかなか理解してもらえません。どうしたら分かってもらえるかが、いま一番の課題ですね。

(岡田真弓) 本日のご発表ですと、阿寒アイヌコンサルンで得られた収益は、阿寒湖アイヌコタンの後継者育成や国内外での文化交流や情報発信などの事業に充てたいということでした。また、文化伝承と人材育成、そして新たな文化の創造というサイクルを回していくためのビジネスという位置付けだからこそ一般社団法人を選択したというお話でしたが、長期的にはそういう目標があるということですよ。

(廣野洋) そうです。コンサルンの収益でもって次の事業展開の資金にしたいと思っています。一般社団法人ですので、お金をもうけるための会社ではありません。アイヌの人たちの収入につながる事業を展開するためのサイクルづくりを目指しています。これは、後でご意見があればぜひアドバイスをしていただければと思います。

(岡田真弓) 文化を確実に次世代に継承していくためには、どうしても資金がなければいけない。それを自分たちの文化力で作くり出していく仕組みがいま模索されているということだと思います。私からの最後の質問です。廣野さんが描く阿寒湖アイヌコタンの将来像、未来像というものがあれば教えてください。

(廣野洋) この知的財産保護事業のほかに、アーティストのブランド化を図る事業や後継者育成事業をやっています。そのほかにもいろいろな取組をやっていますが、最初にもお話しした通り、やはり地元の魅力がなければ、伝承を受けて担っていく子供たちが戻ってこないと思います。また、田舎ですし交通も不便ですから、ほかの地域から逆に来てもらうということも地元には何か魅力がないと来てくれないと思います。私たちは、アーティストたちがアイヌ文化を使って収入を得て生活できるように、販路を拡大して新しいものに挑戦してつくっていく。阿寒はそういう地域ですから。後継者育成事業では、どんどん工芸家やアーティストを増やして、このコタン内で事業を回していけるようにしたいと考えています。また、アイヌシアターでも踊り子が不足しています。阿寒湖アイヌコタンに集まった若者が踊り子もできる、物づくりもできる、住むところもある、そういったコタンにしていきたいと思います。

(岡田真弓) はい、ありがとうございます。実はフロアからもいくつか質問がきていますので、ご紹介しつつ、もしお答えできるものがあればお願いします。

まず阿寒アイヌコンサルンが取り組まれている知的財産保護事業は、阿寒のアイヌ文化にかかわるものをメインにやっているのでしょうか。それとも、アイヌ文化全般なののでしょうか。もし阿寒アイヌコンサルン以外でも、似たような保護事業をやっている組織があれば教えてください、というのが1つ目の質問です。

(廣野洋) 札幌アイヌ協会は実際に取り組んでいると思いますが、どこまで進んでいるかは分かりません。いま、平取や白老などのほかの地域とも連携してやりましょうという話をしているので、今後はほかの地域でも同様の取組が出てくると思います。私たちは独占しようという考えは全然なくて、これをどんどん各地域に広めて、どこの地域でもやるという体制にできればいいと思っています。私は北海道アイヌ協会の理事でもあるのですが、今度機会があれば、北海道アイヌ協会の理事会でもぜひ各地域で取り組みましょうという話をしたいと思っています。

(岡田真弓) 現在は阿寒にゆかりのある文様や言葉がコンサルンのメインになっているけれども、ゆくゆくはこういった知的財産保護事業を各地域と連携してやっていけるようにしたいということですね。ありがとうございます。

2つ目の質問です。『ゴールデンカムイ』などアイヌ文化を題材にしたコンテンツは、海外でも注目度が高いといわれています。コンサルンもまた海外でのアイヌ文化発信やコンサルタント業務をしたいということをおっしゃっていましたが、これまでに海外からそういった問い合わせは来ていますか。

(廣野洋) いまのところきていません。

(岡田真弓) これからということですね。

(廣野洋) ええ、そうなると思います。阿寒湖は観光地なので、窓口を開いていますと様々な海外の先住民との交流の話をいただきます。これまでも、海外の先住民との交流経験は何回もあり、例えば 2018 年にはアメリカのセミノール族が来て意見交換をしたりしました。これはコンサルンでやったわけではありませんが、今後はそういう依頼がくれば進んでやっていきたいと思っています。

(岡田真弓) わかりました。フロアからの最後の質問になります。阿寒は人材育成のビジョンを強く持っている印象を受けましたが、例えばウポポイでの運営においてもそういった人材育成のノウハウについて、何かしら阿寒からアドバイスをしたり、あるいはノウハウを共有したりということはあるですか、という質問です。いかがでしょうか。

(廣野洋) これはあります。先ほどのユークラ街道もそうですが、いろいろな面で協力していきたいと思っています。知的財産保護事業についても白老からヒアリングに来てくれました。

(岡田真弓) 阿寒での先駆的な取組のなかで得られたノウハウや知見を、各地域と共有しながら課題解決に向かっていくということですね。

(廣野洋) そうですね。

(岡田真弓) ありがとうございます。フロアからもまだ質問をいただいています、そろそろ閉会のお時間が近づいてまいりました。廣野さん、もし最後に何か今日聴いてくださっている皆様にメッセージがあれば、お願いいたします。

(廣野洋) 先ほど一番の課題としてお話したテクニカル料、ロイヤルティーを設定することについて。その辺のアドバイスを聞きたいと思っているので、知恵を貸していただきたいなと思います。

(岡田真弓) いままさに北海道観光、日本の観光は、アイヌ民族やアイヌ文化とどのような関係性を構築していくかという点で、新たなステージを迎えていると感じています。こうした状況のなか、文化伝承と経済活動を両立するツールとして観光を積極的に使いたいというアイヌの方々からの要望に対して、観光学に身を置く私たち研究者はどういう貢献ができるのかということを考えなければいけないと思っております。本日、聴講してくださった皆様のなかで、廣野さんからの問いかけに対するヒントやアイデアをお持ちの方がいら

っしかったですら、ぜひ廣野さんでも私の方でもご連絡いただければ幸いです。

それでは、本日の公開講座はこちらで閉会とさせていただきます。阿寒湖アイヌコタンからご参加いただきました廣野さん、本日は誠にありがとうございました。ソンノ・イヤイライケレ。

(廣野洋) どうもありがとうございました。イヤイライケレ。

参考文献：

煎本孝

2001 「まりも祭りの創造：アイヌの帰属性と民族的共生」『民族學研究』66(3), 320-343.

齋藤玲子

1999 「阿寒観光とアイヌ文化に関する研究ノート：昭和40年代までの阿寒紹介記事を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8, 111-124.

2000 「北海道観光案内のなかのアイヌ文化紹介の変遷：昭和期の旅行案内・北海道紹介記事の考察をとうして」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』6, 29-42.

ⁱ 公開講座では、YouTube で公開されている『ロストカムイ』のプロモーション動画を上映した。<https://www.youtube.com/watch?v=2xmkmRn3w8g&feature=youtu.be> (2020年2月25日アクセス)

ⁱⁱ 阿寒アイヌコンサルンのホームページ。<https://a-ainucon.com/> (2020年2月25日アクセス)

ⁱⁱⁱ 詳細は、阿寒アイヌコンサルンの認証事業参考価格表を参照。
<https://a-ainucon.com/wordpress/wp-content/themes/%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%8C%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%82%B5%E3%83%AB%E3%83%B3/img/price.pdf> (2020年2月26日アクセス)

観光を通じたアイヌ文化の 継承を目指す ー阿寒湖アイヌコタンの挑戦ー



阿寒アイヌコンサルン 理事長 廣野 洋

1

1

1.阿寒湖アイヌコタンの組織紹介



2

2

**①阿寒アイヌ協会（本会員数44名・会長 廣野 洋）
（公益社団法人北海道アイヌ協会・第1類正会員）**

<目的> 先住民族アイヌの尊厳を確立するため、人種、民族に基づくあらゆる障壁を克服し、その社会的地位の向上と文化の保存・伝承及び発展に寄与することを目的とする。

<事業> (1) 会員の社会的地位の向上
(2) 会員相互の親睦
(3) 職業の確立及び教育の振興
(4) アイヌ民族文化の伝承保存
(5) その他目的を達成するために必要な事業

3

3

■阿寒アイヌ協会正会員の年代・性別（2016.4調）

18歳～40歳	3 名	（男0・女3）
41歳～50歳	9 名	（男3・女6）
51歳～60歳	11名	（男8・女3）
61歳～70歳	8 名	（男3・女5）
71歳～80歳	10名	（男7・女3）
81歳～	3名	（男1・女2）
計	44名	（男22・女22）

■釧路市のアイヌ人口／世帯数（2013.7調）

釧路地区	955人	／	433世帯
阿寒地区	145人	／	62世帯
音別地区	11人	／	4世帯
計	1.111人	／	499世帯

4

4

②阿寒アイヌ民族文化保存会（会員数51名・会長 松田 健治）

＜目的＞ アイヌ民族文化の保存と育成を目的とする。

＜事業＞ (1) アイヌ舞踊の保存と研究
(2) アイヌ語の研究
(3) ユーカラ座の育成

阿寒湖アイヌシアターイコロ



5

③阿寒アイヌ工芸協同組合 （組合員数31名・代表理事 西田 正男）

＜目的＞ 組合員の相互扶助の精神に基づき、組合員のために必要な共同事業を行い、もって組合員の自主的な経済活動を促進し、かつ、その経済的地位の向上を図ることを目的とする。

＜事業＞ (1) 組合員の事業に供するための共同施設の設置、維持管理
(2) 組合員の事業に供するための共同作業場の設置、維持管理
(3) 組合員のために行うアイヌ文化に関連した販売促進事業
(4) 組合員の取り扱う土産品、原材料及び消耗品資材の共同購買
(5) 組合員の経済的地位の改善のためにする団体協約の締結
(6) 組合員の事業に関する経営及び技術の改善向上又は組合事業に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供

6

6

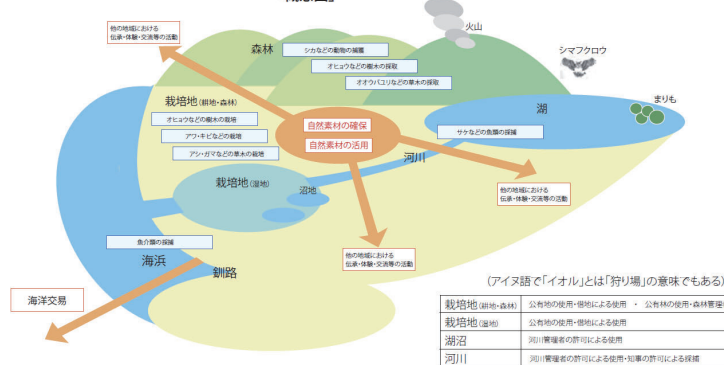
◇アイヌの伝統的生活空間(イオル)の再生

「概要」

森林や水辺等において、アイヌ文化の保存・継承・発展に必要な樹木、草木等の自然素材が確保でき、その素材を使って、アイヌ文化の伝承活動等が行われるような空間を形成する。

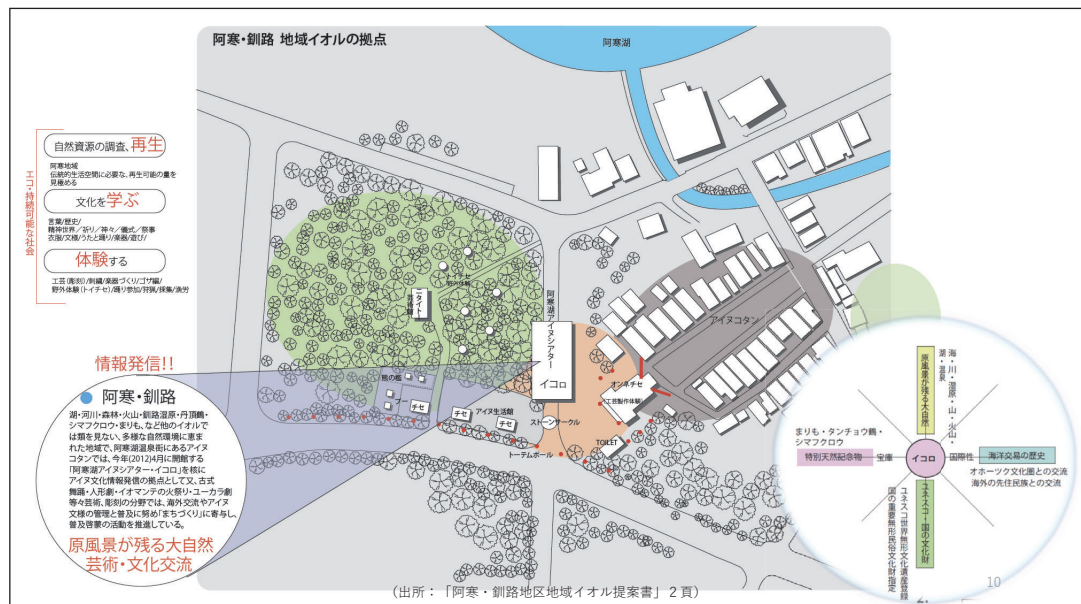
平成20年度は、白老地域において空間を活用したアイヌ文化の伝承等の育成等を図るとともに、新たに平取地域において自然素材の育成等に着手している。

阿寒湖温泉街(アイヌコタン)を取り巻く環境
「概念図」



(出所：「阿寒・釧路地区地域イオル提案書」6頁)

9



(出所：「阿寒・釧路地区地域イオル提案書」2頁)

10

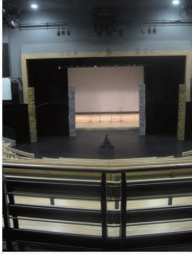


11

核となる施設のご紹介




**阿寒湖温泉歴史文化交流ゾーン
＜イコロ＞**

（出所：「阿寒・釧路地区地域イオル提案書」3頁）

ステージ（中央に奥が山）と観客席

ステージを見る

アイヌの歴史・文化の継承を行うとともに、情報発信の拠点としての要素を持つ施設です。地域住民と国内外からの観光客との交流の場として活用していきます。

さらに、北海道大学のサテライトとしてアイヌ文化の研究・発信の機能を持ち、阿寒湖アイヌコモンで実施している「アイヌ古式舞踊」「阿寒湖アイヌが演じる人形劇」「イオマシテの火まつり」「ユーカラ劇」等の施設利用を想定しております。会場内は、夜が使用でき、水路にはアイヌ民族特有の丸木船が浮かぶ様になっています。ステージ後方は、屋外までのオープンになっており、幅広いショーをご覧いただけます。また、海外先住民族の方々による公演など国際交流を目的とした施設利用も計画されています。

座席数 332 人
後部立ち見観覧数 120 人
延べ床面積 899.55 ㎡

イコロ：アイヌ語で「3D」という意味です。

12

12



■ アイヌ古式舞踊
(阿寒湖アイヌシアター イコロにて上演)

13

13



■ 復元された伝統的家屋
ポンチセ

14

14



■ 文化体験プラン
(木彫、刺繍、ムックリ)



15

阿寒 ユーカラ
ロストカムイ
LOST KAMUY

アイヌ伝統舞踊
×
現代舞踊
×
デジタルアート

16

アイヌ文様、美術音楽等に関わるアイヌアート、アイヌ語、
アイヌ舞踊など
古来よりアイヌ民族が育んできた**知的財産の適切な使用と
普及**を目的とする。



正しく使われたい・広く知られていきたい
そして、
正しく伝承していきたい

17

17

網走刑務所との連携事例



18

18

3.アイヌ知的財産の保護にむけて

①会社概要

〈社名〉一般社団法人 阿寒アイヌコンサルン

〈設立総会〉2019年5月16日

〈設立〉2019年8月28日

19

19



20

20

2020年3月26日 北海道新聞(朝刊)





アイヌ文化の継承と発展

1

私たちは、アイヌ文化を知的財産として
正しく、広く普及させる事を目的に
活動しています。

・デザインの監修・制作・認証
・車や建物への文様
・アイヌ語の看板

・アイヌ料理の提供
・アイヌ芸能
・アイヌ語、伝説の使用

など、アイヌ文化全般を正しく理解し、ご利用いただくために
コンサルティング監修・制作のご相談を承ります。
当法人が監修・制作したものは
④AIPR認証マークと認証コードを発行いたします。

アイヌ文様の使用についてお気軽にご相談ください。



AIPR（アイヌ文化の知的財産）
の認定を受けたアイヌ文化の
デザインを制作・提供します。

ご相談のプロセス

相談	監修	申込	アイヌデザイン監修書
制作	発注	納品	商品納品

アイヌデザイン監修書 監修者発行 入会確認
経 営 者 発 行



認定監修書ではアイヌ文化の知的財産として
アイヌ文化のデザインを
制作・提供。アイヌ文化
の継承と発展に貢献
しています。

一財団法人 **阿寒アイヌコンサリ**

T085-0467 北海道釧路市阿寒町阿寒湖温泉4-7-19

F0154-65-8973 E0154-65-8985 E hirono@a-ainucon.com

21

21

アングロプラヤ ~私たちの窓から伝える文化~

アイヌ文様のデザインなどを活用してみませんか
気になる方は「ご相談ください」

私たちは、アイヌ文化を知的財産として正しく、広く普及させることを目的に活動しています。

News

2020/9/1 ホームページを開発しました。

News一覧

Link

アウゴダイ

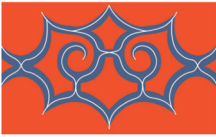
アウゴダイ

(出所：<https://a-ainucon.com/>)

22

22

③ 相談事項

アイヌ文様 アイヌ文化に照らして 監修・制作・認証します。  アイヌが身に着ける衣服には、切り伏せした布や刺しゅうなどによって、モレウ(渦巻文)やアイウシ(括弧文)と呼ばれる独特の文様が施されています。 これらの文様には地方によってそれぞれの特徴があり、母から娘へと伝えられました。襟や袖口、裾まわりなどに施された文様には、単に見た目を美しく飾るだけでなく、そこから「勇気の神々」などが入り込まないようにする魔除けの意味があるとされます。衣服に限らず、日常的に身につける刀物や儀式の際の刀や装飾品などにも、アイヌ特有の文様が施されています。 デザイン性に重んじたアイヌ文様を様々なシーンや日常生活に取り入れてみませんか。	アイヌ語 正しい使い方を監修します。  アイヌ民族は、文字に頼ることなく人から人へ独自の言語アイヌ語を口伝してききました。 例えばアイヌ語「カムイ」ですが、日本語で古くは「かむさび(神らしく振る舞うこと)」と書かれたように、「カム」という音でした。 日本の地名にも使われています。「札幌」は、「乾燥した広大な大地」を指すアイヌ語「サッ・ポロ・ベツ」が語源。他にも知床(シリ・エトク=鹿の突端)などアイヌ語にルーツを持つ日本の地名は多いです。 また、アイヌ語がそのまま日本語になった単語もあります。「昆布」「鮭」「ラッコ」「シシャモ」などがそれにあたります。また「サク(酒)」「クスリ(薬)」「メノコ(女の子)」など、日本語からアイヌ語になった例もあります。私たちは日常生活でアイヌ語に触れているのです。アイニャッチコビーなどにも独自のアイヌ語は効果的だと思います。	アイヌ芸能 会場など指定の場所で舞踊や 楽器演奏を披露します。  アイヌの人たちにとって踊りとは、自分たちが踊って楽しむだけでなく、先祖や神々に対して敬意や感謝を表すものでした。 儀式の時や、親戚・友人が集まった時、あるいは仕事をしている屋中など、さまざまな場面で歌い、踊りました。踊りには、神々への祈りを表したものと、悪霊を払い払うもの、豊漁願を祈願するもの、労働の様子を表したものなどさまざまな種類があります。 踊りや歌、アイヌ独自の楽器ムックリやトンコリなどの伝統楽器は、今も受け継いでおり、敬意や感謝を表した舞踊や楽器をぜひご堪能ください。	アイヌ料理 料理・レシピの提供をします。  北海道各地の郷土料理にはアイヌの食文化が影響しています。サクを凍らせた「ルイベ」は、ルイベ(とける・食べ物)という意味を持つアイヌの伝統料理です。 有名な三平汁や石狩鍋はチェブオハツがその起源とされています。 アイヌの食文化は現代の北海道の生活に根々と受け継がれているといえます。食事などでの提供しますのでご相談ください。
--	---	--	--

(出所: <https://a-ainucon.com/consultation/>)

23

23

Q 1. なぜ会社をつくるのか？

A 1. 2019年の「アイヌ施策推進法」施行を契機に開始された交付金事業を阿寒アイヌコタンの意思に基づいて活用していくための受け皿、ウタリの手による『法人格』を持つ組織が必要だったため。

阿寒アイヌコンサルが担う事業内容

- ・ 知的財産の管理 (認証マークを発行し、申請者からコンサルタント料等を受けとる)
- ・ 舞踊/工芸/食/ウパシクマ/儀式など文化伝承と後継者育成 (リクルート)
- ・ アイヌ文化デザインの商品開発・販売、その監修
- ・ 文化情報発信 (公演など) 事業としての域外派遣等マネジメント
- ・ 文化情報発信 (アイヌ文化ガイドなど) 事業としての域内事業等マネジメント
- ・ 事業化ノウハウの確立と他地域ウタリへのノウハウ共有

24

24

Q 2. 既存の組合（たとえば観光協会）でなく、新しい組織を立ち上げたのはなぜか？

A 2. 文化伝承 × 文化交流・情報発信 × 知的財産の適正管理をアイヌ自身で実践するため。

- 新しい交付金事業の受け皿となる組織は、観光振興に限らず、歌謡/舞踊/工芸/儀式/料理などの「文化の伝承」が核となる。
- 観光地（阿寒）における収益だけでなく、ほかの国や地域においてもアイヌ文化の情報発信などを通じて、阿寒湖アイヌコタンが経済活動を行えるようにする（知的財産管理、歌謡舞踊の域外公演・工芸作品の他地域販売など）。

25

25

Q. 3 一般社団法人を選択したのはなぜか？

A 3. 知的財産の適正管理を通じて得られた収益は、阿寒アイヌコタンの国内外における文化交流・情報発信や阿寒アイヌコタンの文化伝承促進といった公益目的で用いるため。

- 一般社団法人は、「非営利」「社会貢献」を目的とする団体なので、「知的財産管理」などで収入を得る場合、営利目的の株式会社よりも、社会的信用力が高くなるため、円滑に事業推進に踏み込むことができる。
- 一般社団法人は、発起人が2人以上（法人含む）なので、コンパクトにスタートできるが、設立に30万円ほどかかり、また課税対象にもなる。

※一方、NPO法人は賛同人が10名以上必要となるため、スタートもその後の意思決定も煩雑になる。一方で、設立に費用はかからず、しかも非課税。

26

26

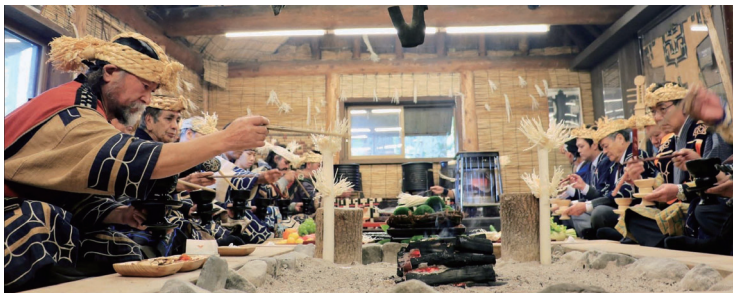
まとめ：阿寒アイヌコンサルンの強み

- 新しい交付金事業を、阿寒アイヌコタンの意思に基づいて、主体的に活用していくため、ウタリの手による『法人格』を持つ組織が必要。
- 文化伝承 × 文化交流・情報発信 × 知的財産の適正管理をアイヌ自身で実践するため、阿寒湖アイヌコタンの各組織と(外部の) 依頼者をつなぐ、新しい組織が必要。
- 知的財産の適正管理からの収益は、阿寒アイヌコタンの国内外における文化交流・情報発信や阿寒アイヌコタンの文化伝承促進に充て、持続可能な文化伝承や後継者育成を目指す。

27

27

4.未来への挑戦



アイヌ文化周遊ルート造成事業
平成29年度事業報告

28

28

①アイヌ文化の活用における広域連携

●2017年「アイヌ文化周遊ルートづくり協議会」設立

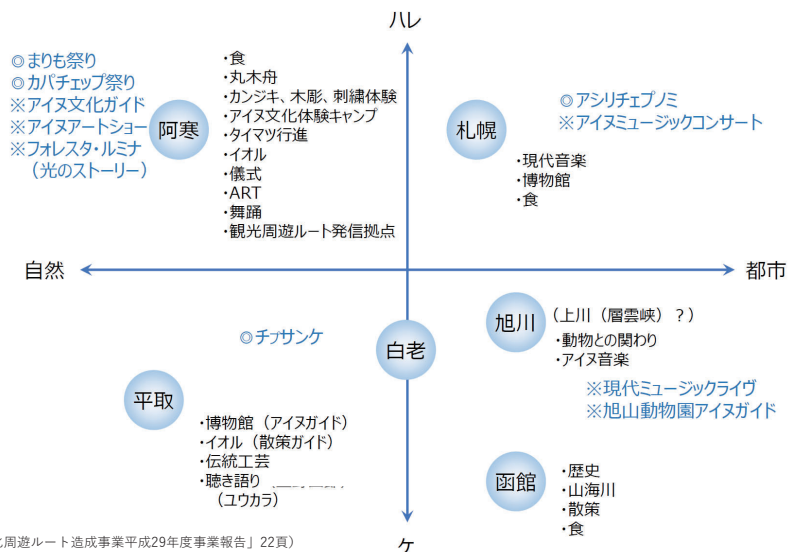
- ・ 阿寒、白老、旭川、札幌、函館、平取町
- ・ 各地のアイヌ文化の特色を発信し、白老のウポポイを拠点として各地に観光客を誘致するための周遊ルート「ユーカラ街道プレミアム」づくり

→アイヌ文化観光の経済的・地域的メリットを分散させる



29

アイヌ文化周遊ルート コンセプトマップ



30

②アイヌガイドツアー

- 6月1日より予約開始
- 6つのテーマツアー
- 5人のアイヌガイド
- コンセプト：

阿寒湖で暮らすアイヌの案内で自然散策、モノづくりを楽しみ、体験を通じてアイヌ文化を知る

- ネイチャーガイドではなく、アイヌの個人的体験に関する語りを聴きながら、森や湖を歩く



アイヌ民族によるガイドツアー（出所：<https://anytimeainutime.jp/tour/>） 31

31



③ 交流拠点としてのオンネチセ

- 1954年 古式舞踊等のための劇場として建設
- 1985年 現在の建物が完成
- 2020年 改装工事終了
 - ユーカラ街道プレミアムの新しい交流拠点
 - アート作品に特化したミュージアムも併設
 - ツアーに不可欠な「食」も体験できる場

32

32



33



34

第4回 ツーリズムを通した心の復興に向けて

——埼玉県と大槌町の挑戦から

島田 邦弘

埼玉県産業労働部観光課 課長

安藤 彰紀

おおつちバラエティショー実行委員会 企画プロデューサー

山村 高淑

観光学高等研究センター 教授

1. はじめに

1-1. 登壇者紹介

（山村高淑） 皆さん、こんばんは。本日のホストを務めます観光学高等センターの山村高淑と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。本日は、埼玉県産業労働部観光課課長の島田邦弘様、おおつちバラエティショー実行委員会企画プロデューサーの安藤彰紀様をゲストに迎え、『ツーリズムを通した心の復興に向けて——埼玉県と大槌町の挑戦から』と題してお送りして参ります。お越しいただいていると申しましても、実はさいたま市、大槌町、札幌市の3地点をオンラインで結んで生配信致します。これから90分間、お付き合いの程何卒宜しくお願い申し上げます。さて、本日のゲストお二方を、まずは私の方からご紹介申し上げます。

お一人目のゲスト、埼玉県産業労働部観光課課長の島田邦弘様をお招きしております。埼玉県にお生まれになり、埼玉県庁入庁後、神川町の副町長、県の国際課長などを経て、平成30年から現職でいらっしゃいます。地域の活性化や広報業務等を主に担当される中で、マンガ・アニメ作品『らき☆すた』に出会ったことを契機に、現在では公私を問わず県内各地のマンガ・アニメを活用したまちおこし活動にコミットされています。マンガ作品やアニメーション作品と、地域とのコラボレーションを、自治体の現場でコーディネートされてきた第一任者でいらっしゃいます。

続いてお二人目のゲストは、岩手県大槌町でおおつちバラエティショー実行委員会の企画プロデューサーをなさっている安藤彰紀様です。2014年に兎塚エイジ氏デザイ

ンによるオリジナルアニメプロジェクト『曲花村役場（仮）』を開始、2015 年からは、おおつちバラエティーショーに携わり、アニメや実写映像作品、演劇、音楽、体験移住等を活用して〈メディアミックス地域おこし〉を実践されています。この〈メディアミックス地域おこし〉という言葉は、安藤さんの造語なのですが、非常に興味深い概念だと思いますので、後ほどゆっくりお話を伺いたいと思います。

1－2．本日の趣旨

さて、本日のテーマにつきまして、簡単にご説明申し上げます。本日のテーマは、『ツーリズムを通した心の復興に向けて』です。〈心の復興〉という言葉、実はこれも大槌町の安藤さんから頂いた言葉です。皆さんご存知のとおり、岩手県大槌町は 2011 年の東日本大震災で津波による甚大な被害を受けました。そんな中で、インフラの復興とともに地域の皆さんの心の復興も非常に重要だということで、大槌町では、〈おおつちバラエティーショー〉という、地域の皆さん主体の演劇を中心とした公演活動が始まっていったわけです。この〈心の復興〉という言葉は、今現在私たちが直面しているコロナ禍を地域がどう乗り越えていくことができるのか、その場合にも当てはめることができます。様々な問題・課題を、ツーリズムや交流を通して、地域はどう乗り越えていくことができるのか？ 埼玉県と大槌町の 2 つの事例を通して、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

また、その際、〈コンテンツツーリズム〉が本日のキーワードとなります。コンテンツとは、「ポピュラーカルチャーの形で創造、編集され、それ自体を消費することで楽しさを得られる、物語、キャラクター、ロケ地、その他創造的要素といった情報内容」（山村 2021: 12）のことを指します。そして、こうした「コンテンツによって動機付けられた、一連のダイナミックなツーリズム実践・経験」（山村 2021: 16）をコンテンツツーリズムと呼びます。メディアを横断したコンテンツの消費がどのように場所と結び付き、物語世界を身体化するのか？ 物語世界がどのようにツーリズム実践を生んでいるのか？ そうしたあたりがコンテンツツーリズムの研究や実践分野での中心的関心になります。本日ご紹介いただく 2 つの事例も、まさにコンテンツツーリズムの先駆的な取り組みになります。

1－3．3つの論点

さて、お二方のお話を伺いする前に、あらかじめ私のほうから 3 つの論点を提示しておきたいと思います。

まず 1 つ目の論点は、〈メディアミックス地域おこし〉にはどのような可能性があるのか、という点です。〈メディアミックス〉というのは、もともとコンテンツ産業において、ひとつのコンテンツを様々なメディア（テレビ、マンガ、アニメ、舞台等）を通して流通させていく戦略を指す語なのですが、そういったメディアミックスとリアルな場所との関係性、メディアミックスにおいて場所の持つ意味、このあたりのことを考えていきたいと思っています。

それから 2 点目の論点は、〈リアルな場所〉と〈オンライン〉の効果的な組み合わせとは

一体どんな形なのだろうか、という点です。近年、特にコロナ禍においては、オンラインの重要性——まさに今回のウェビナーもオンライン開催なのですが——が喧伝されがちです。しかし一方で、リアルな場所の重要性も変わらずに存在するわけです。どちらが良い悪いというのではなく、双方の組み合わせ、バランスをどう考え、そして、どう効果的に交流を生むことができるのか、そうした点を考えることが重要だと思うのです。言い方を変えれば、地域のサポーターを増やしていくためには、〈リアルな場所〉と〈オンライン〉をどういう戦略で組み合わせていくことが、地域からの視点においては重要なのか、という論点です。

そして3点目の論点は、〈世代〉と〈地域〉を越えたつながりはどのように醸成できるのか、という点です。地域住民どうしのつながり、地域住民と地域外の人々とのつながり、そうした人と人のつながりというのは、地域にとって非常に重要な資産です。地域の資産として、人のつながりをどういうふうに位置づけ、育てていくことができるのか？そして、次世代を担う人材をどのように育成し、その地域で培ってきたノウハウを、どのように継承していけるのか？

こうした3点を中心に、これから約90分、ゲストお二人のお話をお伺いしつつ、ツーリズムの本質とは何なのか、ご視聴頂いている皆様と一緒に考えていければと思います。

以上、簡単ではございますが、本日の趣旨説明とさせていただきます。

それでは早速、まずはおおつちバラエティショー実行委員会の安藤様からご講演をいただきたいと思います。安藤様、よろしくお願いいたします。

2. おおつちバラエティショーの取り組みについて

(安藤彰紀) 岩手県大槌町に住んでおります安藤と申します。よろしくお願い致します。私は通常サラリーマンで組織に所属しておりますが、本日の話の内容は安藤個人の見解であって、組織の見解では無いということをご了承頂けましたら幸いです。

まず〈おおつちバラエティショー〉とは一体何かと申しますと、大槌町において、エンターテインメントを活用して地域振興をしよう、という活動です。では、ここで言う〈エンターテインメント〉とは何かと言いますと、演劇、音楽、舞踊、アニメ、そして短期移住(バラエティ移住、バラエティの頭文字を取ってVターン)を指します。こうした取り組みについて本日大きく2つの点からお話させて頂ければと思います。まず1点目に大槌町の紹介。2点目に、おおつちバラエティショーについて、その取り組みの具体的な紹介、です。

2-1. 大槌町の紹介

皆さん、これから大槌町に関するある数字をご提示します。〈1286〉です。おわかりになりますでしょうか？

この数字は東日本大震災による大槌町の人的被害の数です。東日本大震災によって、大槌町でお亡くなりになられた方、行方不明の方、あるいは関連死の方を含めると、1,286 人になります。当時の大槌町の人口約 1 万 5 千人のうち、1,286 人の方が犠牲になられたわけです。なお現在の大槌町の人口は 1 万 1 千人弱というところですよ。

地理的な場所ですけれども、大槌町は岩手県沿海部のちょうど真ん中あたりに位置します。岩手県は三陸（陸前・陸中・陸奥）の陸中と言われる部分で、観測衛星から見ると広大で急峻な山林が広がる場所であることがわかります。岩手県の広さは、四国がすっぽり入るくらい大きな県で、内陸には工業地帯もありますが、沿岸は例えば鮭など、漁業、水産業が非常に盛んな県です。

こちらのスライドは、大槌町の被災前の状況を示す航空写真です。北と南に大きい川があって、その周辺部に都市が形成されています。同じ範囲の被災後の航空写真がこちらです。この赤い区域全てが津波によって被害を受けた範囲になります。住宅地の50%以上、商業用地の90%以上が津波の被害を受けました。震災前と震災後でこれだけ街の姿が変わってしまいました。

震災後には、家を失われた皆さんのために、応急仮設住宅が町内の 48 か所に造られました。仮設住宅にどのくらい入居状況があったかと言いますと、平成 24 年 7 月から平成 26 年 6 月までのグラフを見ますと、世帯数で 2 千世帯前後、入居人数で約 4,600 人から 3,900 人と、高水準が続きました。被災の詳細な状況は大槌町のホームページの復興レポート¹というところで公表しております。当時の仮設住宅入居状況等のデータも最新のものが公表されておりますので、是非大槌町のホームページをご覧ください。

2-2. おおつちバラエティーショーについて

それでは次に、2 点目の〈おおつちバラエティーショー〉についてご紹介したいと思います。ここではおおつちバラエティーショーについて、3 点に分けてご説明したいと思います。まずは〈成果〉、そしてなぜやったかという〈企画意図〉、最後に、バラエティーショーにどういった方々が関わったのか、〈スタッフ・キャスト〉についてです。

① 成果について

まず成果についてですが、一言で言うと、関わった方々に価値観の変化があった、ということです。バラエティーショーによって、新しい絆が生まれました。そして県外公演なども行いましたので町の PR にもなりました。例えば今回、このように公開講座にお招き頂き、町の PR をさせていただく機会を頂ける、これも成果の 1 つです。

1 つずつ具体的な成果を挙げて参ります。まず公演をこれまで 7 回行いまして、総計 3 千人以上のお客様にご観覧いただいたところです。おおつちバラエティーショーは演劇を中心にした出し物なのですが、完全にアマチュアが行う公演です。そうしたアマチュア公演をこれだけの方にご覧頂けたことは大きな成果だと感じています。

次に短期移住。何をやったかと言いますと、演劇を通じた短期移住、バラエティーのVから〈Vターン〉と銘打ちまして、首都圏在住のお二人の女優の方に、一定期間大槌町に住んで頂き、大槌町で公演をしたり、長野県軽井沢町で公演をしたりして頂きました。その後、お二人は東京に戻られて俳優活動をされていますが、2019年の大槌公演の際、再度、大槌にお越し頂き、お一方にはゲスト出演を頂き、お一方には公演を観覧頂きました。このお二人との絆はいまだに続いております。また、その他、俳優、劇団の皆さん、高校演劇の皆さん、学術・研究機関の皆さん等と、演劇を通じて関係を構築することが出来ました。

その他に、バラエティーショーの大きな柱として、音楽(オリジナル楽曲)を作りました。ただ作った、というのではなく、プロの皆様にボランティアの形でご参画頂くとともに、バラエティーショーのメンバーや町への派遣職員の方々がボランティアのコーラスとして参加することで、オリジナル楽曲の収録を行いました。このスライドは収録をしている様子なのですが、本日ご登壇いただく島田様にもゲストとして、コーラス部分でご協力頂きました。またタレント・歌手のはなわさんの楽曲にコーラス部分で参画させて頂きまして、それを契機に、はなわさんに、大槌町の観光大使である〈三陸♥おおつちPR大使〉を委嘱させて頂くことに繋がりました。こちらは、埼玉県川越市の尚美学園大学様に無償のボランティアというかたちでお力添えを頂き、音楽の制作・編集をして頂いているところです。

次は、〈アニメとマンガについての成果〉についてです。『ゼロの使い魔』や『異世界はスマートフォンとともに。』といったライトノベルでイラストを担当していらっしゃる、イラストレーターの兎塚エイジ先生に、オリジナルのキャラクターとポスターを作っていただいております。おおつちバラエティーショーを始める前に、〈O(オー)町フィルムコミッション〉というグループで、大槌の友人と共に、『曲花村役場(仮)』という完全オリジナルキャラクターによる企画を立ち上げ(図1)、2015年末には同企画でコミケにも参加致しました。その際、キャラクターデザインを兎塚先生にお願いしたことがきっかけになって、その後、『バラエティーファミリーズ』というバラエティーショーのアニメ・マンガ企画に発展していったという経緯がございます(図2,3,4)。こうした中、兎塚エイジ先生にも〈三陸♥おおつちPR大使〉として、町のPRにご協力頂いております。いずれにしても、こういったオリジナルキャラクターとオリジナルストーリー、それに基づくイラスト・ポスター、こういったものを目下準備している段階です。これからアニメ・マンガについては、より力を入れていきたいなと思っております。

この写真は、東京都営地下鉄の各路線に2週間、『バラエティーファミリーズ』のイラストの中吊りポスターと駅貼りポスターを、東京都様の復興支援というかたちで、無償で掲出して頂いた際のものです。駅貼りでは、B0判という大きいサイズのポスターを掲出して頂きました。



図1 兎塚エイジ先生画による『曲花村役場（仮）』
(© 兎塚エイジ／中村彬良・安藤彰紀)



図2 兎塚エイジ先生画による『バラエティーファミリーズ』（その1）
(© 兎塚エイジ／おおつちバラエティショー実行委員会)



図3 兎塚エイジ先生画による『バラエティーファミリーズ』(その2:クロスオーバー回)
(© 兎塚エイジ/おおつちバラエティショー実行委員会)



図4 兎塚エイジ先生画による『バラエティーファミリーズ』(その3:クロスオーバー回)
(© 兎塚エイジ/おおつちバラエティショー実行委員会)

② 企画意図について

次が〈企画意図〉です。おおつちバラエティーショーは、具体的に次の3つの項目を達成することを意図して企画されました。すなわち、第一に〈東日本大震災で被災した町における町民の心の復興〉、第二に〈エンターテインメントにより個人の価値観を改革（意識改革）すること〉、第三に〈エンターテインメントを通して相互の違い（人種、国家、言語等）を超えて、町内外の人々の連携を促進すること〉、の三点です。端的にまとめてしまえば、エンターテインメントというものが、相互理解のツールになるのではないかと。そして世界平和につながっていけばいいなと、そうした願いが根底にございます。エンターテインメントが〈文化的安全保障〉になるのではないかと思います。というのも、例えば音楽やアニメ、映像等は、良いものであれば言語は不要で国境を超えていく。コンテンツにはそうした側面があるのではないかと、そう考えています。

③ スタッフ・キャストについて

最後に、スタッフとキャストについてです。事務局を含めて常時10から15名程度、さまざまな経歴と個性を持つ老若男女、10歳から81歳までのメンバーで活動しております。演劇を1本作るのに概ね半年かかりますので、その中で疑似家族といった関係性がメンバー内に生まれてきます。事務局は私を含め4名が中心となってこの企画を運営しています。バラエティーショーの企画当時、事務局の4名は、全員震災後に町役場に入った民間企業出身者で、〈役場内ベンチャーの企画〉であるということもできると思います。スライドに、〈異才×出会い〉と書きましたけれども、例えば、本来出会わなかったであろう人々を交差させて化学反応を起こす、そういうところが、この企画の特徴だと考えています。例えば、先程紹介しましたように、プロの歌手や俳優の方々と、全く音楽や演劇に携わったことのないアマチュアの方々が、一緒にコーラスをしてアルバムを制作したり、舞台上で共演したり、そういったことで参加した皆さんの価値観が変わっていきました。

そして、ここに、「来る者は拒まず、去る者追わず」という言葉を挙げてあります。ただし、いつでも戻れる場所にしよう、と心がけてもいます。例えば、皆さんアマチュアですから、本業のお仕事の都合で、活動に参加できなくなることもよくあるんですね。第1回目公演に出演した方が、第2回・第3回に参加できずに、第4回目に戻ってくるとか。第2回目出て第5回目に戻ってくるとか。そういったふうに、いつでも戻れる場所としての機能も重視しています。

2-3. まとめ——今後のエンターテインメントと地域振興のあり方

最後にまとめとして、「今後のエンターテインメントと地域振興のあり方」についてです。これは、言葉でお話しするよりも、これらの写真をご覧頂ければと思います（図5）。アマチュアの方も、プロの方も、入り混じって、こうした素晴らしい関係性を築くことが出来ました。この写真の皆さんの笑顔が、今後の地域振興のあり方全てを物語ってくれているよう

に思います。まずは私からは以上でございます。



図5 〈おおつちバラエティショー〉の面々
(出所：おおつちバラエティショー実行委員会提供)

3. 観光施策としてのアニメ聖地埼玉——アニ玉祭オンライン開催で分かったこと

(島田邦弘) 皆さん、こんばんは。埼玉県観光課で課長をしております島田と申します。どうぞよろしくお願い致します。先ほどの安藤さんの発表を伺いながら、何度も頷いてしまいました。演劇という〈コンテンツ〉を活用して少しでも地域に元気を取り戻そう、復興を図ろう、そういったことで頑張っている方々の話を拝聴することができて、とても幸せですし、心からおおつちバラエティショーのお取組みを応援したいと思います。

さて、安藤さんの場合は演劇というコンテンツのお話でしたが、私の場合はアニメというコンテンツについて、『観光施策としてのアニメ聖地埼玉——アニ玉祭オンライン開催で分かったこと』というタイトルでお話したいと思います。

3-1. 埼玉県観光課——はじまりのとき

皆さん、〈埼玉県〉と聞いて、何を思い浮かべますか？これはコロナ以前からの傾向なんですけれども、ここ数年、新聞やテレビ等様々なメディアで本県が取り上げられることが多くなっています。少し前には、タイトルに〈埼玉〉という文字が入った、とある映画が大ヒットしまして、埼玉県の知名度向上に大きくつながりました。ただその一方で、〈観光〉目的地としてはどうなのだろう、と考えた場合、埼玉県の観光県としての認知度はまだまだなのではないか。私ども観光課としても、もう一手、必要なのではないか。そんな思いを常に持っております。

埼玉県観光課は課としての設立が2009年（平成21年）4月で、実はまだそんなに古い歴史を持っておりません。観光課の前身は、ちょうど今の半分くらいの規模の、〈観光振興室〉という組織でした。その〈観光振興室〉が母体となって、例えば映画やドラマの誘致をしたり撮影支援をしたりするフィルムコミッション事業や、B級グルメに関する事業等、新しい分野に着手することを契機として、2009年に埼玉県観光課がスタートしたわけです。

実は私もその初期メンバーなんです。観光課立ち上げの際には、県の内部でいくつかの政策的な議論が活発になされました。そもそも埼玉県は観光振興に取り組む必要があるのだろうか？ 取り組む必要があるとすればなぜ取り組むのか？ これにはいろいろな理由があると思うんですよね。観光は人の流れを生み、人の流れが生じればそこに経済効果も生まれますし、まち自体の活気も生まれる。そもそも〈観光〉という言葉自体が、〈国の光を観る〉、要は地域のいろいろな資源に光を当てて、その価値をもう一度見直そう、という意味を持つ言葉ですから、観光は地域自体にもう一度目を向ける大きなきっかけになる。だから埼玉としても観光振興にもっともっと力を入れるべきだ。そういった議論がありました。

では、埼玉で観光振興を考える場合、埼玉観光の強みというものがそもそもあるのだろうか？ これも実は挙げていくと際限なくあるんですけど、例えば、抜群の交通アクセスがある。新幹線だけでも6路線あります。同様に、高速道路もかなり走っています。なんとといっても埼玉県は首都圏という人口4千万人もの巨大なマーケットの中に位置する。その首都圏の中だけでも、人が動けば相当大きなインパクトがある。でも、残念ながらこういった観光振興にとって恵まれた条件を持ちながらも、埼玉の場合は、東京に近すぎるが故に、どちらかというと観光地としての発展ではなく、東京のベッドタウン的な発展を遂げてきました。政策的にも、良好な住環境のための基本的な生活インフラの整備、その結果としての居住人口増、といった分野に、かなり多くの予算が振り向けられているのが実態です。

ここでとあるデータを紹介したいと思います。コロナウイルス流行前、昨年度（2019年度）における各自治体の観光関連当初予算ですが、例えば東京都が204億4千万円。200億円超えて、これが全国第1位。沖縄県では50億円以上の予算、北海道の場合は道として10億7千万円の予算が、それぞれ計上されています。それに対して、埼玉県は3億2千万円。他のいわゆる〈観光県〉と比べると、残念ながら桁が少ない状況です。

でも、埼玉には素敵な場所がいっぱいあるんです。その魅力を少しでも伝えたい！ そんな

な思いがありまして、観光課を立ち上げる際、ある〈テーゼ〉＝〈命題〉が職員の間で合言葉になりました。それは、『とにかく尖っていこう!』、というものです。意味するところは、埼玉らしいアプローチで埼玉の観光を売り込んでいこう。予算が少ないんだったら、ちょっと面白い仕掛けをすることでマスコミに注目してもらい、マスコミでどんどん取り上げていただくことによって、埼玉の良さをもっと発信できないだろうか。そんな虫のいいことを考えての観光課のスタートでしたが、実はいまだにちょっと考えております（笑）。

こうした経緯で埼玉県観光課が立ち上がったわけですが、実は当時、本県の観光施策の方向性を変える、大きな出来事がありました。

3-2. アニメとの出会い

それは観光課が誕生する2年前の2007年（平成19年）のことでした。埼玉県内の片隅にとある動きがありました。それは人によっては一見、ユニークで、「んっ?」と疑問を持つような奇妙な出来事に映るかも知れないのですが、よくよく眺めていくと、すごく心が温まる、全く新しい観光の形が生まれた出来事でした。この出来事は観光関係者以外にも大きな衝撃を与えました

①アニメ「らき☆すた」の登場

アニメ好きの人だったらもはや説明不要だと思いますが、この出来事のきっかけは、本県を舞台に設定したアニメ『らき☆すた』という作品のテレビ放送開始です。『らき☆すた』は『コンプティーク』という雑誌連載の4コママンガが原作で、アニメ版が2007年4月から3ヶ月間テレビ放送されました。同作品では主人公の姉妹が神社の巫女さんという設定でして、埼玉県久喜市鷺宮地区（当時の鷺宮町）にある鷺宮神社をモデルにその神社が描かれました。

このアニメは本当に素晴らしい作品で、テレビ放送開始後まもなく非常に人気が出まして、舞台モデルの鷺宮神社をはじめ、鷺宮地区に大勢のアニメファンが訪れました。昨今アニメの舞台地を訪れるファンの行動を〈聖地巡礼〉と呼ぶのが一般化しましたが、まさにその〈聖地巡礼〉の走りとして非常に有名な作品でもあります。この時に地元の商工会が中心となって、地域の方々とファンの方々をつなぐいくつかの取り組みが行われました。

そうした取り組みの結果——私自身、公務員でありながら実はあまり数字を言うのが好きじゃないんですけども（笑）——鷺宮神社の初詣客が13万人から47万人に増えました。アニメ放送がきっかけとなってこれだけ大きく増えたのです。さらに地域への経済効果も大きく、シンクタンク等からも『らき☆すた』が与えた地域の経済効果を試算したような調査結果が発表されています。

でも、私が本日特に言いたいことは、こうした経済効果以上に大きなものを、同作品は地域に生み出してくれた、という点についてです。

②2次元インパクト——まちを訪れ回遊してもらえ仕掛けの数々

先ほど、当時の鷺宮町商工会がまちおこしの仕掛けをいろいろ展開されたをご紹介しましたが、それをここで少々ご紹介できればと思います。商工会の皆様が、情熱と、何よりも遊び心とファンへの感謝の気持ちを持って、いろいろな取り組みをなさいました。

例えば、こちらは、昨今いろいろな自治体で見かけるようになりましたが——まさにその走りといっても良いと思います——キャラクターに対して特別住民票を発行するというもの。この特別住民票はファンの方に大変歓迎されまして、何万枚と売れました。

それから特にご紹介したいものがこれですね、キャラクターの顔が刻印された絵馬型のストラップです(図6)。キャラクターは10種類以上あります。そして単にキャラクターを10種類以上作ったというだけではなく、販売方法にもこだわったんですね。通常こういったキャラクターグッズを販売する場合、数をいっぱい売ろうと思ったら通信販売等を利用して、とにかくアニメの人気の高いうちにどんどん売る、というのがマーケティング的には正しいのだと思います。ただ、鷺宮町商工会では、敢えてそういった方法をとりませんでした。地域を訪れてくれた記念として、地域の人と触れ合いながら買ってほしいということで、商工会に加盟されているお店で販売する。そして、1つのお店につきキャラクターを2つまでしか置くことができない。もし宜しければ、他のお店も回って、ぜひ全キャラクターをコンプリートしてみてください、そんな仕掛けをしたのです。

こちらは、〈飲食店スタンプラリー〉といった、まちを訪れて回遊してもらう仕掛けです。地域の飲食店で食事をするスタンプがもらえる。スタンプを集めることで、地域ならではのいろいろな記念品がもらえたりする。

また、これは〈ツングレソース〉。まさにキャラクターの性格を表現する〈ツンデレ〉にかぶせた、完全な言葉遊びのソースを販売したんですね。これもキャラクターの性格に合わせて2種類の味が作られました。すごく人気のあった商品です。

……というふうに、本当にいくつもある仕掛けうち一部分だけをご紹介したんですけれども、どれもファンの気持ちを深く考えて、なおかつ地域とのつながりを意識して、そして遊び心というスパイスをふりかけて展開されていることがご理解いただけたのではないかと思います。



図6 まち回遊のきっかけとなった絵馬型ストラップ
(出所：久喜市商工会鷺宮支所提供)

③2次元インパクト——土師祭と〈らき☆すた神輿〉

さて、ここでどうしても皆さんにご紹介したいのが、土師祭というお祭りです。鷺宮神社にはもともと千貫神輿という有名な神輿がありまして、この神輿の渡御が行われる土師祭という夏祭りがあります。この夏まつりに、2008年から『らき☆すた』のキャラクターをデザインした神輿、〈らき☆すた神輿〉が登場するようになりました(図7)。まさにファンの方が主役の神輿が地域の祭り〈土師祭〉に登場したんですね。このことはすごく大切な意味を持つと思います。地域住民が地域の人同士をつなぐために長い年月、バトンを手渡し続けて現代に繋がってきたのが祭りであり、神輿です。そうした、地域の人たちの祭り中に、全く新しくアニメの神輿が入ったわけですから、なかなか地域の理解を得るのは大変なことだったと思います。

でも、この〈らき☆すた神輿〉が土師祭に登場するきっかけになったのは、お祭りを仕切る地元の代表者の方の、アニメファンに対する呼びかけだったんですね。「アニメファンの君たちもアニメが好きでうちの町に来てくれたんだろ? どう、アニメの神輿と一緒に楽しむかい?」、という。まさにこの呼びかけに、異なる価値観を地域が受け入れた証を見て取ることができるように思います。そして、地元代表者が音頭を取りつつ、アニメファンた

ちの手によって神輿が作られ、全国のアニメファンに呼びかけて担ぎ手を募集し、さらに祭り当日の〈らき☆すた神輿〉の運行もファン自身が管理・実施する。そうやって誕生したのが〈らき☆すた神輿〉でした。

今では土師祭の目玉の1つに成長しまして、その後何年もこの祭に登場しました。今事情があって、この土師祭は休止になっておりますが、いつの日か必ず復活してくれると思います。ちなみに、土師祭は、日本の伝統とポップカルチャーの融合例として上海万博にも登場しました。



図7 地域とアニメファンをつなぐ〈らき☆すた神輿〉
(出所：久喜市商工会鷺宮支所提供)

3-3. 観光資源・絆としてのアニメ

これまで述べてきましたように、『らき☆すた』という作品が、本県に、〈アニメと観光〉、〈アニメと地域〉といったテーマに目を向けるきっかけを与えてくれたのですが、その後、調べてみると、埼玉県はアニメやマンガ、ゲーム等、様々なポップカルチャー作品の舞台になっている場所が非常に多いんですね。有名どころで言うと、多分一番皆さんに分かりやすいのが、春日部市が舞台になっている『クレヨンしんちゃん』でしょうか。その他、飯能市の『ヤマノススメ』、秩父市の『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』（略称『あの花』）等々、本当に多くの作品があります。ちなみに埼玉県観光課が調べたところでは、現在、130近い作品で埼玉県が舞台となっています。

①秩父市におけるアニメファンの動向

先ほど「秩父市の『あの花』」と申し上げましたが、秩父市は〈秩父三部作〉という有名なアニメ 3 作品の舞台になりました。略称で言うと『あの花』『ここさけ』『そらあお』の 3 作。アニメファンだったら、あーあれね、とすぐお分かりいただけると思います。正式タイトルは、『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』『心が叫びたがってるんだ。』『空の青さを知る人よ』です。

1 つの舞台地で三部作が制作されるのは、なかなか珍しいことなのですが、それ以上に私が皆さんにご紹介したいのは、秩父市における〈新しい聖地巡礼の形〉です。実は、心無い人が、秩父市にある、アニメ作品の舞台にもなった橋の橋脚、橋を支える台の部分に、落書きをしてしまったんですね。これは『あの花』がテレビ放送される前からあった落書きなのですが、アニメファンの皆さんが「自分たちの大好きなアニメの舞台が汚れていると、どうしても悲しい気持ちになる」ということで、ある時、ホームページ等で告知をされました。すると、何と一週間後に——真夏 8 月の本当に暑い時期だったのですが——落書きを消したり、草むしりやゴミ拾い等の清掃活動をしったりというファンの皆さんによる活動がスタートしたのです。この活動は 2017 年（平成 29 年）に始まったのですが、今では夏の定番イベントになっています。まさにアニメファンの地域を大事にする気持ちが、地域を守るという具体的な行動に結実した素晴らしい例だと思います。

②県としてのアニメ施策

こうした動きのある中で、県としてはどんなことをしてきたのか、そのあたりについて簡単にご紹介できればと思います。せっかくアニメファンが埼玉県に目を向けてくれたのですから、県としても、ファンの皆さんが参加できるイベントをいくつも展開しております。例えば、このあと詳しく説明致しますが、〈アニ玉祭〉（アニメ・マンガまつり in 埼玉）という、アニメ等をテーマとした複合イベントを 2013 年からさいたま市大宮地区を会場に毎年開催しています。また、それとあわせて〈埼玉聖地横断ラリー〉——こちらは鉄道会社さんにご協力いただきながら、埼玉の舞台地を巡ってもらうスタンプラリー——といったようなものも行っています。アニ玉祭ですと、例年 3 万人ぐらいの方にお越し頂いていますし、アニメ横断ラリーにつきましては昨年度約 1 万 9 千人の方にご参加頂きました。

こちらは第 7 回アニ玉祭、昨年開催したアニ玉祭のステージイベントの様子です（図 8）。本当に多くの方で賑わっているのがお分かりいただけると思います。ただ、残念ながら今年度はこうしたイベントが新型コロナウイルス流行のせいで開催できませんでした。では、ステージイベントは開催できなくても、何かできることは無いだろうか？ コロナ禍の中でどのようにアニ玉祭を展開できるのか？ いよいよ本題に入りたいと思います。



図8 第7回アニ玉祭におけるステージイベントの様子
(出所：埼玉県産業労働部観光課提供)

3-4. コロナ禍とアニメ施策の新たな展開

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、埼玉県は全国でも感染者数が、残念ながら非常に多く、最後の最後まで緊急事態宣言の対象地域となっておりました。当然、今年度当初からアニ玉祭をどうするのかという議論は行っておりましたが、そこでの関係者共通の見解は、積極的に人の移動を促す状況になく、イベントの開催は困難である、というものでした。しかし一方で、SNSやホームページを通してのオンラインの声、実際の現場の声、いずれも、「是非何らかの形で今年もアニ玉祭を開催してほしい」という期待の声が非常に多かったのです。こうした中、直前ギリギリまで、開催の可否について、そして実施方法等について、関係者協議を継続しました。

6月には、バーチャル観光ホームページを県独自で立ち上げました。これは、今は観光地に行くことはできないけれど、例えば、バーチャルリアリティの映像や、その場の雰囲気や伝わるような動画等を通して、まずは行った気持ちになって、実際の旅の予告編としてバーチャル観光を楽しんでほしい、そんなホームページです。このホームページの経験も踏まえて、ファンの皆さんの気持ちに応えたい、今だからこそ出来る事が何かないか、と検討した結論、初の〈バーチャルアニ玉祭〉の開催となったのです。

①バーチャルアニ玉祭の状況

せっかくバーチャルでやる以上、やり方もこだわりたい。バーチャル感もうまく演出したい。さらに宣伝効果も出せれば……ということで、メインMCの二人に、埼玉県の観光大使をしていただいているアイドルグループ〈でんぱ組.inc〉の藤咲彩音さんと、VTuber（バーチャル・ユーチューバー）の煌星ヴィヴィさんを起用しました。リアルとバーチャルの二人のメインMCを置いて、いろいろなコンテンツを盛り込みました。さらに、観光地にいるようなVR動画（バーチャルリアリティ）とVTuberのコラボをしたり、このところ市場規模が急拡大しているeスポーツの特集コーナーを設けたり、とコンテンツをたくさん用意しました（図9）。その結果、お陰様で、当日で約1万8千件の視聴を頂いただけでなく、視聴者がSNSで「バーチャルアニ玉祭やってるよ」というように投稿を2万件ほどして頂き、結果として強力な広報になりました。まさにVTuberの持つウェブ上での拡散力、宣伝効果を再認識したような出来事でした。また、当日ご覧になれなかった方のために2日ほど空けて見逃し配信も開始いたしました。そちらと合わせますと約5万件の視聴をして頂いております。

②アニメの聖地サミット オンライン ver.

こちらの写真には私と山村先生が映っていますが、これは、〈アニメの聖地サミット〉という、アニ玉祭名物コーナーの今年の様子です。こちらもオンラインで、まさに今日と同じような形でZoomを使って実施しました。このサミットのコンセプトとしては、アニメやマンガのクリエイター、地域のキーマン、そういった方々をお招きしまして、作品に対する想いだったり、取り組みの舞台裏だったり、を、熱くゆるく伺うというものです。おかげさまですっかりアニ玉祭の恒例企画になっております。山村先生ありがとうございます（笑）。今回は、2021年1月にアニメ化が予定されている『弱キャラ友崎くん』というライトノベルの原作者である屋久ユウキ先生をゲストとしてお招き致しまして、たっぷりお話を伺いました。Zoomを活用した事前登録制で、延べ150人の方にご視聴いただきました。当日ご視聴頂いた皆様に心からお礼を申し上げます。

普段はアニメファンでもクリエイターの生の声はなかなか聞けませんし、ましてや、クリエイターがなぜ舞台地として埼玉を取り上げ、埼玉にこだわってくれたのか、そういった話を直接聞く機会は希少です。〈アニメの聖地サミット〉では、そういったところのお話を直接伺うことで、まさにコンテンツツーリズムの新しいきっかけが生まれたり、もう一度地域の良さを見つめ直すことができたり、そうしたことにつながっていくのではないかな。そんな思いでこの企画を続けています。

バーチャル アニ玉祭 第8回

アニメ・マンガまつりin埼玉

2020 **10/18** 日 11:00 START!!

埼玉ならではのスペシャル企画が盛りだくさん!!

メインMCは **藤咲 彩音 & 煌星 ヴィヴィ!!**
(せんぱい賞/埼玉県観光大使)

「バーチャルアニメと観光」今年は「ステイホームでイベントに参加しよう」

ソニックシティ公式YouTubeチャンネルで無料配信!
 音楽ライブ、トークショー、VR観光案内 など

11月6日「クラウドオープン」ところざわサクラタウンを紹介する特別番組

バーチャル観光を楽しむ!

文化放送 presents VTuberだらけの「秋の芸術祭」in アニ玉祭

TBSラジオ presents 「Roselia」トークライブ from バンドリ!

出演者

 初音 未来 (ボカロ/歌)	 絆 愛 (VTuber/歌)	 工藤 晴香 (VTuber/歌)
 桐野 あい (VTuber/歌)	 工藤 晴香 (VTuber/歌)	 桐野 あい (VTuber/歌)

チケット発売日: 10月10日(日) 10時(当日は11時)より発売(先着順)

アニメ・マンガの聖地サミット

MC **山村 高志**
(北海医科大学 医学部 医学研究センター 助教授)

埼玉ゆかりのゲストを囲い、トークショーを「聖地」で実施します。併催はアニ玉祭HPで見られます。

出演者

 久保田 永夢 (声優)	 遠藤 梓希 (声優)	 高橋 彩音 (VTuber/歌)	 春日部 つかし (VTuber/歌)	 要 菜花 (VTuber/歌)	 YURIKA (VTuber/歌)
---	--	--	--	---	---

イベントの追加情報や最新情報はアニ玉祭公式ホームページで!!

anitamasai.jp アニ玉祭 公式 @anitamasai #アニ玉祭

アニ玉祭応援キャンペーンサイト

地元企業やアニメ関連団体がバーチャルアニ玉祭を応援中!

主催・アニ玉祭実行委員会

SONIC CITY 彩の国 埼玉県 文化放送 埼玉王 NBS J:COM 埼玉新聞社

後援・さいたま市 協力・(一社)埼玉県観光協会

図9 初のバーチャル開催となった第8回アニ玉祭のチラシ
 (出所:埼玉県産業労働部観光課提供)

③バーチャルアニ玉祭の振り返り——良かった点

ここで、改めて今回のバーチャルアニ玉祭を振り返ってみたいと思います。

まず、良かった点。これは当然バーチャルですので時間も場所も問わず、本県におけるアニメの取り組み、「こんなことやってますよ」ということを、全国に周知することができた点です。本当にコロナウイルスの流行がすぐにでも収束に向かってほしいのですが、まだまだ先は読めない状況です。そういった状況においても、こうした形でアニ玉祭が開催可能だということが分かったことは、非常に大きなメリットでした。本当は実際に会場である大宮に来て頂いた方が、会場の熱気も伝わるので、主催者としてはありがたいというのが正直なところなのですが、でも物理的にもなかなか特定の日に大宮までお越しいただくことが難しい方もいらっしゃると思います。こうした遠方の方にも、今回、アニ玉祭の魅力の一端に触れていただけたのは良いことだったと感じています。また、先ほど VTuber のところでちらっとお話し致しましたが、今回は SNS でいろいろと情報を拡散して頂いた方が本当に多かったです。SNS を通じて、アニメファンの皆さんが積極的に〈バーチャルアニ玉祭〉の広報をして下さった。これは大きな成果でした。加えて、VTuber だったり e スポーツだったり、そういった多様なポップカルチャーコンテンツの可能性を改めて確認できた点は良かったです。

それから、どうしても触れておきたいのが、今回バーチャルアニ玉祭が成立する前提として、いろいろな企業さんやマスコミの方々にもご協力を頂いた点です。企業さんとのコラボも多く実現できました。実はアニ玉祭と並行して、NHKさんと、「できればアニメを活用して県をもっと盛り上げたいですね」というようなお話をしていたのですが、アニ玉祭が終わった翌月、NHKさんの首都圏ネットワークの夕方のニュース番組で、埼玉のアニメの取り組みをほぼ一週間ぶっ続けの特集として取り上げて下さいました。実はNHKさんの場合、テレビ放送だけでなく、FMでも関連放送をしてくれましたし、リアルなイベントも人数を限定したうえで開催して下さいました。こうした非常に良いコラボができたということも、今回のバーチャルアニ玉祭をやって良かったことのひとつです。

④バーチャルアニ玉祭の振り返り——今後の課題

一方で、当然のことながら課題もあります。そもそもイベントを開催する大きな狙いは、地域でにぎわいを作りたい、人に来ていただくことによって経済効果を生み出したい、というところにあります。しかし残念ながらバーチャルですと、この点はうまくいかない。また、アニメファンと地域、あるいはアニメファン同士の交流機会の創出もバーチャルではなかなか難しい。もともとアニ玉祭自体がこの二点を実現したいという思いで開催されてきた背景がある。やはり今後は、バーチャルと、例えば人数を限定したリアルイベントとの併用、そういったような手法が必要なのかなと感じています。

もう一点は、バーチャルでのイベントを開催した後にも、その効果が継続するような仕掛けを作ることが必要だという点です。この点に関して申し上げれば、先ほどアニメの聖地サ

ミットの話題の中で、『弱キャラ友崎くん』という作品をご紹介致しましたよね。同作品は埼玉県の大宮地区が非常に重要な舞台地になっているのですが——来月プレスリリースする予定なのであまり細かい部分は申し上げられないのですが——まさに大宮を会場として、アニメとコラボしつつ、実際にファンの皆さんが大宮に来て、『弱キャラ友崎くん』の魅力にちょっとだけ触れていただけるような、そんな仕掛けを実は手がけているところです。これも、今回のバーチャルアニ玉祭がきっかけとなって、地域の商業施設さんが企画に乗って下さったことで実現しました。これが成功すれば、今後のバーチャルとリアルをつなぐ大きな成果になるのかな、そんな思いでいます。

来年に向けて何かできる面白い仕掛けはないかなと、早くも考えはじめておりますので、ぜひ来年度もアニ玉祭を楽しみにしてください。

以上です。ありがとうございました。

4. 総合討論

(山村高淑) 安藤様、島田様、素晴らしいご講演をありがとうございました。

まず安藤さんのご講演。安藤さんには、大変分かりやすくおおつちバラエティーショーのお取り組みをご紹介頂きました。私もおおつちバラエティーショーを拝見しに何度か大槌町にお邪魔させて頂き、舞台裏も拝見させて頂いたのですが、まさに安藤さんがおっしゃるとおり、メンバーの皆さんがまるで家族のようだな——安藤さんは〈疑似家族〉という言葉が使われていましたが——と感じました。中学生からおばあちゃんまで1つの舞台上がって、そこで演劇をやられていて。毎年見に行くうちに、私自身もいつの間にか〈疑似家族〉の一員のように仲間に入れて下さって。バラエティーショー立ち上げ当時中学生だった男の子が、先日高校を卒業することになった時などは、食事を一緒にさせて頂いて感慨無量でした。

私だけでなく、私のゼミ生も何人か大槌にお邪魔致しまして、バラエティーショーのメンバーの皆さんと仲良くして頂きました。それがきっかけになって、バラエティーショーのメンバーの方が、今度は北海道の洞爺湖のイベントにお越しいただき、私たちと一緒に頂いたり。そういう交流の広がりが生まれていったことは、私やゼミ生にとっても非常に楽しく、貴重な経験になりました。安藤さんがおっしゃるとおり、本来出会わなかったであろう人たちが出会っていくことで、化学反応と言うか、面白い事が連鎖反応的に起こって行くんだなということを、身をもって体験させて頂きました。まさに「エンターテインメントは価値観を変える」のだと思います。年々舞台を繰り返していく中で、いろいろな人たちが関わり合いながら、とても大切なものが生まれてきているな、と感動致しました。ありがとうございます。

おおつちバラエティーショーのご活動、本当に心から応援したいと思っております。益々

のご発展をお祈り致します。貴重なお話を本当にありがとうございました。

そして続いての島田さんのご講演。埼玉県さんのお取り組みのキーワード通りの、「熱くゆるく」「尖った」お話をありがとうございました（笑）。私と島田さんが最初にお会いしたのが、確か2008年だったかと思います。島田さんがおっしゃるところの〈2次元インパクト〉があった翌年の春ですね。観光課の前身の観光振興室にお邪魔して、当時、室の皆さんが手掛けられていた〈埼玉ちょ〜でいーぶな観光協会〉という、これもウェブ上のバーチャル観光協会について、お話を伺ったのが初めての出会いでしたよね。

（島田邦弘） はい、そうでしたね。〈埼玉ちょ〜でいーぶな観光協会〉が立ち上がったのは、私が観光振興室に来る前の年だったのですが、その様子を見ていて、別の課にいらながらも「こんなことやっちゃっていいんだ」と感じてました。「あそこ行ったら面白そうだな」と思っていましたら、奇跡的に呼んでいただけまして。以降こんなふうになってしまいました（笑）。

（山村高淑） 良い意味でこんなふうに（笑）。でも振り返ってみれば、当時、早くもバーチャル観光協会を立ち上げていたわけで、そのノウハウが、今回コロナ禍という環境で新たに立ち上げられたバーチャル観光ホームページにも大いに活かしているのではないのでしょうか。「尖っていこう」というテーマのもと、やられていることは本当にぶれていないな、とあらためて感銘を受けました。

（島田邦弘） ありがとうございます。

（山村高淑） アニ玉祭も毎年サミットに参加させて頂き、本当にありがたく思っています。先程のご講演の中で、「遊び心というスパイス」という表現がありましたが、すごくいい言葉だなと思いました。実際にアニ玉祭に毎年参加させて頂き、お仕事とはいえ私自身本当に楽しいんですね。イベントに込められた遊び心がすごい。だからこそ安藤さんがおっしゃるところの〈疑似家族〉のような、埼玉の皆さんに関わりたいな、という気持ちが自分の中で毎年毎年大きくなっていく。そんな経験をさせて頂いています。本当にありがとうございます。

（島田邦弘） ありがとうございます。

（山村高淑） さて、ここで、本日聴講して頂いている方から、ひとつ質問が届いております。安藤さん宛の質問です。「現状、大槌町に外国人の住民の方や観光客は、どれくらいいらっしゃるのでしょうか？ また宜しければどの国の方が多いのかも教えてください」というご質問です。安藤さん、如何でしょう？

(安藤彰紀) 手元に数字が無いので、私の感覚的なお答えになりますが、まず外国人の方で大槌町にお住まいの方は、技能実習生の方が多く、おそらく数十人程度ではないかと思います。東南アジア出身の方が多い印象ですね。大槌町にお住まいの外国人の方で欧米出身の方は、私が知る限りでは、おそらくお一人。学校のALTの先生です。

観光客の方については、具体的には台湾の方が多く、震災前には年間2千人の方にお越しいただいたこともありました。また、大槌町は震災の時に台湾赤十字さんから16億円以上の御支援金をいただきまして、これを活用し、幼稚園の再建や災害公営住宅を整備しております。加えて、今、オリンピックの復興ありがとうホストタウンでは、台湾が大槌町のパートナーとなっています。コロナ禍の前には、例えば音楽大学のコーラスグループの方々がいらっしゃったり、あるいは台湾の高校生の方が大槌町に研修旅行にいらっしゃったりしています。

(山村高淑) 安藤さん、ありがとうございます。

それでは島田さん、安藤さんとお話を進めて参りたいと思います。まず島田さんに1点、先ほどのご講演に関連して私からお伺いしたい点がございます。アニ玉祭に毎回参加させて頂く中で、いつもすごいなと感心するのがタイムテーブルです。複数のイベントを同時進行で実施されていますよね。このあたり、どのように上手くマネジメントされていたのでしょうか。そのあたり、お聞かせいただけますでしょうか。

(島田邦弘) そうですね。確かに、プログラムの組み立てについては悩むところですよ。これまで実際のリアルな会場で開催してきた際も、結構な苦情を頂きました。「どうしてあっちとこっちを一緒にやるんだ」、「両方見たいのに」、と。

(山村高淑) あれだけ面白いコンテンツが並ぶのですから、それはありますよね。

(島田邦弘) そうなんです。でも今回は、オンラインということもあり、同時進行はできませんでした。ですので——部下の職員の考えを尊重したのですが——、とにかく見て飽きないように、いろいろ変化をつけようと、コーナーとコーナーの間に地域のPRを入れたり、ゆるキャラコーナー的なものを入れたりしました。本当にずっと通して見てくれる人もいないかもしれないので、とにかくメリハリがつく形にしよう、それだけを心掛けました。メリハリです。

(山村高淑) そうだったのですね。違う角度から言えば、それだけコンテンツが充実したからこそ、先程おっしゃっていたように見逃し配信の視聴者の伸びがあった、とも言えますよね。

(島田邦弘) そうですね。

(山村高淑) ありがとうございます。さてここで、聴講されている方から、島田さんにご質問を1件頂きました。「お祭りは土着性のある地域の核となる伝統だと思います。〈らき☆すた神輿〉の際、伝統が損なわれるのでは等の反対意見はあったのでしょうか？ もしあったとすれば、その反対意見に対してどのように対話を重ねたのでしょうか？」というご質問です。いかがでしょう、島田さん。

(島田邦弘) そうですね。それに関しては、山村先生もよくご存知だと思うのですが、残念ながらお亡くなりになられてしまったのですが、鷲宮に成田さんという、人望もあって、地域で祭りを仕切っていた方がいらっしゃったんですね。その成田さんが、本当にアニメファンのことをよく見つめて下さっていて、ファンの気持ちをしっかり汲み取ったというところがまず大きかったと思います。そしてさらに言えば、そこにつながるまでに、先程いくつか紹介しましたように、商工会さんが、地域のいろいろな場所をアニメファンに巡ってもらえるような仕掛けをうまく組み立てたということがありました。当時はまだまだ、いわゆる〈オタク〉というものに対して、マスコミの論調も決して温かいものじゃなかったです。

また、地域住民の皆さんにとっても、「アニメファンってどんな人達なのだろう？」という思いがあったと思います。それが、例えば飲食店のスタンプラリーでは、スタンプを手に入れるためにファンの皆さんが実際にお店の人と会話をしながら「美味しかったです、スタンプお願いします」と。ストラップを買う時にも「ストラップ買いに来ました、売ってください」と。そうこうするうちにだんだんと、お店の方々と住民の方々も、「アニメファンって心優しくて真面目だね」、「そんな真面目な人達が縁もゆかりもないうちのまちにまでわざわざ来てくれるんだから歓迎しようよ」、そんな空気が広がっていったように思います。

そういった空気を活かしながら、アニメファンに対し、地域の重要なポジションにある成田さんがしっかりと手を差し伸べてくれた。町自体が仕掛けをつくって、結果としてそういった空気が出来、そしてキーマンが手を差し伸べる、どの要素が欠けても成立しなかったのではないかなと思います。

(山村高淑) ありがとうございます。私もまさに島田さんがおっしゃるとおりだと思います。私も現場で、地元の方々が温かくアニメファンの皆さんを迎え入れ、交流が進んでいく様子を目の当たりにして、感銘を受けたことを今でも鮮明に覚えています。先ほど見せて頂いたように、ストラップを町内で販売された時なども、いろいろなお店で売のですが、1店舗には2種類しか置かないというルールを商工会さんが作られましたよね。全種類揃えたい人は複数店舗をかなりの距離歩かないと揃えられない。そういう中で、いろいろな店主さん、事業主さんとアニメファンの方が顔見知りになっていく。そんなプロセスを目の当たりにて、私も「何かいいなあ、こういうの」としみじみ思いました。経済効果とか入込客

数とか、そういった指標とはまた違った、〈温かさの指標〉みたいな部分。観光ってこういうところでも計らなきゃいけないんだということを、私は埼玉で教えて頂きました。

(島田邦弘) 本当におっしゃるとおりですね。私も今回自分のプロフィールに、「公私を問わず県内各地のアニメのまちおこし活動にコミット」と書きましたが、アニメなどコンテンツ関連の事業には公私を問わず関わりたくなるんですよね。数字だけじゃなくて、アニメがつかないでくれた人のご縁や気持ちというのが確実にあるんです。きっと安藤さんもそんな思いでお取組みをされていると思うのですが、やっぱりコンテンツには力がありますよね。そうしたことに携わることができた我々は、ある意味すごいラッキーなんだろうなと。

(山村高淑) 安藤さん、如何でしょうか。安藤さんからお話しいただいた事例も、老若男女問わず人と人がつながっていきながら、バラエティーショーという舞台、大きなうねりになっていった例ですね。バラエティーショーも私は現場で何度も拝見して、まさに胸を打たれました。そんなバラエティーショーのお取組みの中で、今までつながっていなかった人をつなげるうえでは、いろいろとご苦労等もあったかと思うのですが、そのあたりは如何でしたか？

(安藤彰紀) 逆に言うと、そういった普通の人生では交わらない方々が交わることで化学変化を起こそう、というところがバラエティーショーでの私の狙いでもあったので、実はそうした点については、あまり苦労はありませんでした。携わって下さった皆さんが、自発的にそれぞれの関係性を築いていって下さったんですね。この点は非常に良かったと思います。今年(2020年)の2月に、コロナのこともあって、一応演劇の方は一区切りしたのですが、その打ち上げの際に、何年もバラエティーショーに携わってきたメンバーの中の二人が、「結婚します!」と公表して大団円で終わったということがありました。何だか『ドラクエ』みたいな話なんです(笑)。いずれにしても、皆さんそれぞれが楽しんで活動に参画頂くこと、これはバラエティーショーの立ち上げ当初から大事にしてきた点ですね。皆さんが活動の仲間に入って下さる時に、私からお願いしたことは、「義務感では続かないので、皆さんがワクワクする状況でこの活動に携わっていただきたい。携わり方の濃淡というのは、それぞれの自由ですよ」ということでした。このことをずっと言い続けてきたことが功を奏したのかなと(笑)。

(山村高淑) 〈ワクワクする状況〉、重要なキーワードですね。島田さんのご講演には〈遊び心〉というキーワードがありましたし、安藤さんのご講演でも〈エンターテインメント〉の重要性についての指摘がありました。今安藤さんがおっしゃったとおり、各々が好きな形で、楽しく関わる事が出来る仕組みをどう作っていくのか、という点。このあたりが実は本日のお二方のご講演に共通する論点だったのではないかと思います。

おおつちバラエティショー、私が初めて拝見しに大槌町に伺った時に衝撃を受けたのは、演劇部分だけではなくて、例えば、マドロス舞踏とか、主婦の皆さんのフラダンスとか、とにかくいろいろな方々が〈我こそは!〉という感じで舞台の上で堂々とパフォーマンスをされて、聴衆の皆さんが大きな拍手を送られている。それがすごくアットホームな空気なんですよね。その時、その感動を安藤さんにお伝えしたんですね。「古き良き昭和のバラエティテレビ番組みたいな演出ですね。『欽ちゃんのドンとやってみよう!』みたいな」と(笑)。そうしたら安藤さんも、「まさにそういう演出方法なんです」と。本当にすごく良い舞台を見せて頂きました。ありがとうございました。

5. まとめ

(山村高淑) それでは、まとめのパワーポイントを投影しながら、まとめに向けて3人で議論をしていきたいと思います。

5-1. 『メディアミックス地域おこし』の可能性——『リアル』な場所と『オンライン』の効果的な組み合わせ

まず、冒頭でお示しました3つの論点についてです(図10)。まず1点目として挙げたのが、『『メディアミックス地域おこし』の可能性』という点です。安藤さんのご講演の中で、まさにいろいろなメディアでコンテンツを展開していく、しかも地域がプロデュースするかたちで展開していく、という事例、モデルを示していただきました。都営地下鉄さんで中吊り広告を掲出する等、地域プロモーションの効果も大きかったと思います。それから〈Vターン〉。VはバラエティショーのV。そういう仕掛けもすごく良いなと思いました。俳優の皆さんとも、その後も交流が続いているということで、とても心温まるお話でした。こうしたメディアミックス地域おこしの可能性と課題について、安藤さんは如何お考えになりますか?

(安藤彰紀) まず可能性についてですが、メディアミックスによって、それ自体が掛け算になる、と言う点ですね。つまり、掛け算は化学変化を起こし、関わる方々のドキドキワクワクにつながったり、あるいは成長につながったりします。

課題はというと、今後はメディアミックスしている項目間の優先順位を付けたほうが良いのかなという点です。今までの5年間の活動ですと、どこまで射程距離としてリーチできるのかなと、いろいろなことを、ある程度実験的に行ってきたという側面がありました。これからは優先順位を付けて、取捨選択してやっていくことが課題になるのかなと思っています。

まとめにかえて～冒頭で示した3つの論点

① 『メディアミックス地域おこし』の可能性

……メディアミックスとリアルな場所のもつ意味とは？

② 『リアルな場所』と『オンライン』の効果的組合せ

……効果的に交流を生み地域のサポーターを増やすには？

③ 『世代』と『地域』を越えたつながりの醸成

……資産としての地域内外の人のつながり

……ノウハウの継承、次世代育成

→ツーリズムの本質とは？

図10 ツーリズムを通じた心の復興に向けた3つの論点

(出所：山村高淑作成)

(山村高淑) ありがとうございます。同じ質問になってしまうのですが、島田さん、埼玉県取り組みの中では、まさに安藤さんがおっしゃるところの〈メディアミックス型の地域振興・観光振興〉といったあたり、どのように可能性をお考えになりますか？

(島田邦弘) すごく難しいテーマだと思うのですが、例えば、先程ご紹介したNHKさん、実はテレビだけではなく、今回本当にいろいろな仕掛けをしてくださいました。首都圏のニュース番組で、一週間ずっと本県のアニメの取り組みに関わる特集をしてくださいましたし、ラジオでも紹介番組を放送してくれました。ホームページでも紹介頂きました。加えて、リアルイベントもやっていただいたんですよ。おそらくそれぞれについて、少しずつ視聴者・参加者層も違うと思うんですね。実際、NHKのプロデューサーの方に何うと、例えば、ラジオですとリスナーの年齢層はぐっと上がるそうで、「今回ラジオを聴いて初めて埼玉がアニメで頑張っていることを知りました。応援したいです」といったお便りもあったとのこと。やはりいろいろなメディアを効率よく組み合わせることで、新たなかたちの観光振興、地域おこし、地域活性化につながる可能性を高めていけるのでは、と今回の取り組みの中で思いました。さらに今回、実際にNHKの番組を拝見していてすごく良いなと感じたのは、単に「埼玉でこれをやってますよ」というだけではなく、実際にアニメを活用して地域を元気にしようと頑張っている人だったり、アニメが好きで地域を訪れたファンの人の活動だったり、〈人〉にフォーカスしてうまく番組を作ってくれていた点ですね。こうした形で、単

に作品に絡んだ取り組みの紹介だけでなく、作品をキーにしつつ、頑張っている人達が大勢いるんだ、ということが広く伝わっていけば良いな、そんな感想を持ちました。

(山村高淑) ありがとうございます。まさに、いろいろなメディアを通して、それぞれ異なるマーケットにうまくリーチしていく、そしてそうしたことを、顔が見えるかたちで展開していく。そういう非常に重要な示唆を頂いたように思います。埼玉県さんも大槌町さんも、それを丁寧に実践されているように感じました。

ちょうど今、聴講されている方から1点、島田さん宛に質問が届きました。「観光についての説明のところで、地域にとっての光というお話がありました。そのあたりもう一度お聞かせ頂けませんか。素晴らしい認識だと思います」というご質問です。島田さん、如何でしょう。

(島田邦弘) ありがとうございます。観光という言葉は、もともと中国の古典である『易経』という書、易、まさに占いを扱った本なのですが、その中にある「国の光を観る」というくだりから生まれた言葉なんですね。光というのはまさに地域の魅力だったり、資源だったり。それをしっかりと見つめて光を当てて、どんどん人目に付くようにする。「うちの地域ってすごいいいでしょう、そんなようなことを表した言葉が観光だというふうに私は教えてもらいました。

(山村高淑) ありがとうございます。埼玉県さんのお取り組みの中で、「地域の光」という言葉を示していただくと、やっぱり説得力を持つなとあらためて感じますね。

加えて、3つの論点の2点目、『リアル』な場所と『オンライン』の効果的な組み合わせ」という点についても、まさに先程、安藤さん、島田さんがお答えになられたような、いろいろなメディア、いろいろなアクセスチャンネルというものを通して、さまざまなマーケットにリーチできるような仕組みを作っていく。このあたりが1つの答えになるのかなと思います。

5-2. 『世代』と『地域』を越えたつながりの醸成

(山村高淑) さて、3点目の『『世代』と『地域』を越えたつながりの醸成』というところ、ここがやはり今日のお二方のご発表の肝の部分かと思います。

安藤さんの大槌町の事例では、地域内での世代を超えたつながり、そして地域の中と外とのつながり——社会関係資本と言ってしまうとちょっと硬くなってしまうですが——、そういういった多様なつながりが地域をサポートするかたちで形成されていました。

島田さんの埼玉県の例で言うと、まさにアニ玉祭という1つのイベントを通して、ノウハウがどんどん蓄積されていき、若い世代、例えば県庁の若手職員の皆さんが本当に成長されている。私も毎年現場を拝見していて、皆さんの成長に本当に感銘を受けています。

このあたり、次世代の地域を担う人材の育成ですとか、ノウハウの継承といった点について、現場でどのように取り組まれているのか、あるいは心がけられているのか、お伺いできればと思います。まずは島田さんの方から如何でしょうか。

（島田邦弘） ありがとうございます。実は、観光課に配属になった職員が、仕事でアニメに少しでも絡むことになった場合は、本人が好むと好まざるにかかわらず、いきなり私のミニセミナーを1時間ほど聞かせます。

（山村高淑） 強制ですか（笑）？

（島田邦弘） はい、強制です（笑）。その際、「アニメが好き」と答えた職員には、ちょっとプラスで特別講義があるんですけど。「アニメ嫌い」と答えても、「うん分かった、じゃ聞いて」と無理やり教え込みます（笑）。その時に言うのが、「アニメは単に娯楽じゃないんだよ。アニメは人をつなぐ絆なんだから」。先ほど冒頭で言ったような話から、なぜ埼玉県がアニメに関わるようになったのか、そこをところをまずじっくり教えます。その上で、もしもアニメが好きな職員だったら、どうすればファンの皆さんが喜んでくれるのか、アニメの舞台地を訪れてくれるのか、それを考えようよ、と。そして、それを考えてくれるんだったら基本は何をやってもいいよ、と。僕の仕事は君たちが暴走した時に謝りに行くことだからと、ある程度は若手に任せます。それが必要最低限の人材育成ですかね……アニメに関して言えば。

（山村高淑） ありがとうございます。本当に若手の皆さんが嬉々として、もちろんお仕事ですから大変なご苦労も十分存じ上げているのですが、本当に生き生きと現場で動かれてるな、と拝見していて私も感じます。まさにそういう裏があったんですね（笑）。ありがとうございます。

安藤さん、いかがでしょうか。いろいろな世代の方々とのつながりですとか、次の世代を担う方々の育成、このあたり、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

（安藤彰紀） 私は演劇の実例の方で申し上げますね。バラエティショーを5年間やったのですが、私も関わった皆さんにいろいろな経験をしていただくように心がけました。例えば、大槌町だけでなく、盛岡市や長野県軽井沢で公演をしたり。あるいは、タレントのはなわさんをはじめ、著名人、プロの俳優さん、そういった方々とアマチュアの方々にコラボレーションをしていただく。アマチュアの方々——要するに大槌町の若い世代が中心なんですけれども——にいろいろと経験をしていただくわけです。そうした中で、自分たちでもこういったイベントを開催するには、例えば演劇を公演するには、どうすれば良いか、といったあたりを考えるようになっていってもら。具体的には、最初はセリフもなかった人が主

役をやる、あるいは最初は小道具を作る人が準主役級を演劇としてやれるようになる。あるいは舞台監督になる。そういったものをこの5年間である程度やれたかなと思います。次世代の皆さんが次は自分たちでやれるように、いろいろな視野を持っていただく機会を提供するよう、事務局としては注意してきました。

(山村高淑) ありがとうございます。バラエティーショーに関わる皆さんが、それぞれ責任を持って携わることのできる役割を、事務局としてしっかり用意されたということですよ。そういう舞台裏での努力があったということですね。ありがとうございます。

最後にもう1つ、聴講されている方から今、質問がありました。これはお二方に対するご質問かと思います。簡単にお答えいただければ幸いです。「オンラインツーリズムの面白さを高める方法は何でしょうか？」如何でしょう。安藤さんからお答えいただいてもよろしいですか。

(安藤彰紀) そうですね。我々としてはこれからです。これまでリアルな現場でやって参りましたので、今年からオンラインにも挑戦して、リアルな現場とオンラインの併用を行っていくことを目標にしたいです。

(山村高淑) ありがとうございます。島田さん、如何でしょうか。

(島田邦弘) 今年初めてオンラインのイベントを手探りで行ったのですが、なるべく面白いコンテンツを入れたいと考えました。例えば、今年だったらeスポーツとVTuberはどうしても入れたかったんです。それから、旬のネタで、なおかつオンラインに親和性が高いものを取り上げることを心掛けました。例えば、所沢市に〈ところざわサクラタウン〉というポップカルチャーの発信拠点が新しくできたのですが、そういったところを取り上げました。今後は、できれば、オンラインで情報を得ておくと、その分、リアルイベントでもちょっと楽しみがプラスになるよ、といった、お得な感じの仕掛けをオンライン上に取り入れていったら、リアルもオンラインも双方が魅力的になっていくんじゃないかなと考えています。

(山村高淑) ありがとうございます。オンラインとオフラインのうまい補完関係をデザインする、という意味ですよ。

(島田邦弘) そうですね。まさに〈補完計画〉ですね(笑)。

(山村高淑) 〈オンライン・オフライン補完計画〉。見事な言葉で締めていただきました。一部の人にしか分からない表現かもしれませんが(笑)、ありがとうございます。

5-3. 「聖地のトライアングルモデル」の再考

(山村高淑) それでは最後に、本日のまとめを図にしてみましたのでこちらをご覧ください(図11)。この図は、島田さん、安藤さん、私が理事としてご一緒にいる〈間野山研究会〉で2020年の春から、コロナ後のコンテンツツーリズムはどうあるべきか、という点について議論を続ける中で生まれてきたモデルです。コンテンツを介して、地域の皆さん、それからクリエイターの皆さん(プロの皆さんのみならず、新しい価値だとか物語を生み出す人達)、それから地域外のファンですとかサポーターの皆さん、この三者がつながっていく。これが〈コンテンツツーリズム〉です。その際、三者はどういうふうに良好な関係を相互に作っていけるのか。そしてコロナ禍、コロナ後においては、地域のシステム、地域の暮らしや産業を、こうした関係者がどのようにサポートしていけるのか、今まで以上に重要な論点になるのではないかと。そういう仕組みを作っていくことが、これからの日本のツーリズムの重要な論点になるのではないかと。このモデルには、そういう思いが込められています。

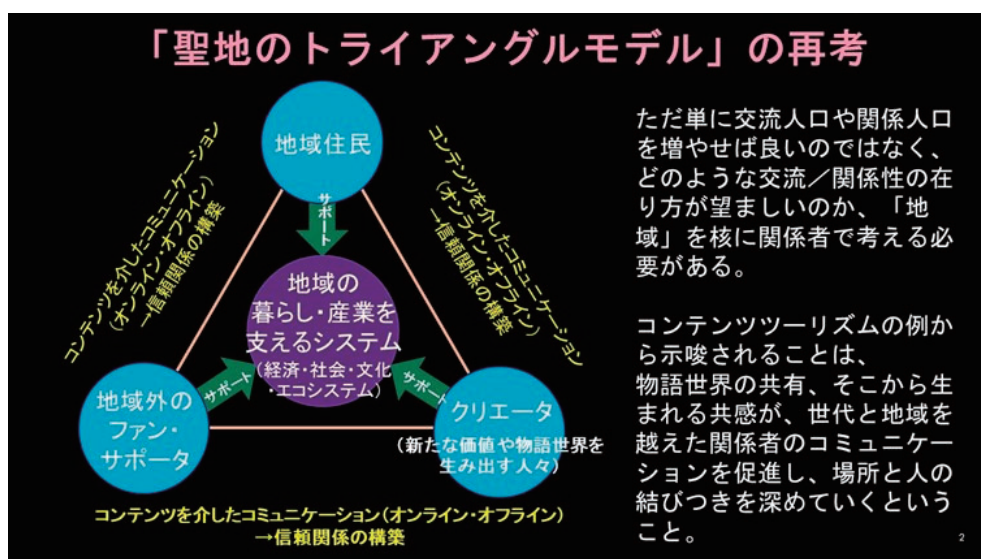


図11 「聖地のトライアングルモデル」の再考

(出所：山村(2020)を基に山村高淑作成)

今日のお二方のお話にもありましたけれども、交流人口や関係人口を増やすという点も非常に重要ですし、観光収入を上げるという点もとても重要な課題です。ですが、決してそれだけではない。どういう交流のあり方が望ましいのか？ どういう関係性が望ましいのか？ 今日の例では、〈心が温まるつながり方〉の例をいくつもお示し頂きました。そういった関係性、交流のあり方というものを、地域を核にどういうふうに関係者で考えていったらいいんだろうか？ これから地域は、このあたりの課題をしっかりと考えていく必要があ

るのではないか。

いわゆる〈コンテンツツーリズム〉(物語やコンテンツが誘発するツーリズム)には、1つの大きな可能性がある。それは、関係者間で物語世界を共有できる点。そしてそうした物語世界を共通言語として、世代と地域を越えてコミュニケーションが促進される点。コンテンツツーリズムは他のツーリズム様式と比して、こうしたポテンシャルが高い。まさに、アニメ祭も、おおつちバラエティショーも、そうして多様なつながりが広がっていったわけです。コンテンツを共通言語としつつ、コミュニケーションを促進し、場所と人の結びつきをどう深めていくことが出来るのか。先程、島田さんがおっしゃられたオンラインとオフラインの補完計画ですね。このあたりが今後の課題として浮かび上がってきたように思います。

それでは最後になりましたが、島田さん、安藤さんから一言ずつ、聴講されている皆さんにお言葉をいただけませんか。

(島田邦弘) まずは最後までご視聴いただいた皆さん、本当にありがとうございました。この場で皆さんにお話をさせて頂きながら、また新しいアイデアが浮かんで参りました。また、これまでの取り組みに関しては、「ああすれば良かったな」という反省の念もあったりするのですが、今日議論をさせて頂く中で、「でも、とにかく頑張ってみようかな」とそんな気持ちになりました。本当に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(山村高淑) ありがとうございました。安藤さん、如何でしょうか。

(安藤彰紀) 本日は本当にありがとうございました。大槌町のこと、おおつちバラエティショーのことを皆さんに知って頂き、本当に嬉しく思います。

実は、大槌町を舞台にしたアニメーション映画『岬のマヨイガ』が2021年に公開となりますⁱⁱ⁾。同作品には私も、仕事として協力させて頂いております。また、大槌町としても来年に向けてオリジナルコンテンツの制作に一層力を入れていきたいと思っております。もしバラエティショーのことに関心をお持ちいただけたようでしたら、是非、ご質問ご意見等をお寄せいただければ幸いです。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(山村高淑) 『岬のマヨイガ』、皆様ぜひご覧頂ければと思います。島田さん、安藤さん、ありがとうございました。

それでは最後に、本日ご登壇頂きました島田様、安藤様に改めて感謝の拍手をお送りできればと思います。オンラインですので皆様は心の中で拍手していただければと思います。どうもありがとうございました。

今日は国内外からアクセスをいただいております。多くの皆様、ご視聴いただきましてありがとうございました。それではこれにて本日終了したいと思います。島田様、安藤様、ありがとうございました。ご聴講頂きました皆様、ありがとうございました。失礼致します。

引用文献：

山村高淑

2020 「趣旨説明資料」，間野山研究学会第4回研究会「新型コロナ問題と『聖地』の現状：各地からの報告」，2020年5月2日，オンライン開催。

2021 「序章——アニメツーツーリズムからコンテンツツーツーリズムへ」，山村高淑・フィリップシートン編『コンテンツツーツーリズム——メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』北海道大学出版会，1-28。

ⁱ 大槌町ホームページ「復興レポート」：

<https://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/374250.html>（2021年2月4日取得）

ⁱⁱ 『岬のマヨイガ』公式ホームページ：<https://misakinomayoiga.com/>（2021年2月4日取得）

第5回 ボールパークで実現する新たなコミュニティの創造

——ファイターズの挑戦

佐藤 拓

(株)ファイターズ スポーツ&エンターテインメント 事業統括本部コーポレート・ビジネス部
部長

石黒 侑介

観光学高等研究センター 准教授

1. はじめに

(石黒侑介) 本日は北海道日本ハムファイターズがボールパークの事業会社として設立したファイターズ スポーツ&エンターテインメントから、佐藤様をお招きしました。今日は見ていただくと分かる通り、よく記者会見で登場するファイターズの本社の会議室をお借りしています。

今日は、「観光の現場」をテーマとする公開講座の最終回として、佐藤様からプロ野球、そしてエンターテインメントの現場、さらには北海道日本ハムファイターズが取り組んでいるスポーツ・コミュニティという構想をご紹介いただきながら、2023 年に開業を控えたボールパークの可能性について議論を進めていきたいと思います。

では、まずは自己紹介をお願い申し上げます。

(佐藤拓) ファイターズの佐藤です。私は北海道の出身でして、空知郡の奈井江町に生まれました。札幌と旭川のちょうど中間ぐらいにある、人口が5,000 人台の町です。

現在、41 歳です。高校は隣町の砂川市にある砂川北高校に進学しました。現在は砂川北高校と砂川南高校が合併して砂川高校となっています。学生時代は野球部に所属していました。甲子園には出ていませんが、卒業後、東京の中央大学に野球で進学することになりました。今年は、母校の中央大学からファイターズにドラフト 2 位で選手が入団しますが、私はプロ野球選手になるような実力はありませんでした。そこで、大学を卒業後、北海道に戻ろうか、それとも東京に残ろうかと考えた中で、やはり自分のやってきた野球に携わる仕事をしてみたいという思いがあり、2002 年に日本ハム球団株式会社という、今のファイターズの前身にあたる会社に入社しました。

実は2002年というのは、球団であるファイターズにとっても、親会社の日本ハムにとっても非常に大変な年でした。当時、社会を大きく揺るがす牛肉偽装事件という事件が起こったのです。その結果、親会社が大変な状況に陥り、子会社であるファイターズを維持できるのかというような議論が出ました。幸い、何とかそこを持ちこたえて、立ち直って、2004年に北海道に来ることになりました。

球団の移転は2004年ですが、実際は2003年のオフから私自身は北海道に戻ってきました。そして2004年、北海道日本ハムファイターズという会社名とともに、北海道初のプロ野球チームが誕生しました。丁度、元ファイターズの新庄剛志さんが今、プロ野球への復帰を目指してトライアウトを受けるという話題でテレビを盛り上げてくれていますが、ちょうど球団が北海道に移転した2004年シーズンは、新庄選手を中心に個性的な選手が活躍して盛り上げてくれました。そして移転の3年後の2006年にリーグ優勝、日本一まで上り詰めました。現在まで、リーグ優勝5回、日本一2回を達成しています。

個人的には、これまでいわゆるスポーツ・ビジネスといわれるような分野に携わってきました。スポンサーシップのセールスやグッズの企画、製作、販売などのマーチャンダイジング、さらにはイベントのプロデュース、選手のマネジメントなど、球団のビジネスに関することは一通り経験をしてきました。また、2012年と2013年の2年間、小樽商科大学の大学院でビジネススクールにも通いました。

私が入社してから実は3回ほど会社名が変わっています。現在は株式会社ファイターズスポーツ&エンターテインメントという事業会社に所属をしています。

(石黒侑介) 佐藤様とはここ数年、共同研究などでいろいろとお話をさせていただきましたが、個人的には、まさに今のファイターズにいないといけない人材だと思いますし、佐藤様がいるから今の球団の取り組みが成り立つのだと感じる場面が数多くあります。

例えば、スポーツ・ビジネスに関わる上でも野球のプレーヤーとしての経験があるのと無いのでは大きく違うと思います。六大学リーグの中央大学に進学されたのに、プロ野球選手になるという選択はされなかったのですか。

(佐藤拓) 高校時代も北海道大会には何回か出ましたが、なかなか甲子園には行けませんでした。大学にも野球で進みましたが、プロ野球選手になるということは1回も考えたことがありませんでした。大学の1年先輩には、現在、読売ジャイアンツの2軍監督をしている阿部慎之助さんがいましたし、周囲にすごい選手が数多くいたので、自分が選手になるということは考えませんでした。

(石黒侑介) 北海道のご出身で、東京の大学を卒業して意を決して東京の企業に務めたにもかかわらず、現在は、北海道で仕事をされています。当時からいずれは北海道に戻りたいと考えていたのでしょうか。あるいは北海道への移転という話があって日本ハム球団に入

られたのでしょうか。

(佐藤拓) 実際は2002年の3月末ぐらいに、最初に北海道への移転という報道が新聞に出ました。入社する直前で私自身、びっくりした記憶があります。ですので、本当に偶然です。

先ほど申し上げたとおり、入社した2002年という年は、非常に大変な1年でしたので、北海道への移転自体が難しいのではないかと言われたこともありました。何とかそこを乗り越えて北海道に来られたというのが正直な感想です。

2. 新型コロナウイルス感染症の影響

(石黒侑介) 2002年は親会社による問題に直面してそれを乗り越えて北海道移転を実現されました。問題の性格が大きく異なりますが、球団、あるいは企業の危機という意味では、今年の新型コロナウイルス感染症の影響も甚大だったと考えています。2020年シーズンを振り返ってみて、どのように感じられていますか。

(佐藤拓) 初めてのことでしたので私自身も苦労しましたが、私よりも現場のスタッフが本当に大変だったと感じています。チームという意味では、スタッフはもちろんのこと、選手、監督、コーチが感染するとプロ野球界全体に影響を与えます。その意味では非常に緊張感がありまして、シーズンが始まってからは、移動が多い北海道の球団として、他の球団以上の難しさがありました。

特に選手は遠征先に行っても外出ができないというルールを作っていましたので、ストレスが大きかったと思います。

(石黒侑介) いろいろな困難を乗り越えて無観客で開幕を迎えました。具体的にはどのような影響があったのでしょうか。

(佐藤拓) やはり、グッズを買っていただく、スポンサーになっていただいて広告を出していただくことで収益をあげていますので、観客、ファンの存在がこのビジネスには欠かせません。さらに、テレビ局やラジオ局に放映権を売るというビジネスもありますが、その中でもチケットを買って球場に足を運んでいただくというのがこのビジネスの根幹です。その根幹、前提が揺らぐというのが今年のプロ野球でした。その意味では、私自身もこのビジネスの本質のようなものを改めて実感しました。

(石黒侑介) 観光というこの公開講座のキーワードとプロ野球が直接結びつかないとい

う方も多いかも知れませんが、ファンが球場に足を運ぶという行為は観光の一形態としてとらえることができます。また近年、日本の観光を支えてきたインバウンド観光という点では、ファイターズの試合には訪日台湾人旅行者が数多く観戦に訪れます。

（佐藤拓） 北海道大学観光学高等研究センターとの連携協定とそれに基づく共同研究で、少しずつ札幌を訪れる台湾人旅行者のドームへの誘客についてノウハウを蓄積しつつある矢先の出来事でした。共同研究を始めた当初は陽岱鋼という選手がファイターズに在籍しており、その後、読売ジャイアンツに移籍しましたが、現在は、王柏融という新しい台湾人選手が在籍しています。球団としても台湾へのプロモーションを強化していたところでした。

これまでの蓄積が無になるわけではありませんし、台湾は新型コロナウイルス感染症の押さえ込みに成功している数少ない国の 1 つですので、球団として台湾からの誘客に力を入れたいという方針は変わりません。ボールパークにも台湾からの旅行者を含め、多くの訪日外国人旅行者に足を運んでいただきたいと思います。

（石黒侑介） 新型コロナウイルス感染症の影響が私たちの生活に影響を及ぼし始めてそろそろ 1 年が経ちます。2021 年はワクチンなどによって事態が好転するという見方もありますが、2021 年シーズンの展望はいかがでしょうか。

（佐藤拓） 残念ながら 2021 年シーズンに関してもやはり新型コロナウイルス感染症の影響を受けるだろうと考えています。我々としては 2020 年シーズンの経験を踏まえて、無観客での開幕というシナリオと状況が好転するシナリオの 2 つを想定して昨秋から準備をしています。年明けからの数週間を見る限り前者がより現実的かなという思いが増してきており、個人的にはもう 1 年、我慢のシーズンを過ごしながら、2022 年シーズンについては、2019 年の形に戻すべく準備を進めたいと考えています。

（石黒侑介） そういった中期的な計画の中で、2023 年にはいよいよボールパークのオープンを迎えます。企業としてもかなり大きな設備投資だと思いますので、この時期に新型コロナウイルス感染症の影響を受けるというのは、痛手だったのではないのでしょうか。

（佐藤拓） スタジアムについては、札幌ドームが 4 万席強なのに対してボールパークは 3 万 5,000 席と約 1 万席減らしていますので、1 人ひとりのスペースがかなり広がります。その点は感染対策として有効だと考えています。細かい感染対策など、ソフトの面では今後検討すべきことはあると思いますが、幸い、計画自体は 2023 年の話ですので、現時点で大きな計画変更はありません。

また、北広島市の建設地では今年の 5 月から工事が始まっています。現場では新型コロ

ナウイルス感染症の影響がないとは思いませんが、大変な状況下にもかかわらず現場の作業員の方のご尽力で工事は予定どおり進んでいます。

3. プロ野球チームにとっての地域とは

（石黒侑介） ファイトーズは北海道に移転するにあたって、本拠地、地域との関係性を大きく見直されたと思います。佐藤様が北海道出身ということもあり、まさに球団と地域との関係を構築する役割、あるいはその結節点そのものを佐藤様が担っていると思います。

（佐藤拓） 2004年に北海道に来たとき、北海道は私にとって故郷ではありましたが、もちろん他の社員にとっては異なりました。地域に対する考え、北海道の位置づけも三者三様だったと思います。

（石黒侑介） 北海道出身の社員の方は他にもいたのでしょうか。

（佐藤拓） 今は北海道出身の社員もかなり増えてきましたが、東京から北海道に移転した際は私を含め2人しかいませんでした。当時のトレイ・ヒルマン監督の通訳をやっていた社員が北海道の出身で、当時、「北海道に移転したらこれをやろう」と2人で盛り上がったのを覚えています。ただ、中には北海道に行けない、あるいは行きたくないという社員もいました。

（石黒侑介） やはり、共用とは言え首都・東京の中心にある東京ドームのような都市型の球場を本拠地としていた時とは、地域との関係性を変える必要があったのだと思います。

（佐藤拓） 北海道に我々が来たときは、現ソフトバンク・ホークスの大阪から福岡への移転についてかなり研究しました。今では球界を代表する常勝チームになりましたが、福岡に移転してから優勝するまでに11年かかりました。こうした点を踏まえて、我々も10年ぐらいは覚悟して取り組まないと、北海道の球団として認識されないだろうと話していた記憶があります。

（石黒侑介） 2004年に文字どおり北海道の球団として「北海道日本ハムファイターズ」が誕生します。当時、札幌駅前で蒼々たる顔ぶれの監督・選手が市民と握手しているシーンがテレビなどでも放送されました。チーム移転の象徴であり、地域との新しい関係性を創造していく起点だったと思います。

(佐藤拓) 当初から順風満帆ではありませんでした。実はあの札幌駅での企画は、私と北海道出身の通訳にもう 1 人を加えた 3 人の社員で対応しており、最初は市民のみなさんが押し掛けてパニックになったらどうしようと心配していました。ところがイベントが始まってファンは 10 人くらいしか並んでいませんでした。そこで「これはまずい」と言って JR の社員の方にも並んでいただき、何とか 80 人くらいの列に仕立てた思い出があります。今だから言えるエピソードですが、今でもヒルマン監督には言えません。

(石黒侑介) 監督個人の知名度という訳ではなくてやはり地域との関係性を 1 から構築することの難しさだと思います。今、栗山英樹監督が札幌駅で同じ企画をやったら大変なパニックになると思います。

(佐藤拓) 今でこそ北海道出身の選手も増えてきましたが、当時は 1 人もいませんでした。球団の移転が決まった後も北海道に自宅を構えた選手は少なかったです。選手の多くは、長い遠征に来ているような感覚だったと思います。

(石黒侑介) 選手編成や地域との関係性が球団の経営的側面に与える影響は極めて大きいと思います。一般の企業は今でこそ地域貢献事業に取り組むことが一般的になってきましたが、プロスポーツ・チームの場合、そもそも地域貢献なのかマーケティング事業なのか境界が曖昧です。選手の能力が同じであっても、マーケティングという点では北海道出身の選手とそうではない選手で価値や意味が異なってきますし、それが地域密着、地域貢献として受け止められることもあります。また、北海道外の出身でも田中賢介さんのように地域に根付いた活動をされる方もいます。

(佐藤拓) 球団の移転と言うよりは、その後に、家族が移り住んだり、北海道内に家を持ち始める選手が増えてきたことが大きかったと思います。当時在籍していた稲葉篤紀さんや建山義紀さんが北海道に生活の拠点を移し始めた 2009 年、2010 年あたりから、選手の間にも北海道の球団としての自覚、自負みたいなものが出てきたと思います。

またチームの編成という意味では、ドラフト指名でも北海道出身の選手を指名するということが増えていきましたし、ファームのある千葉県鎌ケ谷市の合宿所に住んでいる若手の選手も「1 軍にあがると北海道に住む」ということを意識するようになります。

(石黒侑介) やや冷めた見方をすると、地域貢献がビジネスを営む上で最低限の要件となっている今日において、ある種、パフォーマンスとして「地域密着」を掲げることもできたと思います。ところが、私もファイターズの監督や選手の方にお会いする機会が増えましたが、栗山監督がカブトムシを探しに栗山町の山に行ったとか、稲葉篤紀さんの行きつけのレストランが芦別にあったりなど、本当に地域に根付いているというエピソードには事欠き

ません。

(佐藤拓) 今でこそ「地域密着」という言葉も市民権を得ていますが、我々が北海道に移転してきた当初は馴染みがありませんでした。

(石黒侑介) スポーツと地域密着と言えば、どちらかと言うとプロ野球よりもＪリーグが思い浮かびます。日本のプロスポーツという点では野球の方が圧倒的に歴史が長く、規模も大きい訳ですが、北海道日本ハムファイターズとしての地域との関係性を考える上で、1993年に開幕したＪリーグの影響もあったでしょうか。

(佐藤拓) もちろん参考にした部分はあります。そもそもＪリーグは企業スポーツとして発展してきたプロ野球をある主の反面教師として地域との関係性を再考してきた部分があると思います。その意味では、Ｊリーグの取り組みを謙虚に学んだ部分があります。

東京に本拠地を置いていた時代は、競合が非常に多くありました。関東圏にはセ・リーグ、パ・リーグで複数のチームがありますし、Ｊリーグの人気チームも総じて関東圏に集中しています。また、東京ディズニーリゾートや動物園など、エンターテインメント施設にも事欠きません。その中でファイターズとしての独自性を発揮するのは簡単ではありませんでした。舞台を変える、地域を変えるという環境変化を通じて、地域との関係性を再考できたことが大きかったと社員としても考えています。

(石黒侑介) 佐藤様は、「エンターテインメント」という言葉を使いましたが、一般的にはプロ野球というのはプロスポーツではあってもエンターテインメントとしてとらえられることはまだまだ多くないと思います。つまり競合は、プロ野球の他球団や、あるいは近隣を含めた「地元」を拠点とするサッカーやバスケットボールなどであって、なかなか東京ディズニーリゾートを競合とは想定しないのではないのでしょうか。その点、エンターテインメントだと言い切ってしまう部分に、北海道日本ハムファイターズとしての「地域観」のようなものが凝縮されていると感じます。

さらに、現在の所属先である(株)ファイターズ スポーツ&エンターテインメントという事業会社の社名にもやはり「エンターテインメント」が入っています。

(佐藤拓) 定義は簡単ではありませんが、スポーツも広義のエンターテインメントの中に入っていると感じています。日本では、スポーツは「体育」として教育の一部としてとらえられてきた歴史がありますので、娯楽としてのエンターテインメントというイメージはどちらかと言えば希薄だったと思います。ただ、地域と球団の関係性を整理する中で、私はその娯楽性こそ鍵だと考えるようになりました。

4. ボールパーク構想に至るまで

(石黒侑介) ファイトーズのスポーツや地域に対する独自の考え方を体現したのが、2023年に完成するボールパークだと思います。私も共同研究の中で少し議論に参加させていただきましたが、札幌ドームに代わる新球場という構想は、いつ頃から出ていたのでしょうか。

(佐藤拓) メディアでは様々報道されていますが、実は北海道に2004年に来てから比較的早い段階で、球団経営におけるハードとソフトの一体化については議論が出ていました。プロ野球の他の球団に目を向けても、福岡、仙台、広島、千葉など、直接保有か指定管理制度かといった制度上の差はありますが、球団がスタジアムの経営を行うというのが珍しいことではなくなりつつありました。

また、アメリカのメジャー・リーグを研究する中で、プロスポーツはハードとソフトを一体的に運営する方が、ビジネスとしてもチャンスが大きいという結論を得ました。そもそも、東京ドームを本拠地としていた時代の思い、反省というのを踏まえた考え方という側面もあります。

(石黒侑介) メジャー・リーグを見ていたという点が、ファイトーズの特徴だと思います。先ほどのエンターテインメントの定義を巡る議論にもつながりますが、従来の日本のプロスポーツという枠を超えて新しいスポーツを創造しようという意思、ビジョンがあると感じます。ただし、アメリカから学ぶと言っても、今でこそファイトーズ含め有望な選手が海を渡ることもしなくなりつつありますが、球団運営、球場運営となると中々難しいと思います。

(佐藤拓) 実は、学生時代にアメリカに留学していた社員を含めて、アメリカと縁のある社員が多く在籍しています。またヒルマン監督がアメリカのマイナーリーグの地方球団での経験が豊富だったことも、私たちにとっては幸運でした。監督でありながら、我々もプロスポーツと地域密着のあり方について、ヒルマン監督にいろいろと教えてもらいました。そういう意味では、ヒルマン監督がキーパーソンだったかもしれません。ヒルマン監督は今でも球団と親交がありますし、一昨年も札幌に来てくれました。

サイン会での失敗談を先ほどお話ししましたが、北海道移転に伴って、良い事も悪いこともヒルマン監督と一緒に経験できたことが、我々にとっては非常に大きかったと思います。

(石黒侑介) ビジネス上のメリットに加えて、野球をする環境という点ではどうでしょうか。ボールパーク構想が浮上した際、選手がどのような反応だったか覚えていますか。

(佐藤拓) それまでもプレー環境をよくしたいというのは、毎年、選手会の役員からも要望が出ていました。ただし、球団としても直ぐに対応できる部分と出来ない部分があります。選手は入れ替わっていきますが、その要望だけは継続的に申し入れがあった部分ですので、我々としても中期的に取り組まなければならない課題として認識が高まってきました。

(石黒侑介) ドラフトや選手の入団交渉の場で「将来はボールパークができるんだし、ここでプレーしたくないですか」というような話も出るのでしょうか。

(佐藤拓) もちろん入ってくる選手たちもそれを分かっていますし、去年は北広島市にご協力をいただき、北広島市役所で入団発表のセレモニーをやりましたので「自分もそこに立ちたい」と思っているのではないのでしょうか。また、選手と一緒に建設地を視察に行きましたし、選手の中でも感情が盛り上がっていることは事実だと思います。

5. ボールパークの新規性

(石黒侑介) 報道にも出ていますし、今日も動画を見ていただきましたが、具体的にボールパークの何が新しいのでしょうか。どのようなところに魅力があるのかについてももう一度ご紹介ください。

(佐藤拓) 私は現在、道内や東京のスポンサーを回っています。その際に今日、お見せした動画を使うことで、改めて北海道の魅力を知っていただき、ボールパークの可能性について話を始めます。

ボールパークはいわゆる「球場」としてとらえられがちですが、実は球場ではなくて、球場、スタジアムを核に、公園、商業施設、ホテルなどを含めた空間です。この複合空間をボールパークと定義しています。

ボールパークには「共同創造空間」と「北海道のシンボルとなる空間」という2つのコンセプトがあります。前者は、ファイターズ単独でこのボールパークを創り上げるというものではなく、自治体、企業、その他の団体、さらには一般の市民のみなさんを含めて、みんなでこの空間を創り上げていくという思いを言語化したものです。また、後者は、北海道に住んでいる方はもちろん、道外、国外から観光で北海道に来る人にとって、北海道のランドマークとしてとらえてもらえるような空間を目指すということを意味しています。

そしてこのコンセプトを実現するために、「次世代ライブエンターテインメント」、「最先端ウェルネスライフ」、「未来型リビングコミュニティ」という3つの重点分野が設定されています。さらに、この重点分野におけるボールパークの具体的な機能が「ショーケース機能」と「観光ハブ機能」です。

「ショーケース機能」とは、文字どおり、北海道の自然、食といった多様な魅力を凝縮して発信する機能をボールパークが担うということの意味します。またいわゆる観光資源だけでなく、道内の企業にとっては社会実験の場、自社の商品を展示したり、販路拡大や商品開発の場として位置づけられる空間にしたいと考えています。

また、「観光ハブ機能」はまさに北海道観光の拠点になるという決意の表れでもあります。札幌駅と新千歳空港の間に位置するという立地性を最大限にいかし、様々なモビリティでボールパークを訪れていただくこと、さらには宿泊や滞在の拠点を目指したいと考えています。ボールパークから北海道観光を始めて、またここに戻ってくるというイメージです。

(石黒侑介) 確かに野球のスタジアムという域を完全に超えている印象です。一方で、人口減少が進み、自治体の財政の展望も決して明るくない中で、地域に投資していく上では効率性も重要かも知れません。

(佐藤拓) もちろん、単に機能を併せ持つだけでなく、異なる機能を組み合わせて最適化、効率化するという視点も入っています。

ボールパークは、一般的なスタジアムとスマートシティのハイブリットと言えらると思っています。まず、スタジアムというのはもちろん非日常空間であり、ファイトーズというプロ野球チームの試合を観戦することを目的に人が集う場所です。札幌ドームという現行のスタジアムですとこれが200万人程度の規模になります。この200万人がスタジアムの周辺で飲食をしたり、場合によっては宿泊することで街を盛り上げます。ただし、この200万人は一過性の人の動きであって居住人口ではありません。

他方で、スマートシティと呼ばれているものは、居住人口、定住人口こそ想定されているものの、交流人口についてはあまり施策の対象に入ってきませんでした。したがって街の外からの人口の流入やそれによる街の盛り上がりというもの一般的には考慮されていません。我々がボールパークで実現したいのは、このハイブリッド型です。

これを「ハブ・サードプレイス」と定義しています。

(石黒侑介) ボールパークのイメージ図を見ても、そうした挑戦的な取り組みが読み取れます。いわゆる野球観戦を目的としたファンだけでなく、周辺住民の日常的な憩い、近隣自治体からの日帰り利用、そして道外、国外からの観光客の訪問・滞在という重層的な利用が想定されています。

(佐藤拓) ボールパーク全体としては、2023年に開業する「フェーズⅠ」、2027年以降に開業する「フェーズⅡ～Ⅳ」があります。「フェーズⅠ」はスタジアムと同じ2023年に開業させる予定です。ホテル、マンション、キャンプ施設のほか、自然公園、親水公園の機能も盛り込む予定です。

スタジアムは約 5 ヘクタールから 6 ヘクタールぐらいありますが、客席数は 1 万席ほど減る予定です（図 1）。それによって一席あたりのスペースに余裕が生まれます。またコンコースやその他のエリアもかなり広くとっており、一方でフィールドまでの距離は近くなります。快適性と臨場感が非常に高いスタジアムだと思います。

「フェーズⅡ～Ⅳ」については、主に駐車場を中心としたエリアです。現状では、3,000 台から 4,000 台規模の駐車場を整備する予定です。さらに、上部に見えるのが JR の線路で、右が新千歳空港方面、左が札幌方面です。「フェーズⅡ～Ⅴ」には、新駅を設置するという話も進めています。2027 年というボールパーク開業から数年が経過したタイミングです。このタイミングでボールパークへのアクセスが劇的に変わるということは、一体の開発が次の段階に進むということだとも思っています。

さらに、北海道全体を見ますと、2030 年にかけて新幹線の沿線や冬季オリンピックの開催なども控えていますので、おそらく 2030 年にはもう 1 つステップを進めることになります。重要なことは 2023 年に全てを同時にオープンするのではなく、まずは 60 点、70 点の開業を着実にいき、段階的に 100 点を目指していくという戦略を採用したことです。成長し続けるボールパークという考え方です。

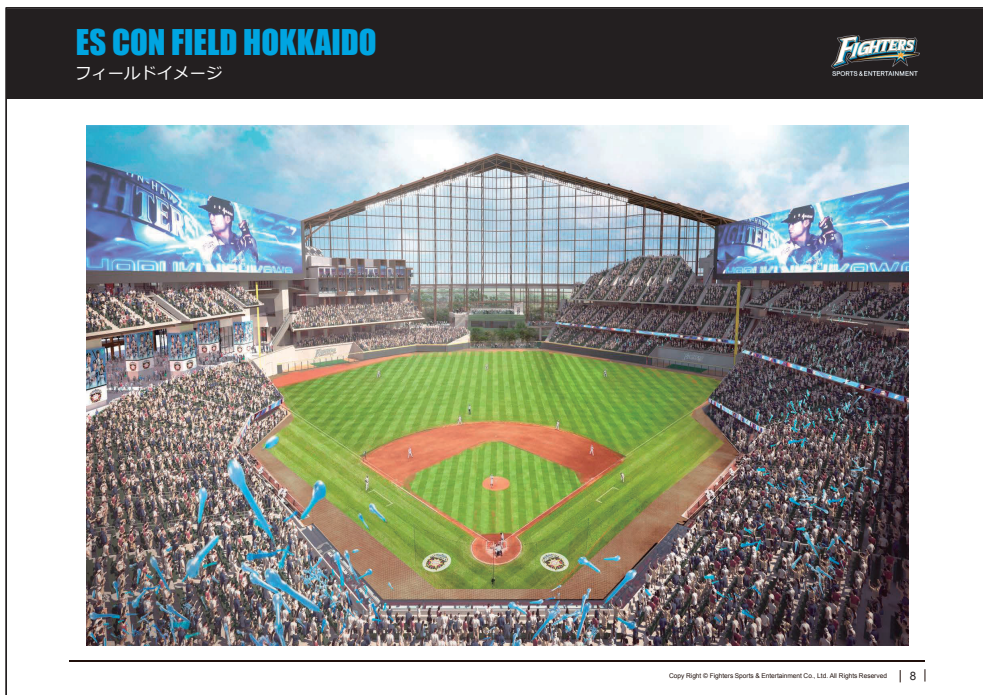


図 1 フィールドイメーシ
（出所：(株)ファイターズ スポーツ&エンターテインメント）

(石黒侑介) 当初はボールパークを都市の中心に持ってくるという構想、アイデアもあったと思います。それと比べると、いわゆる郊外型のボールパークへとどこかで方針、戦略の転換があったのかなと感じました。

(佐藤拓) もちろん集客という点では、都心に建設するに越したことはないと思いますが、結果的に我々としてはそれ以上に、ボールパークとしてのサイズを重視しました。そのサイズが、機能としての拡張性、新規性を生むだろうと考えたからです。「どこにつくるのか」ということについて社会の関心が高いことは分かっていたましたが、我々としては当初から「どこに」ではなく「何をつくるか」で勝負していくつもりでした。その意味では都心型の施設に比べればアクセスなどは劣るかもしれませんが、それを上回る魅力があると思っています。

(石黒侑介) 北海道のシンボルという点では自然との融合も大きなテーマであるように感じます。

(佐藤拓) 図2は球場のセンター側から見た画です。手前が「フェーズI」に当たるエリアで、ここは自然豊かな空間になっていることが分かります。右側に見えるのがレジデンス棟です。自然と滞在空間、エンターテインメント空間が融合した構造にしたいと考えています。

また図3は、最終的なイメージ図です。夢物語のように受け止められるかもしれませんが、開発が進んだその先には、こうした賑わいの空間、人々が行き交い、滞在し、そこにエンターテインメントや観光、交流、そしてビジネスが生まれる空間になると考えています。同時に、周囲には貴重な原生林が広がっていますので、ボールパークも高層にせず、周囲の自然環境に馴染むように設計されています。



図2 スタジアムイメージ
 （出所：(株)ファイトース スポーツ&エンターテイメント）



図3 ボールパーク全体イメージ
(出所：(株)ファイターズ スポーツ&エンターテインメント)

(石黒侑介) 水面があるというのも特徴だと思います。公園という意味ではアウトドアや子供連れの利用を想定しているのでしょうか。

(佐藤拓) 我々は通称「沢エリア」と呼んでいます。水辺があり、親水公園のようなイメージで開発する予定です。水量や水深をどうするか、子供が入れるようにするか、ボートをこげるようにするのかといった細部はこれから詰めていきますが、水辺を設けることは決まっています。また、宿泊機能についても、ホテルだけでなくコンドミニウムやゲストハウス、キャンプなど様々な様態を想定しています。

(石黒侑介) ファイターズの試合がない日も利用してもらう、まさに日常的な利用を指向するという発想だと思います。

(佐藤拓) 試合がない日はもちろん、通年での利用を考えると冬季が課題になります。例えば、全天候型の子供向け遊具のある施設を整備するか、あるいは屋外で雪遊びをしてもらうかなど、様々な可能性を検討しています。

6. ボールパークで実現するスポーツ・コミュニティ構想とは

(石黒侑介) では、このボールパークでファイターズが挑戦する「スポーツ・コミュニティ」の創造とは具体的にどのようなものでしょうか。

(佐藤拓) 「スポーツ・コミュニティ」はファイターズが企業理念の1つとして掲げているもので、2003年に北海道への移転が決まった時に始まりました。ただ、正直に言えば北海道に来たばかりの段階では、この理念は「上から降ってきた」ものであって、内部から創り上げたものではありませんでした。

(石黒侑介) 先ほど出た「地域密着」はプロスポーツ・ビジネスでもキーワードとして認識されていると思いますが、「コミュニティ」というのは珍しいですし、取り組む上でも難しかったと思います。

(佐藤拓) 我々としても「コミュニティ」という言葉を消化して、その意味を考えるようになるには、それなりに時間が必要でした。17年前に掲げた時に「スポーツと生活が近くにある、心と体の健康をはぐくむコミュニティを実現するために、地域社会の一員として地域社会との共生をはかる」と定義したのですが、古さを感じさせないばかりか、むしろボールパークの建設に取り組む現在の我々に当てはまる、寄り添う理念になったとさえ感じます。

1つ加えるとすれば、これからはスポーツだけでなく、スポーツを通じてその他のコミュニティを創造していかなければならない、我々はコミュニティを広げていく存在でなければならぬと思っています。

(石黒侑介) まさにスポーツ・ビジネスから「まちづくり」への展開と呼べると思いますし、ボールパークがこの核になるのではないのでしょうか。

ところで、ボールパークは「HOKKAIDO BALLPARK F VILLAGE」という正式名称を持っていますが、「タウン」や「シティ」、あるいは「コミュニティ」ではなく、「ビレッジ」にした理由は何でしょうか。

(佐藤拓) 実は20代、30代の若手社員だけが数十人集まって議論して最終的に決めた名称です。私も議論に参加していましたが、確かに「タウン」や「シティ」も候補になっていました。ただ、北広島市という「シティ」の中にある1つの地域になるので、「シティ」や「タウン」というのはスケール感に違和感がありました。そこで最終的に「ビレッジ」になりました。また「F」にも思いが込められています。ファイターズのFだけでなく、ファ

ン、ファミリーのFでもあります。

(石黒侑介) ファイターズのこれからの挑戦、創造性、新規性と、プロ野球チームという本質的なコーポレート・アイデンティティを兼ね備えた絶妙な名称だと思います。ボールパークと名乗ってはいますが、ビレッジというスケール感が、野球だけではなくスポーツ全体を扱う、あるいはスポーツに留まらず、まちづくり、エンターテインメント、それを通じたコミュニティの創造までやる、という可能性を感じさせます。

(佐藤拓) 我々として経験の無いまちづくりにまで踏み込むからこそ、新しいコミュニティを創造できるのだと思っています。その意味では、ボールパークは壮大なまちづくりの社会実験の場とも言えるかもしれません。

(石黒侑介) ボールパークが開業すると、具体的には地域との関係性はどのように変わると期待していますか。コミュニティを理解するためには、「地元」あるいは「本拠地」がどこを指すのかについて考える必要があると思います。北広島市なのか、札幌都市圏なのか、北海道全体なのかという点が気になります。

(佐藤拓) 球団としては、コミュニティとは、ファンクラブ会員、あるいは株主やスポンサー企業であったり、北海道の179自治体全部という考え方もできると思います。ただ、これからはより多角的、多層的なものになっていくと解釈しています。プロ・スポーツというのは特殊な業界だと思っています。ターゲット層が子供からお年寄りまで様々で、いわゆる本拠地以外にもターゲットがいるために商圏が広いので、そもそもコミュニティを統一的、画一的につくることができません。ただボールパークを核にということになると、北広島市、札幌都市圏を中心に、まずは日帰りでボールパークを訪れていただけるエリアということになると思います。

(石黒侑介) その意味では、「サードプレイス」というのも面白い言葉の使い方だと感じます。もちろん、社会学で言うところの「サードプレイス」とは厳密には異なるかも知れませんが、着眼点や発想自体に興味を沸きました。

(佐藤拓) 日常と非日常が共存するという点が、サードプレイスという言い方につながったと思っています。例えば日常で言いますと、ガーデニングを趣味とする地元の方にボールパーク内でガーデニングを楽しんでいただくとか、ウォーキングやランニング、犬の散歩でボールパークを訪れていただくことも、プロ野球の観戦を目的に訪れていただくことと同じくらい重要だと考えています。

(石黒侑介) 同時に、そういった様々なコミュニティは地理的な広がりだけでなく、分野としての広がりも想定できます。

(佐藤拓) まちづくりという意味では、教育や医療、食なども重要だと思っています。もちろん、観光も同様です。新型コロナウイルス感染症の状況を見ますと現実的に期待できる部分とそうでない部分がありますが、今まで取り組んできた台湾に加えて、韓国、さらには香港、タイ、マレーシア、シンガポールなども力を入れたいと考えています。

また、まちづくりの社会実験の場という点では、防災拠点、広域の避難所というのも重要なボールパークの機能です。これは世界的でも初めての試みだと思います。自然災害等が発生した際は、ボールパークで過ごしていただくことを想定しています。我々としても東日本大震災、そして胆振東部地震を経験して、まちづくりの核としてこれを位置づけるという結論になりました。おそらく今後日本国内で整備されるスタジアムやスポーツ施設のコンセプトに影響を与えるのではないのでしょうか。

7. 開業まで3年

(石黒侑介) 実際に着工して、理念や画だったものが具現化してきました。

(佐藤拓) 冬になって大変な条件下で現場の工事を進めていただいています。我々も建設地に行くと、「こんなに寒いんだ」とか、「雪はこれくらい降るんだ」とか、現場のリアルな状況を目の当たりにして考えることが増えます。

(石黒侑介) 北広島市としても数十年に一度と言っても過言ではない規模の開発です。

(佐藤拓) 北広島市とは、このプロジェクトが決定してからずっと一体となって進めさせていただいています。行政組織ですので、我々とは異なる難しさもあったと思うのですが、北広島市が先導してそれらを突破していただいていますので非常に感謝しています。その他にも北海道庁、北海道開発局、J R北海道など、様々な関係者がみな、前向きに議論を進めてくれています。

北広島市では、先日、北広島駅西口の再開発についても構想が出ました。その再開発とボールパークの開発は一体的に進めていくべきものと認識しています。

(石黒侑介) 最後に2021年シーズン、そして今後への展望、抱負をお聞かせ下さい。

(佐藤拓) 毎年、優勝を目指してやっていますが残念ながらここ数年は優勝から遠ざかつ

ています。有原航平選手がメジャーに挑戦するということで抜けてしまいましたが、打線は充実していると思いますし、2021 年シーズンこそは優勝をしたいと思っています。また、若い選手が非常に多いので、一日も早く 1 軍に定着して活躍して、ボールパーク開業を主力として迎えてもらいたいと思っています。北海道出身の選手が活躍することで、道民のみなさんがより一層盛り上がってくださるというのも期待したいです。

ボールパークについては、様々な準備を加速度的に進めつつ、今まで出せなかった情報を順次発信することで、盛り上がりを醸成していきたいと思っています。我々も結構先の話だと思っていたのですが気がつけばあと 2 年というところまで来ています。開業をどう迎えるか、そして開業した後にはどのように展開していくのか、今後いろいろと考えていきたいと思っています。

(石黒侑介) ボールパークというのはスタジアムではなく新しいまちづくり、コミュニティ創造であるという話がありましたが、その意味では北海道の観光にとっても大きな契機と言えると思います。現時点ではプロスポーツ・チームである北海道日本ハムファイターズの挑戦としてとらえられていますが、ともすれば北海道という大きなコミュニティの挑戦、地域や観光との関係性の再構築、再定義のための挑戦と言えるかもしれません。

佐藤様、本日は本当にどうもありがとうございました。

登壇者一覧（発表順）

第1回

小川 巖（おがわ いわお）

エコ・ネットワーク 代表。北海道松前町生まれ。信州大学農学部を経て、北海道大学大学院農学研究科在籍中に、ヒグマ研究グループを創設。1978年から84年まで北海道庁職員。退職後、野生生物情報センターを設立し、1992年から市民環境団体「エコ・ネットワーク」を主宰。市民の立場から野生生物の保全活動、環境保全ボランティア、「フットパス」の実践による歩く文化の普及啓発に取り組む。

下休場 千秋（しもやすば ちあき）

北海道大学観光学高等研究センター 特任教授。1956年大阪府生まれ。筑波大学大学院環境科学研究科修了（学術修士）、博士（芸術文化学、大阪芸術大学）。専門は社会運動論、地域生態計画論、エコツーリズム研究、アフリカ民族文化研究。

第2回

桜庭 佑輔（さくらば ゆうすけ）

環境省東北地方環境事務所十和田八幡平国立公園管理事務所 みちのく潮風トレイル担当。北海道函館市出身。平成17年度環境省入省。平成23年4月に本省国立公園課配属。みちのく潮風トレイル全線を踏査。その後、現地東北にて震災復興事業に従事。現在は、十和田八幡平国立公園にて廃屋撤去による景観回復事業を担う。

相澤 久美（あいざわ くみ）

NPO法人みちのくトレイルクラブ 常務理事兼事務局長。東京生まれ。16歳で渡米、26歳で独立し設計事務所主宰。雑誌編集、映画製作等を手がける。2011年～東北沿岸で取材と中間支援を継続し、2015年～みちのく潮風トレイルの運営計画策定、2017年NPO法人みちのくトレイルクラブ設立。トレイル全線の運営を担う。

木村 宏（きむら ひろし）

北海道大学観光学高等研究センター 教授。1961年東京都生まれ、日本大学文理学部独文科卒。地域マネジメント論演習担当。ロングトレイル開設による地域振興の実践的研究を推進。国内のロングトレイル普及を目的としたNPO法人日本ロングトレイル協会常務理事を務める。札幌市街地を結ぶ周遊歩道「さっぽろラウンドウォーク」の開設を計画。

第3回

廣野 洋（ひろの ひろし）

（一社）阿寒アイヌコンサルン 理事長。釧路市生まれ。阿寒湖アイヌコタンで少年時代を過ごす。後に上京し、アイヌ料理店の運営や首都圏に暮らすアイヌとともに伝統文化の伝承に取り組む。阿寒湖に戻ってから、伝統文化の伝承と普及に力を注ぐ一方、観光を通じた文化伝承と経済的自立の両立に向けた活動を展開。2019 年、アイヌ文化専門のコンサルティング会社「（一社）阿寒アイヌコンサルン」を設立。

岡田 真弓（おかだ まゆみ）

北海道大学観光学高等研究センター 准教授。1982 年東京都生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科修了、博士（史学）。北海道大学アイヌ先住民研究センター博士研究員、同大学創成研究機構特任助教を経て、2020 年より現職。専門は、文化遺産論、先住民族観光、パブリック考古学。

第4回

島田 邦弘（しまだ くにひろ）

埼玉県産業労働部観光課 課長。埼玉県生まれ。埼玉県入庁後、神川町副町長、国際課長などを経て平成30年から観光課長に着任。これまで、地域の活性化や広報業務等を主に担当。業務を通じ「らき☆すた」と出会ったことを契機に、現在では公私を問わず県内各地のアニメのまちおこし活動にコミット。

安藤 彰紀（あんどう あきのり）

おおつちバラエティショー実行委員会 企画プロデューサー。福島県生まれ。岩手県在住。2014 年に兎塚エイジ氏デザインによるオリジナルアニメ「曲花村役場(仮)」を開始、2015 年から「おおつちバラエティショー」を開始し、アニメ、実写、演劇、音楽、体験移住等を活用したメディアミックス地域おこしを実施中。

山村 高淑（やまむら たかよし）

北海道大学観光学高等研究センター 教授。静岡県生まれ。2008 年より国内外をフィールドにコンテンツ・ツーリズムの実践的研究に携わる。「埼玉県アニメツーリズム検討委員会」座長（2009-2014）、「埼玉県アニメの聖地化プロジェクト会議」座長（2014-2016）、おおつちバラエティショー特別顧問（2017-）などを務める。

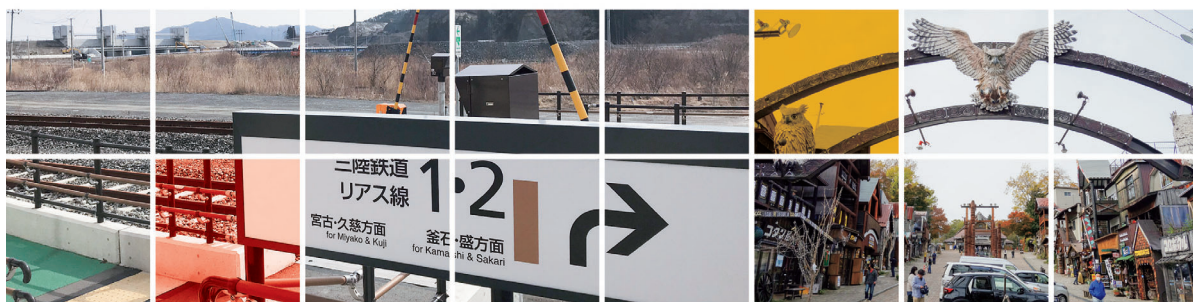
第5回

佐藤 拓（さとう たく）

㈱ファイターズ スポーツ&エンターテイメント 事業統括本部コーポレート・ビジネス部 部長。北海道出身。2002年中央大学卒業後、日本ハム球団㈱（現㈱北海道日本ハムファイターズ）に入社。2004年北海道に球団が誕生後、イベントプロデュース、選手マネジメント、地域コミュニティ活動等、プロスポーツビジネス全般に従事。2019年より㈱ファイターズ スポーツ&エンターテイメントに所属し、主にスポンサーシップおよび事業パートナー誘致を担当。

石黒 侑介（いしぐろ ゆうすけ）

北海道大学観光学高等研究センター 准教授。1982年東京都生まれ。横浜国立大学国際社会科学部国際関係法専攻修了。修士（国際経済法学）。財団法人日本交通公社（現公益財団法人日本交通公社）を経て、2014年、北海道大学観光学高等研究センター特任准教授。2016年より現職。2017年より、スペイン・バルセロナ大学ホテル観光学院連携客員教授を兼任。専門は観光政策、観光組織、観光地経営論。



2020 年度公開講座

観光現場の挑戦

開講期間 2020 年 12 月 1 日(火)～2021 年 1 月 12 日(火)

毎週火曜日／全 5 回 18:30～20:00(各回 1 時間 30 分)

オンライン開催／申込期限 11 月 29 日(日)

※個別回のための受講も可

今日、観光は娯楽の他、地域振興、文化交流、平和外交、外貨獲得などの多様な役割を担うようになりました。社会情勢との密接なつながりを強めていった観光は、同時に、地域課題、経済状況、自然災害、歴史問題、治安などの諸問題とも向き合うことになります。困難に立ち向かい、悩みながらも「人と人との交流」を守り続ける観光現場。今も現場で挑み続けているゲストとの対談を通じて、観光の未来について考えます。



caits
Center for Advanced Tourism Studies
HOKKAIDO UNIVERSITY

北海道大学
観光学高等研究センター

開催日時

第一回目

12月1日(木)

[18:30-20:00]

「環境と観光 — 市民活動としての環境保全とフットパス」

ゲスト：小川 巖氏 (エコ・ネットワーク 代表)

担当教員：下休場千秋 (観光学高等研究センター 特任教授)

小川 巖氏 略歴

北海道松前町生まれ。信州大学農学部を経て、北海道大学大学院農学研究科在籍中に、ヒグマ研究グループを創設。1978年から84年まで北海道庁職員。退職後、野生生物情報センターを設立し、1992年から市民環境団体「エコ・ネットワーク」を主宰。市民の立場から野生生物の保全活動、環境保全ボランティア、「フットパス」の実践による歩く文化の普及啓発に取り組む。



第二回目

12月8日(木)

[18:30-20:00]

「町をつなぎ人をつなぐ、1,025kmのみちづくりへの挑戦」

ゲスト：桜庭 佑輔氏 (環境省東北地方環境事務所十和田八幡平国立公園管理事務所 みちのく潮風トレイル担当)

相澤 久美氏 (NPO法人みちのくトレイルクラブ 常務理事兼事務局長)

担当教員：木村 宏 (観光学高等研究センター 教授)

相澤久美氏 略歴

東京生まれ。16歳で渡米、26歳で独立し設計事務所主宰。雑誌編集、映画製作等手がける。2011年〜東北沿岸で取材と中間支援を継続し、'15年〜みちのく潮風トレイルの運営計画策定、'17年NPO法人みちのくトレイルクラブ設立。トレイル全線の運営を担う。



桜庭佑輔氏 略歴

北海道函館市出身。十和田八幡平国立公園管理事務所 国立公園保護管理企画官。平成17年度環境省入省。平成23年4月に本省国立公園課配属。みちのく潮風トレイル全線を踏査。その後、現地東北にて震災復興事業に従事。現在は、十和田八幡平国立公園にて廃屋撤去による景観回復事業を担う。



第三回目

12月15日(木)

[18:30-20:00]

「観光を通してアイヌ文化の継承を目指す — 阿寒アイヌコタンの挑戦」

ゲスト：廣野 洋氏 (阿寒アイヌコンサル 理事長)

担当教員：岡田 真弓 (観光学高等研究センター 准教授)

廣野 洋氏 略歴

北海道釧路市生まれ。阿寒アイヌコタンで少年時代を過ごす。後に上京し、アイヌ料理店の運営や首都圏に暮らすアイヌとともに伝統文化の伝承に取り組む。阿寒湖に戻ってから、伝統文化の伝承と普及に力を注ぐ一方、観光を通じた文化伝承と経済的自立の両立に向けた活動を展開。2019年、アイヌ文化専門のコンサルティング会社「(一社)阿寒アイヌコンサル」を設立。



第四回目

12月22日(木)

[18:30-20:00]

「ツーリズムを通じた心の復興に向けて — 埼玉県と大槌町の挑戦から」

ゲスト：島田 邦弘氏 (埼玉県産業労働部観光課 課長)

安藤 彰紀氏 (おおつちバラエティショー実行委員会 企画プロデューサー)

担当教員：山村 高淑 (観光学高等研究センター 教授)

島田邦弘氏 略歴

埼玉県生まれ。埼玉県入庁後、神川町副町長、国際課長などを経て平成30年から観光課長に就任。これまで、地域の活性化や広報業務等を主に担当。業務を通じ「らき☆すた」と出会ったことを契機に、現在では公私を問わず県内各地のアニメのまちおこし活動にコミット。



安藤彰紀氏 略歴

福島県生まれ。岩手県在住。2014年に兎塚エイジ氏デザインによるオリジナルアニメ「曲花村役場(仮)」を開始、2015年から「おおつちバラエティショー」を開始し、アニメ、実写、演劇、音楽、体験移住等を活用したメディアミックス地域おこしを実施中。



第五回目

2021年 1月12日(木)

[18:30-20:00]

「ボールパークで実現する新たなコミュニティの創造 — ファイターズの挑戦」

ゲスト：佐藤 拓氏 (㈱ファイターズ スポーツ&エンターテインメント 事業統轄本部コーポレート・ビジネス部 部長)

担当教員：石黒 侑介 (観光学高等研究センター 准教授)

佐藤 拓氏 略歴

北海道出身。2002年中央大学卒業後、日本ハム球団(現・現北海道日本ハムファイターズ)に入社。2004年北海道に球団が誕生後、イベントプロデュース、選手マネジメント、地域コミュニティ活動等、プロスポーツビジネス全般に従事。2019年より㈱ファイターズスポーツ&エンターテインメントに所属し、主にスポンサーシップおよび事業パートナー誘致を担当。



開催方法

オンライン開催
(ウェビナー)
受講料無料

申込方法

右のQRコード、または以下のURLにアクセスし、11月29日(日)までにお申し込みください。
URL ⇒ <https://forms.gle/tng6KpochF91pJAM7>



主催・お問い合わせ先

北海道大学観光学高等研究センター [info\(at\)cats.hokudai.ac.jp](mailto:info(at)cats.hokudai.ac.jp)
* (at) 部分を@に置き換えてご送信ください。
* タイトルに「公開講座について」と記載してください。

編者一覧

岡田 真弓（おかだ まゆみ）

前出。

山村 高淑（やまむら たかよし）

前出。

木村 宏（きむら ひろし）

前出。

下休場 千秋（しもやすば ちあき）

前出。

石黒 侑介（いしぐろ ゆうすけ）

前出。

岡田真弓，山村高淑，木村宏，下休場千秋，石黒侑介 編

『2020 年度公開講座講演・対談録 観光現場の挑戦』

CATS 叢書第 14 号，北海道大学観光学高等研究センター

2021 年 3 月 31 日 発行

発行：北海道大学観光学高等研究センター

〒060-0817

北海道札幌市北区北 17 条西 8 丁目

TEL 011-706-5382

印刷：柏楊印刷株式会社

装丁：前田弘志（バナナムーン・ステュディオ）

表紙写真：岡田真弓，山村高淑，木村宏，下休場千秋，石黒侑介

